もしも竈門炭治郎のもとを訪れたのが比古清十郎だったら

オサレの伝道師

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

飛天は高く舞い、鬼を狩る。

目次

飛天立志篇
最期の飛天 1
鬼を連れた流浪人 6
鬼斬り抜刀斎 10
鬼舞辻無惨の天敵 15
二つの御技 21
人斬り…？ 28
三兄妹を守る飛天 35
那田蜘蛛山～柱邂逅編
日天（兄）と暁天（妹） 43
日天と毒蝶 50
寵児と怨児 58
寵児と怨児　弐ノ型 68
日天とお館様 78
日天の提案 87
日天稽古 96
日天と柱編
日天と炎柱 107
飛天は壮大 117
日天と拳鬼 126
日天の産声 136
日天の夜明け 146

飛天立志篇
最期の飛天

”陸(おか)の黒船”。
それは、一対多数の戦いを得意とする実戦本位の殺人剣――飛天御剣流のことである。
時代の苦難から弱き人々を守ることを流派の理とし、飛天御剣流の継承者はそれに従って剣を振るってきたとされている。
しかし、それは明治時代までのこと。
時代は移ろい、大正時代となった日本国では、飛天御剣流を必要としていない。

☆☆☆☆☆

「まだ、飛天御剣流はこの世に必要とされているのか…」
飛天御剣流の最後の使い手――十三代・比古清十郎は、とある雪山にて1人の少年に出会った。
比古清十郎がその少年を見つけた時、その少年は鬼にされてしまった妹から襲われていたそうだ。
剣術を必要としていない世界で比古清十郎は久方ぶりに刀を抜き、鬼と化して兄を襲おうとする妹を救う為に、夜明けを思わせる色に染まった曙色の刀で斬りかかった。
「!」
だが、比古清十郎は鬼になった妹に斬りかかるも、動きを止める。
いったい何故、動きを止めたのか…。
「小僧…何故、庇う?」
「こ、この子は俺の妹だ!妹なんだ!」
比古清十郎が助けようとした少年は、妹に斬りかかろうとする比古清十郎の姿に気付くや否や、妹を庇っていた。

それ故に、比古清十郎は動きを止めたのである。
「それは見ていて知っている。
だが、お前の妹は鬼だ。人間に襲いかかり、喰らう鬼。多少だが、鬼について知っているが、一度鬼になってしまったが最後…人間に戻ることはない」
鬼となってしまった妹。
それでも、少年は妹がまだ人間としての意思を持っていると信じている。だからこそ、刀を前にしても妹を庇うことができたのだろう。
「け、けど、禰豆子は人を喰ったりなんてしない！
い、今だって俺のことをわかっていた！泣いていたんだ！禰豆子は必死に抗ってる！禰豆子は絶対に鬼になったりはしない!!」
だから少年は、必死に比古清十郎に理解してもらおうとする。腕の中で未だに暴れる妹を押さえ込みながら…。
「小僧、お前はそれをどうやって証明する？
妹は未だに血肉を求めているようだが？」
「そ、それは」
しかし、比古清十郎を納得させることはできない。当然だ……少年にはそれを証明する術がないのだ。
「俺が今からそれを見極めてやる」
比古清十郎は、妹がまだ人間としての意思を持っているのかを確かめるべく、再び刀を抜き行動に出る。
「え――あぐッ!?」
鬼がまず最初に求めるのは、大半が身内なのだそうだ。鬼にとって、特に栄養価が高いのだそうだ。
もし、血を流している兄が目と鼻の先にいたら鬼はどう行動するのか……答えはほぼ決まっている。
「！」
比古清十郎は、少年に辛い現実を見せる為に傷を負わせた。少年の肩から流れ落ちる血が、鬼となった妹の本能を呼び起こすからだ。
鬼は人を喰らう。それは千年も前から明確だ。
だが、比古清十郎の常識はたった今、この兄妹に覆された。

「お前は…人か…」
血を流す兄を庇うように立つ妹は、紛れもなく人。
飢餓状態でありながらも、血肉を求めることなく、傷つけられた兄を助けようとしている。圧倒的な強者である比古清十郎に牙を剥いている。

比古清十郎は、この兄妹に強い関心が湧いた。
人を喰わない鬼を、比古清十郎は初めて見た。鬼が人に戻るなど、聞いたことも見たこともない。
だからこそ、見てみたいと思ってしまった。
「小僧、妹を元に戻す覚悟…お前にはあるか？」
「ッ…あ、あります！」
「ならば、お前に俺の剣を教えてやる」
かつて、明治を築き、明治を救った飛天御剣流。
最期の使い手が今……ここに誕生する。

☆☆☆☆☆

ある日、何の前触れもなく家族を惨殺され、唯一生き残った妹を鬼にされてしまった少年――竈門炭治郎は、飛天御剣流の使い手と出会った。
そして、竈門炭治郎は鬼になってしまった妹を人間に戻すべく、そして弱き人々を鬼から助けるべく、その飛天御剣流の最期の弟子となった……のだが…。
「し、師匠…鬼です。アナタは鬼より鬼です」
「あ？
バカ弟子が…俺を鬼と一緒にするな。神のように崇めろ」
飛天御剣流の修行は想像を絶するほどのもので、竈門炭治郎は人間をやめる覚悟で修行に明け暮れていた。
竈門炭治郎が妹の禰豆子を人間に戻すには、鬼と戦わなければなら

ないが、比古清十郎は鬼よりも鬼だったようだ。
人間を遥かに凌ぐ身体能力と特殊な術を使う鬼を相手にするには、”日輪刀”という特殊な刀と、鬼と対等に渡り合う身体能力を得る為の”呼吸法”が必要とされているそうだが、竈門炭治郎はその呼吸法をたった3ヶ月で身体に直接叩き込まれたようだ。比古清十郎が何故、その呼吸法を知っているのか……曰く、天才だから一目見ただけで会得したとのことだ。
ただ、その呼吸法に関しては竈門炭治郎も父親から聞いた覚えがあるらしく、それを比古清十郎に話したところ、飛天御剣流には劣るもののそれに近しい力を持った剣術を竈門家が何故か先祖代々受け継いでいたことが発覚し、竈門家に舞として受け継がれていたそれを炭治郎から見せてもらった比古清十郎が完璧に再現し、炭治郎は飛天御剣流と並行して”ヒノカミ神楽”という舞――剣術を会得させられたそうだ。
期間にして僅か半年……炭治郎は何度も死にかけた。
ちなみに、鬼になってしまった禰豆子だが、今は深い眠りについており、まったく目を覚まさないようだ。いつ目を覚ますのか……比古清十郎にもそれはわからないらしい。
そもそも、比古清十郎は鬼の専門家ではない。たまたま鬼に襲われていた者を助けたり、自らが鬼に遭遇したり、その過程で呼吸法を知り、日輪刀を手に入れたのである。
それと、鬼を狩る専門の組織は政府非公認ではあるが存在しており、鬼と熾烈な戦いを繰り広げているのだそうだ。ただ、比古清十郎はどのような理由があろうと組織に属することを拒否しており、独自に鬼を狩っている。恐らく、炭治郎も同じ道を歩むことになるのだろう。
「ほら、さっさと立てバカ弟子」
妹を鬼にされた流浪人として、竈門炭治郎は妹を人間に戻すべく険しい道を歩むこととなる。
ただ、鬼を相手にするよりも師匠との修行が厳しいかもしれないのは如何なものか…。

炭治郎が長男でなければ乗り越えられていなかっただろう。

鬼を連れた流浪人

赫灼の髪と瞳の少年が手にした刀が、明けの空を思わせる曙色に染まる。

「ふむ…俺よりも濃い曙色か…生意気な」

「ええ…そ、そんなこと言われても」

飛天御剣流、ヒノカミ神楽。

二年間の地獄の修行で、二つの流派を体の真髄まで叩き込まれた赫灼の少年――竈門炭治郎。

血反吐を吐き、何度も死にかけながらも、比古清十郎の修行を乗り越えた炭治郎は、一回り……いや、二回り以上、見違えるほどに逞しく成長した。

二年前、鬼に家族を惨殺され、唯一生き残った妹を鬼にされてしまった悲劇の少年となってしまった炭治郎は、最強の暗殺剣とされる飛天御剣流の使い手である比古清十郎と出会い、迎え入れられた。

時代の苦難から弱き人々を守ることを流派の理とする飛天御剣流は炭治郎に相応しく、比古清十郎は炭治郎ならば正しく受け継いでくれると思ったのだろう。

比古清十郎も鬼という存在は知っており、何度か遭遇したことがあるそうで、専門家ほどではないにしろ、鬼の倒し方など、鬼と戦う上で必要な技術は、自画自賛する天才性で会得していたそうだ。そのおかげで、炭治郎は飛天御剣流の他に、竈門家に伝わる舞や、鬼との戦いで必要な”呼吸術”を会得することができたようだ。

その炭治郎が辛い二年間の修行を終えて、比古清十郎から免許皆伝を受けた。

「これからお前が相手にするのは異能の鬼だ。

人間が思いもよらない能力を持っている。その鬼の首領ともなれば、俺など取るに足らん存在だろう」

「あの…師匠と比べたら鬼が赤子に思えるんですが」

ただ、比古清十郎の修行が如何に厳しく、地獄だったのか、炭治郎

の悲壮感漂う表情が物語っている。本来、修行を終えて悲壮感が漂うなどおかしいことなのだが、炭治郎が比古清十郎を鬼よりも鬼だと思うほどに鬼畜だったのだろう。
「俺はお前に感謝されこそすれど、怨み言を言われる筋合いはないはずだが？」
「本当に感謝はしてますよ!!」
鍛えてもらった。剣術も教えてもらった。比古清十郎のおかげで、竈門家に伝わる舞を途切れさせずに受け継ぎ、炭治郎の父のように舞えるようにまでなった。炭治郎は、比古清十郎と強く感謝している。それでも、感謝はしてるが……怨み言はその倍かもしれない。
炭治郎は厳しい修行によく耐えたものだ。
しかし、比古清十郎が何故、炭治郎に厳しい修行を課したのか……それは決して、炭治郎を憎んでいるからなどではない。全ては炭治郎の為なのだ。
「炭治郎、覚えておけ。
俺がお前に飛天御剣流を教えたのは、お前を不幸にする為ではない」
「！
はい。師匠、本当にありがとうございます」
炭治郎は比古清十郎から全てを教わった。
厳しい修行を乗り越えた。
あとは、己次第。
鬼にされてしまった妹――竈門禰豆子を人間に戻す為に、炭治郎は剣を振るう。
鬼という脅威から人々を救う為に、飛天御剣流を振るうのだ。
「死ぬなよ、炭治郎、禰豆子」
「む！」
「はい！
必ず禰豆子を人間に戻して、師匠に会いに来ます!!」
少年が大きく成長し、旅立つ時が来た。

☆☆☆☆☆

鬼……それは、人間を主食とする悪しき生き物。人間に仇なす存在である。

鬼殺隊……それは、人間を遥かに凌ぐ身体能力を持った鬼を相手に、悪鬼滅殺を掲げて戦う組織だ。

鬼と鬼殺隊は、闇夜の世界で千年も前から死闘を繰り広げている。

相反する鬼と鬼殺隊。しかし、その二つの存在にとってあまりにも異質な存在がいた。

「師匠から鬼殺隊には入隊するなって言われたから、地道に行くしかない。

それに、鬼殺隊の隊士達はほとんどが鬼に身内を殺されてるから…禰豆子を連れた俺は敵も同然だ」

その鬼を滅することを目的としつつも、鬼を連れ歩く異端な存在――竈門炭治郎と竈門禰豆子。炭治郎は、鬼にされてしまった妹の禰豆子を人間に戻すべく、共に険しい道を歩み出した。

飛天御剣流の最期の継承者にして、先祖代々竈門家に伝わるヒノカミ神楽の継承者が、鬼を滅する。

☆☆☆☆☆

地面から襲いかかる三体の鬼。

人間を遥かに凌ぐ身体能力を持ちながら、たった一人の人間相手に複数で襲いかかるなど、あまりにも卑劣。だが、これが鬼なのだ。思考回路が人間とはまったく異なっている。人間を食べる為ならば、鬼はどれだけ卑怯、卑劣であろうとも、本能の赴くままに行動する。

だからこそ、鬼は恐れられるのだ。

――飛天御剣流・龍巻閃――

しかし、その三体の鬼は一瞬にして頚を斬られてしまった。回転に

よる遠心力を利用した剣技で、瞬く間に頚が斬り落とされてしまったのだ。
すると、頚を斬り落とされた鬼の体が灰のように跡形もなく朽ち果てていく。鬼は、特殊な刀で頚を落とす以外では、日光でしか滅することができないのである。
鬼を滅する刀――日輪刀。鬼と戦う鬼殺隊の隊士が持つ特殊な刀である。
その日輪刀、鬼殺隊に所属せずに持ち、鬼を狩る剣士が一人いた。鬼を連れた異端な剣士――竈門炭治郎。
「師匠のおかげだな。
鬼の動きが止まって見えた」
夜明けを思わせる曙色に染まった日輪刀を鞘に納めた竈門炭治郎は一息吐き、月を見上げていた。
「それにしても、話を聞く暇すらなかったな。
やっぱり、俺個人で鬼と戦い続けるのには無理がある気がする。かと言って、鬼殺隊に入るわけにはいかないし、迎え入れられるとも思えない。どうすべきなんだろう…」
鬼にされた妹を人間に戻すべく、険しい道を歩む炭治郎は、己の見通しの甘さと、厳しい現実を実感し焦燥感にかられていた。しかし、これは炭治郎が自ら選んだ道。もう、後戻りすることなどできない。
「!」
そんな炭治郎のもとに、一匹の烏が飛んでくる。
ここから、己を取り巻く環境が大きく変わることを……炭治郎は知る由もない。

鬼斬り抜刀斎

鬼を連れた流浪人――竈門炭治郎。
彼は現在、暗い森の中で大勢の鬼に囲まれていた。
「けへへへへ、獲物がまた1人。しかも1人でやって来るとは…間抜けな隊士だぜ!!」
「ガキじゃねェか！
せめて小娘の隊士だったら良かったのによォ!!」
鬼は基本的に、極めて独善的で自己本位的な性格であり、同じ鬼同士での同族意識や仲間意識などは皆無。寧ろ、同族の事を互いに餌や立場を巡って争うライバルとしか認識しておらず、一つの集団や種族としては殆ど成り立っていない。
「鬼は徒党を組むことはないはずじゃ…？
(それよりも、俺…鬼殺隊の隊士と勘違いされてる？
どうして…あ、”鋏鴉”を連れてるからか)」
その鬼達が何故、徒党を組んでいるのか…。
「に、逃げて!!」
「は、早く逃げるんだ!!」
その理由は、たまたまの偶然である。
どうやら、この近くに存在する幾つかの村で、それぞれ別々の鬼による被害が発生していたらしく、それぞれの村に別々に鬼殺隊の隊士が派遣されたらしいのだが、その隊士達が揃いも揃って鬼を仕留め損ね、取り逃がしてしまったのだそうだ。
そして、その鬼達が逃げ去った方向――この森に、縄張り争いをする複数の鬼がおり、その鬼達が逃げ延びた鬼から鬼殺隊の隊士がこの森に向かっていることを知らされたのである。
その結果、鬼達は鬼殺隊の隊士達を皆殺しにすべく、徒党を組んだのだ。正確には、早い者勝ちという思考が真っ先に働いたのだろう。殺した隊士を横取りしようと考えている鬼もいる。実に、独善的な鬼らしい思考だ。

「あぐ…こ、殺さ…ないで…」
「ひ…い、いや…死にたくない」
ただ、連携などまったく取れていない鬼ではあるが、鬼殺隊の隊士4人に対し、鬼が10体と数で勝っており、隊士達は危機に瀕している。
炭治郎がこの森の近くにいなければ、間違いなく殺されていたはずだ。
「あまり、鬼殺隊の前では戦いたくなかったけど、今回は仕方ない」
「に、逃げッ――」
しかし、逆もまた然りだ。
炭治郎がこの森の近くにいなければ、鬼達は今頃……食事にありつけていたはず。

――飛天御剣流・龍猛閃――

鬼が10体いようと、炭治郎にとっては些細な問題でしかないのだ。
「え？
（鬼の頚が…1体…え？
5体…あれ？
全部…頚が斬り落とされてる…？）」
鬼に殺されそうな状況でありながらも、炭治郎の身を案じた女性の隊士（隊士の鑑）は、瞬きなど一切していない。それなのに、目で動きをまったく追うことができず、気付くと全ての鬼の頚が斬り落とされており、炭治郎は抜刀した瞬間すら視認させることなく、日輪刀を鞘に納めていた。
誰も、炭治郎が日輪刀を振るった瞬間を捉えることはできていない。
斬られた鬼すらも、何が起きたのか理解することなく体が朽ち果て、跡形もなく消え去っている。
「ふう…禰豆子を元に戻せる方法を知っていそうな強い鬼はいない…

か…」
これが、飛天御剣流。
一対多数の戦いを得意とし、最少の動きで、一撃のもとに終焉をもたらす暗殺剣の境地。
「やっぱり、お前が言っていた浅草に行くべきなのかな?」
「ソ、ソレガイイ!
浅草ァ!浅草ァ!」
この日を境に、鬼殺隊内でとある噂が広がる。
赫灼の髪と瞳、額に痣を持ち、市松模様の羽織を羽織った”柱”並に強い隊士が存在するという噂が…。
しかし、その噂の隊士……いや、真実を知るのは、鬼殺隊の最高管理者のみ。柱並に強い一般人が存在するなど、誰も思うまい。
「仕方ない。
浅草に行くか…」
飛天御剣流の最期の使い手である炭治郎と鬼殺隊の間に、少しずつ繋がりができていく。

☆☆☆☆☆

「な…何だ…これは…。
(ま、街は…こんなにも発展しているのか!?
明るい!眩しい!目がチカチカする!!)」
炭治郎は未知なる都会(浅草)にやって来ていた。
何故、炭治郎が浅草を訪れているのか……それは数日前、炭治郎のもとに喋る鴉が現れたのが事の発端だ。
その喋る鴉は、鬼殺隊で伝令役として使役されている”鋏鴉”というものだそうで、鬼殺隊の最高管理者――通称”お館様”が炭治郎に向けて放ったのだそうだ。炭治郎も喋る鴉に最初こそ驚いていたが、鬼が存在するのだから喋る鴉がいてもおかしくないとすぐに納得……受け入れたらしい。
そして、炭治郎はこれをきっかけに飛天御剣流の使い手と鬼殺隊の

繋がりを知ることとなった。
どうやら、飛天御剣流の使い手は鬼殺隊のお館様から、鬼殺隊に加わってほしいと何度も勧誘されているらしく、炭治郎の師匠も何度もしつこく勧誘されていたのだそうだ。
きっかけは、飛天御剣流の使い手が鬼殺隊隊士を助けたから……どこにでもありそうな、ありふれた簡単な話である。ただ、助けられたのが鬼殺隊の最高戦力に数えられる”柱”で、炭治郎の師匠の先々代がとても強い鬼を倒したが故に、お館様は何としても飛天御剣流の使い手に鬼殺隊に加わってほしいのだそうだ。
ちなみに、炭治郎の師匠も隊士を助けたことがあるらしく、日輪刀を所持していたのも、炭治郎が日輪刀を手に入れることができたのも、そういった理由なのだそうだ。
もちろん、飛天御剣流の使い手は組織に加わることを頑なに拒み続けたそうだ。しかし、時代の苦難から弱き人を助けることを流派の理としている為に、鬼による被害は無視することができず、その結果……鬼殺隊には加わらないが鬼を狩るということで、日輪刀を貰い受けたのだそうだ。
つまり、持ちつ持たれつの関係である。
だが、お館様は未だに諦めてはいない。竈門炭治郎という新たな飛天御剣流の使い手を鬼殺隊に加えるつもりでいる。恐らく、鬼殺隊内で飛天御剣流を広めたいのだろう。
「め、目眩がしてきた…」
都会慣れしていない、まだ幼い少年ではあるが、飛天御剣流の使い手が強大な力を持った剣士であることは明白。
数日前に、炭治郎が複数の鬼を瞬殺したことで、ますます欲しくなったことだろう。
飛天御剣流の使い手が鬼殺隊に加わることは決してないが、それでも諦めることはないだろう。
何より、竈門炭治郎はある意味……鬼殺隊にとって特別な存在なのだ。
「！

（ど、どうしてッ!?こ、この匂いは間違いない！こんな所にいるなんて！奴がいる！）」
優れた嗅覚を持つ炭治郎は、家族が惨殺された場所で家族以外の匂いを嗅ぎ取っていたのだそうだ。そしてその匂いこそ……家族を惨殺し、禰豆子を鬼にした忌まわしき仇敵のもの。
「鬼無辻…無惨!!」
鬼殺隊にとって、最強にして最大の敵。鬼無辻無惨と遭遇し、生き残った者は1人を除いて存在しない。
炭治郎は唯一、その鬼無辻無惨を追う術を持っている。鬼殺隊が、喉から手が出るほど欲しがるはずだ。
「禰豆子、何があっても…俺がいいと言うまで出てきたら駄目だからな」
しかし、炭治郎も鬼殺隊に加わるつもりは一切ない。
彼にとって、一番の目的は禰豆子を人間に戻すことなのだ。
「禰豆子、兄ちゃんが必ず…お前を人間に戻してやる」
大都会浅草が、混沌と化す。

鬼舞辻無惨の天敵

鬼舞辻無惨。
人喰い鬼の始祖であり、鬼達の首領。
鬼殺隊が千年という長きに渡り打倒を目指す最終目標。
「もう少し…ッ、あれか!?」
そして、竈門炭治郎の家族を惨殺し、妹の禰豆子を鬼にした因縁の相手である。
その鬼舞辻無惨が、炭治郎の目と鼻の先にいる。
これはまたとない機会だ。鬼にされてしまった禰豆子を人間に戻す為の…。
「…!
(こ、子供を抱えている!?
そ、それに、横にいるのは奥さんか!?
人違い!?い、いや、間違いない!)」
だが、炭治郎は鬼舞辻無惨をその眼で捉えたところで足を止めた。
「あれが…鬼舞辻無惨ッ!
(禍々しく悍ましい…多すぎる血の匂いがする!
俺の家族を…禰豆子を…ふう、ふう、が、我慢しろ炭治郎。今は我慢だ。俺は長男だ。我慢しろ。
何をするにしても、ここは場所が悪すぎる)」
昂る気持ちを必死に抑え込み、冷静に仇敵を見据えている。
大都会浅草のど真ん中で、炭治郎と鬼の首領が戦ったらいったいどうなるか……間違いなく甚大な被害が出るだろう。多くの悲しみが生まれてしまう。
何より、ここで炭治郎が鬼舞辻無惨に斬りかかることで、それを利用して炭治郎が悪人に仕立て上げられてしまうことだけは避けなければならない。人間社会に溶け込み生きている鬼舞辻無惨は狡猾だ。今この場にいる者達を利用するなど容易いだろう。
故に、炭治郎はただ静かに鬼舞辻無惨の後を追っていく。

もし、炭治郎が比古清十郎の弟子でなかったら、我慢できずに斬りかかっていたかもしれない。元々、炭治郎が我慢強い性格だったのもあるだろうが、比古清十郎の修行は精神面でも炭治郎を大きく成長させていたようだ。

ただ、炭治郎にとって想定外だったことが二つだけある。炭治郎からの視線に、鬼舞辻無惨は気付いていたのだ。

「!!

(き、気付かれた!?)」

陽に当たることができず、活動するのは夜のみだが、鬼舞辻無惨の人生経験値は炭治郎の想像を遥かに超える。寧ろ、想像すらできないだろう。

もっとも、炭治郎が己の頚を狙う者だとは思っていない。

何故なら、鬼舞辻無惨の外見を知る人間は誰一人としていないからだ。

炭治郎が鬼舞辻無惨の正体を見抜けたのは、嗅覚が優れていたからで、匂いを覚えていたからである。

家族を惨殺し、禰豆子を鬼にした憎き仇敵の匂いを炭治郎が忘れるはずがない。

「!!

(あ、あの耳飾りはッ!?)」

だが何の因果か……鬼舞辻無惨にとって、炭治郎は因縁の相手だったようだ。

正確には、炭治郎が耳に付けている花札のような耳飾りを通して、鬼舞辻無惨は別の誰かを見ている。いや、心から恐れている。

「ッ――!

(ぼ、亡霊め!!)」

鬼の首領が人間を恐れているなど炭治郎も思うまい。もし、炭治郎の師匠と鬼舞辻無惨が戦ったことがあったとしたら、炭治郎は納得していただろう。炭治郎にとって、比古清十郎は鬼よりも鬼なのだ。

しかし、実は存在したのである。

比古清十郎でも、先代の比古清十郎達でもなく、それ以外に……鬼

よりも強い人間が一人だけ。
鬼舞辻無惨は、未だにその人間を恐れ続けている。遥か昔に死んだはずの人間を…。
「!?」
そして、炭治郎にとってのもう一つの想定外。
これもまた何の因果か…。
トラウマを掘り返された無惨が、炭治郎の目の前でトラウマを掘り返したのである。
炭治郎の目の前で、鬼舞辻無惨は通り過ぎた男性の頚を引っ掻いたのだ。見たところ、軽い引っ掻き傷でしかない。殺された……一瞬こそそう思った炭治郎だったが、鬼舞辻無惨の腕の動きを捉えることができていた炭治郎は、不可解な行動を疑問に思うも、すぐにその理由を知ることとなる。炭治郎の目の前で、突如として正気を失い妻に襲いかかる夫……その光景に驚愕し、愕然とし、炭治郎は禰豆子が鬼になった瞬間を思い出す。
「な…何てことをッ――鬼舞辻無惨!
お前は、命を何だと思っているんだ!?
(あの人はただこの道を通っていただけなのに!!)」
「!?
(お、お前は死んだはずだ!どうして生きて…い、いや、たまたま同じ言葉をッ――ふ、震えているのか…この私がガキ一人に恐怖しているのか!?)」
今宵は、竈門炭治郎と鬼舞辻無惨にとって、決して忘れることのできない日となっただろう。
竈門炭治郎は鬼舞辻無惨をその瞳に捉え、己が絶対に討ち滅ぼす敵であることを認識した。
鬼舞辻無惨はまだ幼い少年に、唯一己を殺す一歩寸前まで追い込んだ化け物の姿を重なって見てしまった。
ただ一つ違うのは、炭治郎と鬼舞辻無惨の現在の心情だろう。
「必ず…お前の頚を斬り落とす。
天翔ける龍の牙からは絶対に逃れられないぞ。

（禰豆子…ごめん。
今は、鬼舞辻無惨に鬼にされてしまったあの人を…）」
炭治郎は憎き仇敵を前にしながらも、禰豆子を人間に戻すことができるかもしれない絶好の機会を前にしながらも、飛天御剣流の流派の理に忠実にあり続けた。弱き人々の命と、己にしかできないことを優先し、鬼にされてしまった男性のもとへと駆け出した。
すれ違う際に言葉だけを残し、炭治郎は命を助けに行く。
「おとうさん？」
「月彦さん？どうしたの？」
通り過ぎる炭治郎を背に、鬼舞辻無惨は喉元に刃を突きつけられたような……いや、それ以上に強大で得体の知れない何かに雁字搦めにされたような恐怖を感じていた。
体を雁字搦めにする細いそれは、例えるなら……そう、龍の髭。
恐れ多くも、己を限りなく完璧に近い生物だと自負する鬼舞辻無惨は、その傲り故に龍の髭を撫でてしまった。
龍の怒りを買ってしまったのである。
もう決して逃れることはできない。
天翔ける龍が日輪と共に獲物を狙っている。

☆☆☆☆☆

大都会浅草のど真ん中で漂う香り…。
「!?
（こ、これは血鬼術！
…！
だ、だけど…どういうことだ？鬼舞辻無惨や、俺が戦った鬼のような禍々しい匂いがしない。寧ろ…人間に近い）」
鬼舞辻無惨に鬼にされてしまった男性を取り押さえていた炭治郎は、複数の警官に囲まれてしまっていた。
突如として豹変し、夫に噛みつかれ傷を負わされた妻もおり、どのようにこの場を切り抜けようかと炭治郎は必死に考え込んでいた

……そんな慌ただしい状況で、その場に更なる混乱が…。
「あなたは…愛する者にも襲いかかり喰らおうとする鬼に、人という言葉を使ってくださるのですね。
そして、必死に助けようとしている。ならば…私も慈悲深いあなたを手助けしましょう」
しかしその混乱は、炭治郎にとって大きな助けとなる。
炭治郎はこの日、憎き仇敵とだけではなく、頼れる存在とも出会うこととなった。
「あなたは…けど、どうして?」
「そう…私も鬼です」
そして奇しくも、頼れる存在もまた鬼。
「ですが、命を救いたいと思う医者でもあります」
ただ、鬼舞辻無惨とはまったく違う。
言うならば、鬼という悪病を侵され、陽の光に当たることのできない人。禰豆子と同じ存在だ。
「そして…鬼舞辻無惨をこの世から抹殺したいと思っています」
鬼は平気で嘘を吐き、人を喰らう悪しき生き物。
だが、炭治郎は目の前の鬼……いや、女性からは一切の不快感を感じることはなかった。
本能が、すでにその女性を信用している。
「竈門炭治郎です」
「え?」
だから、炭治郎は己の名を名乗る。
何をするにも、良き関係を築き上げるには自己紹介は当然だ。
「俺は竈門炭治郎です。
弱き人々を鬼から守り、死と恐怖の根源である鬼舞辻無惨を討ち滅ぼす為に旅をしています。
ですので、どうか俺に力を貸してください」
「た、珠世と申します」
その美しき女性の名は珠世。
これから先、炭治郎にとってかけがえのない存在となる。

☆☆☆☆☆

その頃、大都会浅草の路地裏にて…。

「ふう!・ふう!・」

運悪くたまたまその場所を通ってしまった人間数人が殺されてしまうという悍ましい事件が起きてしまっていた。

至る所に血が飛び散り、臓器、手足、頭部……その光景はまさしく地獄絵図。

この大正時代には似つかわしくない光景だった。

「耳に花札のような耳飾りを付けたガキを見つけ出し、必ず殺せ!・絶対にだ!・そして頚を持ってこい!・必ずだ!・何としても殺せ!!」

殺害犯は息を荒くしながら、形振り構うことなく、十数体の鬼を呼び出し、そして人間たった一人を殺す為に放つ。

その男――鬼舞辻無惨は怯えていた。

二つの御技

逃れ鬼の珠世。
彼女はかつて、鬼舞辻無惨の側近を務めていた鬼だ。
だが、今の彼女は名医であり、鬼舞辻無惨を抹殺することを心に誓った女傑。
「あ…ああ…何という…二つの御技が途切れることなく継承されていたなんて…」
恐らく、珠世は鬼舞辻無惨を除く鬼達の中でも最長寿の鬼だ。女性に年齢を聞くのは失礼だが、戦国時代に鬼舞辻無惨の側近を務めていたのなら、その可能性は非常に高い。
人生経験に於いて、彼女に及ぶ人間はいない。
だが、そんな珠世が今……冷静さを失いかけている。それも、悪い意味ではなく、とても良い意味でだ。かつてないほどに気分が高揚している。彼女がこれほどまでに気分が高揚したのはいつ以来だろうか…。
「何と美しい…あなたは神の使いなのでしょうか…」
「た、珠世様?」
珠世にとって三度目のこと…。彼女は今日、赫灼の髪と瞳を持つ少年に出会い、運命の歯車が動き出したのを強く感じ取っていた。
「炭治郎さん、私はあなたに会えたことを心から感謝します。あなたは私にとって希望の光…」
「なッ!?
(こ、こんな珠世様見たことない!
うっとりとされる珠世様も美しく愛くるしいが、あのガキはいったい何なんだ!?)」
そんな状況のなか、珠世の心情を知るはずもない少年……見た目は炭治郎と同年代だが、実は30代の男性は、これまで見たことのない珠世の姿に見惚れると同時に驚愕し、珠世がこのような状態になった原因でもある炭治郎に嫉妬し、激しい憎悪を向けている。

鬼舞辻無惨以外で唯一、珠世が鬼化することに成功した存在――それが愈史郎だ。
「太陽のような温かさ、耳飾り…そして、龍を前にしたような荒々しさと神々しさ…何から何までが懐かしく、全てを昨日のように覚えています」
「ッ！
（ま、またッ!?
美しいのに…珠世様が美しいのは自然の摂理！なのに、あのガキにその表情を向けられているのが赦せない!!）」
愈史郎は珠世を心から尊敬するだけではなく、好意まで抱いている。見ず知らずの炭治郎が珠代にそのような表情をさせているのが気に入らないのだろう。
まったく違った心情の珠世と愈史郎。
その二人の視線の先では、竈門炭治郎が十数体の鬼を相手にたった一人で戦っていた。

☆☆☆☆☆

珠世と出会った炭治郎は珠世の力を借りることで、どうにか警官達から逃れることに成功し、珠世が拠点としている洋館に招かれた。
しかし、その洋館に招かれざる客（鬼）が十数体…。

――日天御剣流・龍舞――

炭治郎は今、たった一人で十数体の鬼を相手にしている。
炭治郎を殺害するべく放たれた鬼達……だが、炭治郎の力を鬼舞辻無惨は見誤っていたようだ。
「!?
（な、何なのこのガキは!!
も、もしかして”柱”なの!?）」
左目に”下肆”の文字が刻まれ、赤い着物を着用した二本角の女の

鬼が今まさにそのことを代弁している。
瞬く間に、七体の鬼が一瞬にして頚を斬り落とされてしまった。竈門家に代々伝わる”ヒノカミ神楽・炎舞”の二連撃かと思いきや、更にそこから飛天御剣流の”龍槌”、”龍翔”、”龍巻・凩”、”旋”、”嵐”による七連撃。
飛天御剣流とヒノカミ神楽を会得した炭治郎だからこそ成せる……二つの御技を会得し、その二つを複合することで誕生した”日天御剣流”を前に、鬼舞辻無惨直属の配下の精鋭”十二鬼月”の一体に数えられる鬼も、恐怖を感じている。
「あ…あ…
(こ、こんなの…勝てるはずない…バケモノ)」

――日天御剣流・陽牙突――

まるで天災にでも見舞われたかのような気分だろう。
飛天御剣流とヒノカミ神楽。この二つの御技を駆使し、鬼と戦う炭治郎はまさしく天災。
突き技で鬼の頚を抉り斬る炭治郎が鬼神にすら見えているはずだ。
「ひッ!!」
そして、十数体の鬼は一分もしない内に残り一体になってしまった。厄介な血鬼術を使う鬼もおり、並の剣士ではたった一人で相手にするなど到底無理だっただろうが、飛天御剣流の最期の使い手が如何に凄いのかを、この光景が強く物語っている。
最後に残された鬼――”下弦の肆”零余子には、もう戦う意思すらない。ただ、死を待つのみだ。
「炭治郎さん。
その鬼は”十二鬼月”です。鬼舞辻無惨に限りなく近い血を持っています。なので、血を回収して頂けると有難いのですが…」
「わかりました」
零余子は今、己のこれまでの行動を後悔していた。
理不尽に、自分の欲求のままに多くの人間達を喰い殺してきた。そ

の零余子が今、奪う側ではなく奪われる側となり、終わりを迎えようとしている。
珠世から短刀を受け取った炭治郎にそれを突き刺され、血を奪われ、夜明けを思わせる曙色に輝く日輪刀を突き付けられている。
まさに因果応報だ。
「己の行いを悔い改め…もし生まれ変わったら、今度は正しく生きてくれ」

――日天御剣流・龍円――

ただ、最後は痛みなど一切なく、人間だった頃を思い出させてくれる……優しく温かい、太陽そのものだった。

☆☆☆☆☆

鬼舞辻無惨が放った鬼達は、炭治郎によって全滅した。
「まさか炭治郎さんが飛天御剣流と耳飾りを付けたあの方の剣術を受け継いでいたとは驚きです」
「俺は珠世さんが飛天御剣流とヒノカミ神楽を知っていたことの方が驚きですよ」
大都会浅草で鬼の首領・鬼舞辻無惨と遭遇し、珠世と出会い、十数体の鬼を差し向けられ……炭治郎からしたら慌ただしくなってしまったが、珠世との出会いは炭治郎にとってあまりにも大きなものだった。
まさか、珠世が過去に飛天御剣流の使い手に助けられていたとは…。もしかしたら、飛天御剣流の使い手が鬼という存在を知ったのも珠世を守ったことが関係しているのかもしれない。
ちなみに、珠世を助けた先代の比古清十郎も、炭治郎の師匠と似て自信家だったとのことだ。
ただ、何よりも炭治郎が驚いたのは竈門家に代々伝わるヒノカミ神楽が、鬼舞辻無惨をあと一歩のところまで追い込んだ剣術だったとは

…。

しかし何故、それほどの剣術が炭焼きでしかない竈門家に代々伝わっているのだろう。珠世から話を聞いた炭治郎は、ふとある日に見た夢を思い出したそうだ。炭治郎が比古清十郎に弟子入りして半年経った頃、不思議な夢を見たのだそうだ。その夢というのが、竈門家のご先祖様の目の前で耳飾りを付けた剣士がヒノカミ神楽を舞い、炭治郎が父親から託された耳飾りを、ご先祖様がその剣士から託されたのだそうだ。この夢が意味するものはつまり、その剣士こそがヒノカミ神楽の最初の使い手にして、無惨をあと一歩のところまで追い込んだ最強の鬼狩りだったということである。

炭治郎と同じ痣、赫灼の髪と瞳を持った最強の鬼狩り。

そして炭治郎は、かつて炭治郎の父が幼い炭治郎に託した言葉を思い出す。

『炭治郎…ヒノカミ神楽と耳飾りだけは必ず、途切れさせず継承していってくれ。

あの人との約束なんだ』

その言葉の意味を、炭治郎はようやく知ることとなった。

恐らく、炭治郎の父も同じように夢を見たのかもしれない。

「継国縁壱さん。

それが、最強の鬼狩りの名です。

当時私が掴んだ情報では、無惨は縁壱さんを強く恐れ、縁壱さんと同じ漆黒の日輪刀の使い手を率先して殺していたそうです」

そして何故、鬼殺隊にではなく竈門家にヒノカミ神楽が伝承されているのか……その理由も今こうして発覚した。

「…!

(漆黒の日輪刀?

俺は師匠と同じ曙色の日輪刀だ。もしかして、俺はヒノカミ神楽に適合できていない?)」

新たな疑問点も浮かんだが、その点はまた後々にわかることだろう。恐らく、珠世でもわからないはずだ。

炭治郎が適合しているかしていないのかはともかく、継国縁壱がど

のような思いで鬼殺隊に伝承させなかったのか……今となっては憶測でしか語ることはできないが、その判断に間違いは一切なかったのだろう。
「あの方のような剣士は早々現れるものではありません。
飛天御剣流の使い手も然り…」
鬼舞辻無惨は継国縁壱の存在を恐れ、継国縁壱が生きている間は姿を隠していたのだそうだ。その後、継国縁壱の死を確認して再び行動を再開。ヒノカミ神楽の使い手の可能性がある漆黒の日輪刀を持つ隊士を率先して殺し続けていた。
仮に、鬼殺隊に伝承されていたとしたら、ヒノカミ神楽は本当に途絶えていた可能性もある。
だが、鬼舞辻無惨も予想していなかっただろう。何よりも恐れたヒノカミ神楽が、鬼殺隊ではなく炭焼きの一族に継承されていたとは…。しかも、その正当な継承者の逆鱗に触れてしまうなど……これもまた因果応報。ついに、鬼舞辻無惨は報いを受けるべき時が来たのかもしれない。
「珠世さん、これから宜しくお願いします」
「ええ、もちろんです。
炭治郎さん、こちらこそ宜しくお願いします」
鬼舞辻無惨をあと一歩まで追い込んだヒノカミ神楽。
鬼舞辻無惨の呪いから解放された珠世。
そして、最強の暗殺剣――飛天御剣流。
運命の歯車が大きく動き出す。

☆☆☆☆☆

「ね、禰豆子!
珠世さんが困ってるだろう!離れるんだ!」
「ま、まさか私以外にも無惨の呪いから逃れた存在がいたなんて…それにしても、禰豆子さんはどうされたのでしょうか?」
炭治郎が珠世と協力関係を築き上げた後、当然のことだが炭治郎は

禰豆子を珠代に紹介した。
炭治郎の最大の目的は、禰豆子を人間に戻すことなのだから当然だろう。
医者である珠世なら、禰豆子を人間に戻す薬を完成させることができるかもしれない。
炭治郎にとって、珠世という存在は鬼殺隊以上に大きな協力者だろう。もちろん、それは珠世からしても同じくだ。鬼を人間に戻す薬を完成させるには、鬼舞辻無惨の血が必要不可欠。そして、血を手に入れる為にも、炭治郎の力は必要不可欠。
互いにとって最高の協力者だ。
「参ったなー。
もしかして、珠世さんを母さんと勘違いしてるのかな?」
「まあ…それはちょっと嬉しいかもしれませんね」
ただ、今この場所に漂う雰囲気は協力者同士という感じではない。
「うわ!?
ひ、引っ張るな禰豆子!
す、すみません珠世さん!!」
「い、いえ…ッ!
(た、炭治郎さん…ち、近い…そ、そういえば、殿方とこんな近い距離で接するのは主人以来で…)」
禰豆子が珠世を母親と勘違いしてるのは本当なのかもしれない。
「ぐぬぬぬぬ、竈門炭治郎…赦せん!!
(鬼舞辻無惨!今なら俺はお前を応援するぞ!!)」
その光景を柱の影から血涙を流しながら、怨めしそうに眺める男が一人いた。

人斬り…？

人喰いの鬼の始祖、鬼舞辻無惨の本拠地――”無限城”。
無惨の側近を務める鳴女という女の鬼の血鬼術で作り出されたその空間は、物理の法則を無視したような出鱈目に継ぎ接ぎされたような奇怪な空間となっており、如何に異能の鬼の血鬼術が常軌を逸しているのかを物語っている。
その無限城に現在、六体の鬼達が召集されており、緊張感が漂っていた。
召集された六体の鬼は、無惨の配下の精鋭”十二鬼月”……その下位の鬼達で、左目に”下弦”の証明である下の文字と、それぞれが与えられた数字を刻んでいる。その内一体は、右目の下陸に？印のような傷があるが…。
しかし、当の本人達に至っては、何故この場所に呼び出されたのか理解できていない。寧ろ、下弦の鬼達全員が初めてこの場所に呼び出されたらしく、己達がいったい何処にいるのかすら理解できていないようだ。
「頭を垂れて蹲え…平伏するのだ」
それでも、ただ一つだけ確かなことがあった。
それは、この場所に下弦の鬼達を揃って召集できる存在はたった一つのみ……鬼舞辻無惨しかいない。鬼舞辻無惨を除いて存在しないということだ。
故に、人間にとって恐怖の存在である下弦の鬼達ですら、即座に平伏している。重く乗しかかる重圧に、そうせずにはいられない。
「今、私は頗る不機嫌だ。
よって、お前達は一切口を開くな。私の話を黙って聞き、私の行動を黙って受け入れ感謝するのだ」
ただ、下弦達の目の前に現れた鬼舞辻無惨は頗る……かつてないほどに不機嫌だ。一言でも発したら、間違いなく即刻処刑されてしまうだろう。

「下弦の肆・零余子が鬼狩りに殺された。
そこで、私はお前達にその鬼狩りの始末を命令する」
無惨が不機嫌な理由、それは数日前に遡る。
数日前、鬼舞辻無惨は大都会浅草にて、とある鬼狩りの少年と出会した。額に痣、赫灼の髪と瞳、花札のような耳飾りを付けた鬼狩りだ。正確には、鬼殺隊に属していない鬼狩りなのだが、さすがの無惨もその点に関しては知っておらず……いや、そこはどうでもいいだろう。鬼殺隊に所属してようがいまいが、鬼狩りであることに変わりはないのだ。
無惨は常々、鬼達に鬼狩りの抹殺を命令しており、十二鬼月には鬼殺隊の最高戦力である”柱”の抹殺を義務化している。
だが今まで、無惨が特定の人間(鬼狩り)の抹殺命令を下したことがあっただろうか…。
十二鬼月でも極一部の鬼のみ……上弦の鬼は与えられたことが在るかもしれないが、下弦の鬼達にそのような重要な任務を無惨が与えるはずもない。
だからこそ、下弦の鬼達は無惨の命令に驚愕している。それと同時に疑問を抱く。
無惨が、特定の鬼狩りの抹殺を命令するということは、その鬼狩りは鬼殺隊の最高戦力とされる”柱”または、柱に匹敵する実力がある鬼狩りなのではないかと…。
「その鬼狩りは柱でこそないが、柱に匹敵する実力を持っているだろう」
すると、無惨は下弦達の思考を読んだのか、疑問に対して即座に答えを返していた。
「がッ!?」
それと同時に、下弦達の頚に無惨は何かを突き刺していた。いったい何をされたのか理解できず、下弦の壱から順に床に倒れ込み、激しくもがき苦しんでいる。
「私の血をふんだんに与えてやる。
これで貴様達は、上弦に近しい力を得ることができるだろう。それ

と響凱…貴様の向上心と忠誠心に対して褒美を与えてやる。貴様に下弦の肆の地位を与えよう」
鬼の強さは、無惨から与えられた血の量も大きく関係しており、強い鬼ほど無惨の血が濃く、多く流れている。無論、その血の量に順応できなければ、細胞が破壊され死んでしまうが…。
無惨は今回、一人の鬼狩りを確実に抹殺するべく下弦達の強化を図った。
「私の血を与えてやったのだ…決して失敗は赦さん。
必ずその鬼狩りを殺せ」
脳内に流れ込んでくる無惨の記憶に混乱する下弦達。その記憶を垣間見た下弦達は、赫灼の髪と瞳、額に痣を持った市松模様の羽織りを着用した鬼狩りの存在を知る。それが、無惨が何としても殺したい鬼狩りだ。
一度地位を剥奪した鬼に、名誉挽回の機会を与えるほど……無惨はそれだけその鬼狩りを殺したいのだ。
「これを機に下弦級の鬼を増やし、目障りな鬼狩り達も一掃するとしよう」
その鬼狩りの出現により、鬼舞辻無惨が大きく動き出す。

☆☆☆☆☆

大都会浅草から南南東。
鬼殺隊に所属することなく鬼を狩る孤高の存在――竈門炭治郎は、鬼にされてしまった妹の禰豆子を人間に戻すべく、そして弱きを助ける為に旅を続けていた。
逃れ鬼の珠世と協力関係を築き上げることができたこともあり、炭治郎の旅の目的はより明確となり、足下が軽い。一時は、まったく鬼の情報もなく途方に暮れていたが、今は鬼殺隊からの情報提供もある。
何より、珠世と協力関係を築き上げることができたおかげで、炭治郎に拠点ができたのだ。

『炭治郎さん、決して無理はなさらずように…。
定期的に戻ってきてください。必ずですよ。あなたは人間なのです。如何にあなたが強くても、あなたは鬼ではない。失った手足は再生することなく、怪我もなかなか治らない。体力も無限ではない。身体をゆっくりと休めることも必要です。
ですので、必ず私のもとに戻ってきてください。傷つき、疲れたあなたの心と身体は、私が全身全霊を込めて治し、癒してさしあげます』
名医でもある珠世からの支援、助力は炭治郎にとってこれ以上ないほどに有難いものだろう。
炭治郎は飛天御剣流の最期の使い手だが、身体はまだ成長の途中にある。無理は避けられないだろうが、しっかりと身体を休める環境は絶対に必要だ。
だから、炭治郎は珠世の言葉をしっかりと胸に刻み込み、目的の為に旅を続けている。
それに、炭治郎は己の師とも約束したのだ。決して、己の命を蔑ろにしないと…。
生きようとする意思は、何よりも強い力をもたらすのだ。
飛天御剣流の最期の使い手として、炭治郎は己の責務を全うし目的を果たすべく、決意新たに前に進む。
「師匠と珠世さんとの約束は絶対に守らないと…。
ただ、珠世さんのもとに戻ると愈史郎さんから殺意向けられて怖いのがな…俺、嫌われてるのかな?」
ちょっとした些細な悩みはあれど、今のところ大きな問題もなく進めているようだ。
ちなみに、珠世の助手を務めている愈史郎は、炭治郎が旅立った今は頗る上機嫌のはずである。珠世との約束もあり、数週間または一ヶ月に一回は必ず拠点に戻らないといけない為に、炭治郎が戻ると愈史郎の機嫌は最高に悪くなるだろうが……これぱかりは時間をかけて少しずつ改善していくしかないだろう。
「とりあえず、愈史郎さんについては根気強く話しかけて仲良くなろう。それしかない。

けど、今はそれよりも無惨達だ。珠世さんの予想通り、無惨は俺を狙っている」
しかし、炭治郎には愈史郎の件よりも気にするべきことがあった。いや、気にする程度では駄目だろう。最大限に警戒し、注意しなければならない。
炭治郎は間違いなく鬼舞辻無惨から命を狙われている。
狙われている理由はもちろん、浅草での邂逅だ。
無惨は炭治郎という存在を強く恐れている。その証拠に、炭治郎はこの数日で鬼に三度も襲撃されているのだ。
一度目は、下弦の肆を含む十数体による襲撃。炭治郎がたった一人で下弦の肆も含め全ての鬼を討伐したが、並の剣士では無理だっただろう。
そして、炭治郎が浅草を立ち、珠世と別行動を開始してから炭治郎を襲撃してきた鬼は下弦級の鬼が率いる複数の鬼達。二回ともが徒党を組んだ鬼達で、本来は徒党を組まないはずの鬼が、それなりの連携を見せて襲いかかってきたのだ。鬼舞辻無惨の命令あってのものなのか……ただ、鬼舞辻無惨が如何に炭治郎を警戒しているかが伺える。
何より、珠世が炭治郎に説明していた通り、鬼舞辻無惨がその気になれば下弦級の鬼をすぐに作り出せるようだ。
その下弦級の鬼の口振りから見ても、標的は間違いなく炭治郎なのだろう。飛天御剣流が一対多数の斬り合いを得意としていなければどうなっていたか…。しかし、このような状況が長く続くと思うと、炭治郎でも不安を感じずにはいられないはずだ。人間と鬼では、体力にも差がありすぎる。何れ、炭治郎は限界を迎えてしまう。
まだ数日しか経っていないのに、すでに珠世の言葉が身に染みているようだ。
珠世の協力があるとはいえ、基本一人で行動している炭治郎は常に気を張っていなければならない。身を休められるのは、太陽が上っている時間のみだ。
どの組織にも決して属さないという飛天御剣流の掟もあり仕方な

いが、場合によってはその掟を破る必要もあるかもしれない……炭治郎は、もしもの場合も視野に入れている。
だがやはり、掟を破ることだけは炭治郎も避けたいはずだ。都合良く、鬼殺隊に加わらなくても旅を問題なく継続できる方法がないものかと思案する。
「珠世さんみたいに…仲間と言えるような存在がいたら少しは心強いんだけど、鬼殺隊にそんな剣士いるかな？」
禰豆子に対して何も言わず、炭治郎に協力してくれる存在。あまりにも都合が良すぎる存在がいないかと……炭治郎は珍しく、そのようなことを考えていた。
普通に考えて、都合良くそんな存在が現れるわけもない。
しかし、日頃の行いがあまりにも良すぎる炭治郎の場合、都合良く事が運ぶ場合がある。これも、炭治郎の人徳あってのものだろう。
「頼むよ！お願いだから！
明日死ぬかもしれないんだ！だから俺と結婚してくれ!!」
一見、あまりにも見苦しいが、炭治郎にとって有難い（都合の良い）存在がそこにいた。
「俺のこと好きなんでしょ!?だから結婚してくれ!!」
ただ一つ……炭治郎には、道端で泣き叫びながら女の子にしがみつく黄色い髪の隊士が別の生き物に見えていた。

☆☆☆☆☆

耳障りな奇声が響き渡る。
「い、いやァァァ！
ひ、ひ、人斬りだァァァ!!や、やっぱり俺は死ぬんだ！鬼に殺されなくても、俺は死ぬ運命にあるんだ!!」
鬼殺隊に入隊したばかりの少年――我妻善逸。
黄色い羽織に、黄色い髪といった派手な見た目の少年は、その見た目以上に煩く、傍迷惑な存在だ。
「俺は人斬りじゃない」

「な、ならどうして刀なんて持ってるんだよ!?
鬼殺隊じゃないのに刀持ってるなんておかしいだろ!!」
その声はまさに騒音。
「頼む…少し黙ってくれないか?
(耳が痛い。こんな煩い声初めてだ)」
「ぎゃあァァァァァ!
俺を黙らせるって言った!それって殺すって意味だよね!?」
炭治郎は、少し前の己の考えを訂正する。
鬼殺隊の中で、誰か仲間になってくれる存在がいないかと考えていた炭治郎は、それは決して叶うことがない願いなのだろうと諦めた。
「…それじゃあ…さようなら」
「人斬りにまで見放された!?
た、頼むから俺を一人にしないでくれェェェ!!」
「俺は人斬りじゃない!
竈門炭治郎だ!!」
ただ、炭治郎は知らない。
一見、別の生き物のようにすら見えてしまうこの少年が、実はほんの少しだけ頼りになることを…。
そして、炭治郎にとって友と言える存在になることを…。

三兄妹を守る飛天

浅草から南南東。
「ここか…！
(血の匂いがする。
まさかもう殺されて…しかも複数の匂い…それに、血は血でも今まで嗅いだことのない血の匂いもする)」
炭治郎は鬼が住む屋敷に到着した。
ただ、炭治郎の優れた嗅覚がすでに犠牲者が出てしまっているのを察知してしまう。
「とりあえず、早く行こう…必ず助けないと。
(善逸にてる子と正一を任せてきたけど…本当に大丈夫だろうか…。
今は信じるしかないな。一見かなり頼りないけど、善逸からは思いやりのある優しい匂いがしたし…大丈夫だ…多分…きっと…)」
それでも、まだどうにか生きていることを願いながら、炭治郎は屋敷へと足を踏み入れる。
ちなみに、道中で遭遇した情けない鬼殺隊の隊士――我妻善逸は途中に置き去り……というよりも、炭治郎の移動速度についてくることができずに、炭治郎が気付いた時にはまだ遥か後方を走っていたようで、別行動をとっているようだ。
この屋敷にやって来る途中で鬼に遭遇した兄妹を炭治郎が発見し、一番上の兄を連れ去られたことを聞かされたのだが、連れ去られた方角からして炭治郎が情報提供された場所と同じ……つまり、炭治郎が向かおうとしていた場所に一番上の兄は連れ去られた可能性が高かったのである。
しかし、すぐに救出に向かおうにも夜道にまだ幼い兄妹達を残すわけにもいかず、かといってわざわざ連れていくわけにもいかず、炭治郎は善逸が追いつくのを致し方なく待ち、善逸が到着後に事情を説明してその兄妹を託し、炭治郎は全速力でここまでやって来たようだ。
もしかしたら……いや、もしかしなくても、炭治郎のそばにいる方

が何よりも安全だっただろうが、我妻善逸は曲がりなりにも鬼殺隊の隊士だ。
炭治郎の前ではあまりにも情けない姿を晒していたが、己よりも幼い子供の前ではさすがに情けない姿を見せることはないだろう。託した兄妹は善逸が必ず守り抜いてくれることを願うばかりである。
『お、おおお、お前がいなくなったら、誰が俺のことを守ってくれるんだよォォォ!!』
出発する直前の善逸の様子を思い出し、人選を間違えたかもしれないと、炭治郎は一抹の不安を感じていた。
「せめて禰豆子だけでも残しておくべきだったかな？
いや、それは絶対に駄目だ。
（とにかく俺は、ここにいる鬼を早く倒して助け出そう。そして、善逸達のもとに戻ろう）」
炭治郎は己がこれから鬼が住まう屋敷へと足を踏み入れようとしていることに何一つ不安はない。だが、不安はまったく別のところにあるようだ。

☆☆☆☆☆

屋敷へと足を踏み入れた炭治郎は、血の匂いを頼りに迅速に屋敷内を駆け回った。
しかし、時すでに遅く……炭治郎が目にしたのは幾つもの屍。己がもう少し早く到着していればと悔やまずにはいられない。だが、炭治郎が如何に強かろうとも人なのだ。救い出せない命も必ずある。
唯一の救いは、道中で出会った子供達の兄の屍がなかったことだ。
炭治郎はすぐに気持ちを切り替え、最後に残された不思議な血の匂いの方へと急いで向かう。
「頼む、間に合ってくれ」
禰豆子を鬼にされ、他の弟妹達を惨殺されてしまった炭治郎は、この三兄妹が誰一人欠けることなく無事であることを心から願う……
いや、願うのではなく、炭治郎は今度こそ己の手で必ず守り抜くのだ。

「髄分と活きのいい人間だな…こりゃあ美味そうだ」
「ぐひひ、舌触りも良さそうじゃねえか」
だが、このような状況に限って必ず邪魔な存在が現れるのは世の常というもの。もっとも、邪魔な存在の末路は決まっているが…。
決して、翔ける龍の前に立ち塞がってはならない。翔ける龍の勢いを止められるはずもない。

――日天御剣流・双龍紅鏡――

神速抜刀術からの左右対称の二連撃にて二体の鬼の頚を瞬く間に斬り落とし、炭治郎は駆け抜ける。
そしてそのまま、匂いを頼りに一直線に進んだ炭治郎は目の前の襖を斬り裂き、探し人を見つけ出した。
「見つけた！
(間に合った！)」
炭治郎の瞳に映った光景は、体に幾つもの鼓を埋め込んだ鬼が少年を喰らおうと襲いかかる寸前だったが、まだ生きているのであれば、炭治郎にとって何一つ問題ない。
誰も助けにやって来ないと、生きることを諦めていた少年は炭治郎に驚愕の眼差しを向けている。
その視線から、少年の心の声を読み取った炭治郎は柔らかく、お日様のように温かい笑みを浮かべて少年を安心させる。
「あ…あ…。
(助けに…来てくれた…神様…ありがとう…)」
少年は炭治郎の笑みを見ただけで救われていた。心の底から、もう大丈夫だと不思議と思えていた。
「稀血を逃してなるものか！」
ただ、その少年が特別な血の持ち主であったこともあり、鼓の鬼は炭治郎よりも少年を優先する。それが悪手だとは気付かず…。もし、この鼓の鬼が少年よりも炭治郎に関心を向けていたら……いや、気付いていたとしても結果は変わらなかったかもしれない。

――日天御剣流・龍巣陽炎(りゅうそうようえん)――

繰り出された神速の無数の斬撃は刃先が陽炎の如く揺らぎ…。

「!?

(は、速い!転移をッ――何だと!?

退避を!!)」

炭治郎の斬撃を回避しようと背中の鼓を叩こうとするも、間合いの目測を誤認させる無数の斬撃を躱すことは不可能で、鼓の鬼は背中の鼓を斬り伏せられた上に、深い痛手を負わされてしまう。

辛うじて、胸の真ん中の鼓を叩くことで炭治郎から逃れるも、苦悶と困惑に満ちた表情を浮かべている。

「ぐうう!

(背中の鼓を斬られた…いや、それよりも斬られた部分が灼けるように痛い!しかも、再生できない!い、いったい何が起きた!?)」

今まで味わったことのない痛みに苦しみ、驚愕し、かつてない恐怖に襲われいる。

「!

そ、その耳飾りと額の痣!そうかッ――貴様が!!」

だが、その瞳にようやく炭治郎の姿をしっかりと捉え、己がどのような状況に置かれているのかを悟ったようだ。

今、己の目の前にいるのが鬼舞辻無惨が下弦の鬼達に抹殺するように命じた唯一の鬼狩り。

稀な血を持つ少年も、炭治郎と比べたら取るに足らない存在だ。

「無事でよかった。

遅くなってごめん…君が清だね?」

「は、はい…あ、あなたはいったい…」

何としても討つべき人間。

「君の弟と妹…正一とてる子に君が拐われたことを聞いて助けに来た。

俺は竈門炭治郎…鬼を狩る流浪人(るろうにん)だよ」

鬼の天敵……今ここに龍が舞い降りた。

☆☆☆☆☆

鼓が鳴り響くと同時に、目まぐるしく景色が変わる。
右肩の鼓を叩くと右回転。左肩の鼓を叩くと左回転。右脚は前回転で、左脚は後ろ回転。
腹の鼓は鋭利な爪のようなもので斬り裂く斬撃を飛ばし、胸の真ん中にある鼓は己自身を転移させる。
鼓の音が鳴り響くと同時に部屋が回転し、畳が側面にあったり、天井と畳が上下逆になったりと、方向感覚を狂わされる厄介な血鬼術。
この血鬼術は体に幾つもの鼓を埋め込んだ鬼――”下弦の肆”響凱のものだ。
一度は、鬼舞辻無惨に下弦の地位を剥奪されるも忠誠心と向上心の高さを評価され、下弦の肆に返り咲いた”十二鬼月”内でも稀有な鬼である。
「貴様が倒した下弦の肆よりも…小生は遥かに強い!!
(無惨様、必ずやこの小僧の頚をあなた様にお届け致します!!)」
その強さは、炭治郎が浅草で倒した前任の下弦の肆を遥かに上回っているほどだ。
鬼舞辻無惨が下弦の鬼達の強化を図ったことを、まだ炭治郎は知らない。無論、鬼殺隊も知っているはずがない。
しかもその要因が炭治郎を抹殺する為だとは思うまい。
だが、この戦いを優位に進めているのは炭治郎だ。
一見、怪我を負った少年を片手抱きしながら戦っている炭治郎の方が圧倒的に不利に見えるだろう。しかし、炭治郎はそのような状況でも汗一つ流すことなく、平然とした様子で戦っている。
これも、比古清十郎による厳(鬼畜)しい修行の恩恵だ。
重さ十貫の肩当てが仕込まれた外套を羽織った比古清十郎を背に乗せた状態で腕立て伏せを強いられた炭治郎にとって、少年を抱えて戦うなど朝飯前。

それと、早いうちに響凱の背中の鼓を斬り伏せておいたのは大きいだろう。胸の真ん中の鼓と対を為していたそれは、他者を部屋から別の部屋へと転移させるもの。もし、炭治郎が背中の鼓を先に斬っておらず、少年を抱えながら戦っていなければ分断されてしまい危なかったはずだ。

「清…少しだけ我慢しててくれ」

「え？」

――日天御剣流・碧羅の飛龍――

炭治郎は日輪刀を納刀すると、全身を回転させながら納刀した日輪刀を、親指で鍔を弾いて刀を矢のように弾き飛ばす。

すると、弾き飛ばされた日輪刀が響凱の胸の真ん中にある鼓へと一直線に向かい、日輪刀の柄尻によって鼓が粉々に破壊されてしまう。これで、響凱は己自身を転移させることもできなくなった。

完全に虚を突かれてしまった響凱は為す術なく、炭治郎が眼前に迫っていることにもまったく気付いていない。

「お前の血鬼術は厄介だった。

けど…これで終わりだ」

「…！」

鼓を破壊し落ち行く日輪刀を片手で掴み、腰を回す要領で円を描くように振るい響凱の頚を一閃……下弦の肆の頚が宙を舞う。

☆☆☆☆☆

脅威は去った。

この屋敷の主――響凱を失った屋敷ではもう鼓の音が聴こえるはずもなく、物静かで、炭治郎と清の声だけが響いていた。

「正一とてる子のもとに戻ろうか…」

「は、はい」

下弦の肆を討ち取った炭治郎は怪我を負った少年を手当てし、これ

から善逸達のもとに向かう。清、正一、てる子……兄妹三人が誰一人欠けることなく再会できることに、炭治郎も嬉しそうにしており、早く三人を引き合わせたいだろう。
「！」
しかし、炭治郎と清以外に存在しないはずの屋敷に獰猛な獣の匂いが漂い、炭治郎は視線を鋭くする。
「強い鬼の気配がするぜ…それに、鬼とは別にとてつもなく強い何かがいやが…ん？」
その獰猛な獣の匂いを漂わせるのは鬼ではない。猪の頭皮を被った野性味溢れる二刀流の人間だ。
「…人間？」
謎の多き存在に目を丸くする炭治郎だが、こればかりは仕方ないだろう。上半身裸の猪頭が現れたのだ。これが鬼だったならば、まだすぐに受け入れることができただろう。だが、相手は人間。声からして炭治郎と同年代の少年か…。
「ぐはははは！
強い気配がビンビン伝わってきやがるぜ！
それに、テメエが背負ってるその箱から鬼の気配がしやがる！俺と戦いやがれ！」
しかも、野性味溢れるだけあり気配にとてつもなく敏感で、問答無用で炭治郎に斬りかかってきた。
炭治郎は冷静に、猪頭の少年の斬撃を日輪刀を抜き防ぐ。
「…！
（刃こぼれが酷い…それに、この刀は日輪刀。
まさか鬼殺隊の隊士か？けど、隊服を着ていない。もしかして、俺以外にも鬼殺隊に属すことなく鬼を狩る者がいたのか？）」
いったい、この野性味溢れる少年は何者なのか…。
「猪突猛進！猪突猛進！
ハッハッハ！お前らはこの嘴平伊之助様がより強くなる為の踏み台にしてやるぜ!!」
「参ったな…人の話を聞かなさそうだ」

炭治郎はこの少年が面倒な性格をしていることを悟る。

那田蜘蛛山～柱邂逅編
日天（兄）と暁天（妹）

猪突猛進。
まさにその言葉通り、猛烈な勢いで炭治郎に突っ込んできた猪頭の少年――嘴平伊之助。
「はあ…やれやれだな」
まったく人の話を聞かなさそうな野性味溢れる少年に、炭治郎は面倒そうにため息を吐きながら、仕方なさそうに一撃を叩き込む。これは正当防衛で致し方なしだ。

――飛天御剣流・飛龍閃――

矢のように鞘から放たれた日輪刀。
「ぐおッ!?」
炭治郎が放った日輪刀は綺麗に……あまりにも的確に、吸い込まれるように柄部分が嘴平伊之助の眉間に直撃した。
その一撃は絶妙な手加減が加えられながらも速く重く、しかしながら嘴平伊之助は痛みでのたうち回るでもなく、ふらふらと覚束ない足取りで後退り、無言で地面に倒れてしまう。
直撃したのは柄部分ではあったが、炭治郎が放った技は脳を揺らし、意識を刈り取ってしまっていた。
「し…死んだんですか?」
地面に倒れ、まったく言葉を発することがなくなった嘴平伊之助を前に、炭治郎に救出された清は、死んだのではないかと勘違いしてしまう。
頭骨が割れたと思ってしまうような物凄い音がした為、勘違いしてしまうのは仕方ない。もっとも、炭治郎が本気を出していたら本当に死んでいたかもしれない。

「いや、気絶させただけだよ。
俺は鬼は斬るけど、絶対に人は斬らないよ」
清にとって、炭治郎は大恩人。ただ、爽やかな笑顔でそう告げる炭治郎が恐ろしく感じただろう。
そして、炭治郎は気絶した嘴平伊之助を縄で縛り、引き摺りながら屋敷をあとにするのである。
「さあ、善逸達のもとに向かおうか」
飛天御剣流の使い手……恐るべし。

☆☆☆☆☆

鬼殺隊の隊士、我妻善逸……彼は今、死を覚悟していた。
兄を鬼に連れ去られてしまった幼い少年と少女を庇いながら、襲いかかってきた鬼と戦う善逸は満身創痍。
鬼殺隊が鬼と戦う為に使用する”全集中の呼吸”。その呼吸術の中でも速さに特化した”雷の呼吸”の使い手である善逸だが、襲いかかってきた鬼は運悪く……最悪なことに下弦級の鬼だった。
善逸の速さも下弦級の鬼には一切通用することなく、善逸には打つ手なし。
「炭治郎…。
(ごめん…約束守れなかった。
やっぱり俺じゃ、正一くんとてる子ちゃんを守るなんて無理だったんだ)」
そもそも、善逸は鬼殺隊に入隊してまだ日が浅い。階級も、もっとも低い”癸”だ。下弦級の鬼など、善逸には荷が重すぎる存在なのだ。寧ろ、正一とてる子を守りながら、幼い二人に怪我一つ負わせることなく戦い続けた善逸は称賛されるべきだろう。
そして……だからこそなのだろう。普段は弱音しか吐かず頼りないが、いざという時に命懸けで戦うことができる善逸を神は見捨ててなどいなかった。
「善逸、約束を守ってくれてありがとう」

「！」
善逸の優れた聴覚が、普通なら聞き取れない位置で呟かれた言葉を……求めた声を拾う。
その声は、善逸が心から求めていた声で、助けを求めていた人物だ。
「あ…あ…た…炭治郎ぉぉぉ!!」
善逸は死から免れた。いや、元々死ぬ運命ではなかったのかもしれない。飛天御剣流の使い手の加護にあった善逸が死ぬはずなどなかった。

――日天御剣流・陽牙突――

深い夜の闇を明るく、温かく照らす日の神(龍)が舞い降り、翔け抜ける。
必ず戻る……炭治郎は善逸にそう約束していた。その約束は、確かに守られた。
「遅くなってすまない、善逸。
それから、正一、てる子…もう大丈夫だ」
炭治郎の温かな笑みに、善逸だけではなく皆が心から救われた。まだ夜は明けない。しかし、彼らに不安など一切ない。心は晴れやかな青空のようだ。

☆☆☆☆☆

下弦の肆・響凱を打ち倒し、拐われた少年を無事に救出した炭治郎は、兄妹三人を家にまで送り届け現在、藤の花の家紋の家で休息中である。もちろん、道中で遭遇した我妻善逸と共にだ。
ただ無事とは言ったが、下弦の肆を無傷で倒した炭治郎とは違い、下弦級の鬼を相手に怪我を負わされた善逸は完治するまでこの場所で療養することになったようだ。肋も数本折れており、任務どころではないだろう。
「炭治郎ぉぉぉ！
頼むからいかないでくれよぉぉぉ！俺をずっと守ってくれ

よおおお！お願いだからぁぁぁ!!
どうしても行くってなら、せめて禰豆子ちゃんだけは残してってくれぇぇぇ!!」
それでも、一般人よりは鍛え上げられていることもあり、騒ぐ元気はあるようだ。それと、優れた聴覚で炭治郎が鬼を連れていることに気付いていた善逸は、意を決してその件に触れてみたところ、箱の中から可愛い美少女が現れたことで、怪我の痛みよりも禰豆子の可愛さに心を奪われてしまったらしい。禰豆子の可愛さは鬼に対しての恐怖心を遥かに上回ったようだ。
炭治郎に守ってもらえないのであれば、せめて禰豆子だけでも心の癒しに残してほしいと嘆願中である。
「うるせぇぞ弱味噌！ぎょあぎゃあ騒ぐな！
それよりもかまぼこ権八郎！俺と戦え!!」
ちなみに、炭治郎が下弦の肆・響凱と戦った屋敷で遭遇した猪の頭皮を被った少年――嘴平伊之助もいる。どうやら彼は鬼殺隊の隊士で、しかも善逸と同じく新人隊士だったらしく、現在は善逸と同部屋で療養中だ。
炭治郎から食らわされた攻撃で眉間がとてつもなく腫れ上がっており、屋敷に到着するまでの間にも無茶な戦い方をし続けていたのか全身傷だらけで、彼もしばらくは療養に専念することになったようだ。しかし、猪突猛進な伊之助が大人しく療養に専念できるはずもなく、炭治郎に勝負を挑んでいる。
「ぎゃッ!!」
「ぐおッ!!」
そんな喧しい二人の脳天に拳骨が振り落とされる。
拳骨を振り落としたのは炭治郎だが、その拳骨はもちろんとてつもなく痛い。
炭治郎は比古清十郎から、刀が手元にない場合の対処法もみっちりと叩き込まれており、実は素手による戦闘もかなり強かったりする。然う然う、刀が手元にない状況には陥らないだろうが、もしもの場合もある上に、炭治郎に死んでほしくないという……何だかんだで炭治

郎に甘い比古清十郎の優しさの証でもあるのだ。修行内容は鬼畜の一言に尽きるが…。

しかしながら、素手による戦闘まで鍛え上げられた炭治郎の拳骨を食らってしまったらいったいどうなるか…。

「ごめん…善逸、伊之助…加減はしたつもりだったんだけど…。と、とりあえず、荒療治ではあるけどゆっくり寝て（気絶）、身体を休めてくれ」

気絶させた善逸と伊之助を布団に寝かせ、炭治郎は禰豆子が入っている箱を背負い、そのまま部屋をあとにする。

このままこの場所で休息をとってもいいのだが、炭治郎は鬼達の間で変化が起きていることに危機感を感じているのだ。炭治郎が今回戦った下弦の肆・響凱は浅草で戦った下弦の肆よりも遥かに強かったのだが、同じ階級でも実力に差がありすぎたのである。そして、道中で遭遇した十二鬼月でもない鬼達は、浅草で戦った下弦の肆と同等程度の力を持ち、しかも徒党を組んで襲いかかってきた。

下弦の鬼の強化と下弦級の鬼の増殖、鬼が徒党を組み戦うようになったこと……これがまだ、炭治郎一人に向けられているものなら、炭治郎は無理をしつつも対処しただろうが、下弦級の鬼が善逸に襲いかかっていたことから見ても、鬼殺隊にも被害は及んでいるはずだ。

それが意味するものはつまり、鬼舞辻無惨が鬼殺隊を壊滅させるべく、これまで以上に力を入れているということ。

そして、その原因は恐らく炭治郎にある。珠世が話していたが、炭治郎は鬼舞辻無惨にとって数百年前に味わった死の恐怖を思い出させる不愉快な存在なのだ。

恐らく、鬼舞辻無惨の現在の気分はかつてないほどに不機嫌なものだろう。

「さて、行こうかな…俺はまだ休む時じゃない」

己のせいで鬼による被害者が増えることだけは絶対に避けなくてはならない。それに、鬼殺隊に迷惑をかけるわけにはいかない。もっとも、炭治郎は堅気の人間を含め鬼殺隊の隊士を何人も助けており、鬼殺隊からしたら感謝の気持ちの方が大きいだろう。

鬼殺隊に加わるつもりは一切ないが、炭治郎にとっては鬼殺隊も守

るべき対象なのである。
それに、鬼殺隊隊士の犠牲者が多いのは下弦級の鬼が増殖しているからというだけではなく、隊士の質が落ちているというのも要因の一つだと、近年鬼殺隊内でも呟かれているそうだ。
ただこの点に関しては仕方ないのかもしれない。時代の流れとでも言うべきだろうか…。飛天御剣流ですら、今のこの時代にはもう不要な……過去の代物だと比古清十郎は考えていたのだ。炭治郎と禰豆子に出会わなければ、比古清十郎は己の代で終わらせ、飛天御剣流をこの世から消し去っていた。明治を築き、救った最強の剣術すら、時の流れには無意味なもの。
廃刀令のこの時代に、政府公認の組織ではない鬼殺隊が刀を所持し活動を続けるのは何かと厳しい現状もあるのだ。
だが、鬼を討ち滅ぼすには日輪刀が必要不可欠。
だからこそ比古清十郎は、これが最期だと……炭治郎を最期の継承者として育て上げたのである。
それが、飛天御剣流の流派の理なのだ。たとえ廃刀令の時代であろうとも、どの権力、どの派閥にも属さない自由の剣であり、時代の苦難から弱き人を守り抜く。
「善逸、伊之助…また会おう」
故に、飛天御剣流の最期の使い手である炭治郎は一人でも多くの弱き人を守る為に、自ら深い夜の闇へと向かっていく。

☆☆☆☆☆

炭治郎が次に向かった場所は那田蜘蛛山。
しかも、今回は鬼殺隊からの情報提供ではなく、たまたまそちらに足が進んだからという理由だ。
だが、炭治郎の勘は正しかったらしい。
「禰豆子、頼む」

――血鬼術・暁天の紅炎――

那田蜘蛛山という名の通り、蜘蛛――鬼が支配するその山では、多くの人が殺されており、討伐に訪れた鬼殺隊隊士もほぼ全滅という悲惨な状況に追いやられていた。
「あ、あなたはッ！
（あの時の…けど、どうして鬼を連れているの？
それよりもこの炎は何？
燃えているのに少しも熱くない…）」
「その炎は、人間にはまったく害がない。
鬼にのみ効く血鬼術…」
しかし、これ以上被害が拡大することはない。
鬼を狩る流浪人（るろうに）が現れたのだから…。
炭治郎に再び助けられた女性隊士は、もう大丈夫なのだと心の底から安堵する。
「あとは俺と禰豆子に任せてくれ」

日天と毒蝶

那田蜘蛛山。
この山は、鬼舞辻無惨が選別した直属の配下――”十二鬼月”の一体が根城にする危険地帯だ。
現在、その那田蜘蛛山に多くの鬼殺隊隊士が動員され、那田蜘蛛山掃討作戦が決行されている。
だが、動員された部隊はほぼ全滅。
元来群れないはずの鬼達が徒党を組み、しかもその鬼達が最近になりちらほらと確認されている下弦級の鬼だったこともあり、鬼殺隊は予期せぬ事態に陥ってしまっていた。
「あ、あの！
またッ、助けてくれてありがとう!!」
いや、このような事態に陥ってしまうのは最初からわかっていたのではないだろうか…。
「いえ、お気になさらずに。
それよりも、早くこの山から逃げてください。ハッキリ言って申し訳ないですが、この山はあなた方には荷が重すぎる」
鬼殺隊からの情報提供ではなく、たまたま勘が働いたことで那田蜘蛛山を訪れた炭治郎は、多くの亡骸を前にそう考えているようだ。
炭治郎の鋭い嗅覚は、那田蜘蛛山に居着く鬼達が下弦級の鬼であることも、十二鬼月がいることも嗅ぎとっている。
炭治郎がどうにか間に合い、助け出すことができた生き残りの尾崎という女性隊士では無駄死にに終わってしまうだろう。階級が下から数えた方が早い”庚”程度では、決して乗り越えることなどできない。
「ッ…！」
優しい炭治郎がここまでハッキリと物申しているのだから、事実なのだろう。厳しくとも、時には事実をそのまま伝えることも必要だ。
それに、炭治郎は嘘を吐くのが大の苦手だ。

何より、以前……命を救った相手が無駄死にしてしまうところなど見たくもないはずだ。
「俺は行きます。
どうか、命を大切になさってください」
己の実力不足を命の恩人である炭治郎にハッキリと言われ、彼女は今にも泣き出しそうな傷ついた表情を浮かべている。彼女にとって、受け入れ難い厳しい言葉かもしれないが、これは炭治郎なりの優しさと、死んでほしくないという思いやりなのだ。
「い、いったい何者なんだ？
隊服を着てないってことは鬼殺隊の隊士じゃないよな？けど、日輪刀を持ってて…それよりも、鬼を連れてるのはいったいどういうことだ？俺達を助けてくれたし…何なんだ？なあ、尾崎…あいつは何者なんだ？」
尾崎という女性隊士と共に、炭治郎と禰豆子に助けられ生き残ることができた村田という男性隊士は彼女の様子に気付かずに疑問を口にする。しかし、その疑問に答えは返ってくることはない。彼女も詳しくは知らないのだ。
ただ、再び炭治郎に命を救ってもらった彼女は、ただ茫然と……己の無力さを痛感し、うち震えていた。

☆☆☆☆☆

時は遡り――竈門炭治郎が那田蜘蛛山に到着し、窮地に瀕していた数名の隊士を助ける数時間前のこと…。
鬼殺隊総本部に、一匹の鎹鴉が那田蜘蛛山から帰還した。那田蜘蛛山で起きた出来事を伝える為に…。
「そうか…私の剣士(こども)達はほとんど殺られてしまったのか…しかも下弦級の鬼達が徒党を組んでいるとは…。しのぶとカナヲを向かわせたけど、もう一人”柱”を行かせなくてはならないようだ」
その鎹鴉から鬼殺隊の最高管理者である”お館様”こと産屋敷耀哉に伝えられたのは、那田蜘蛛山に動員された部隊がほぼ全滅したと

いう凶報だった。
近頃、下弦級の鬼達が増え、尚且つ鬼達が徒党を組むことで鬼殺隊への被害が増えてしまっているが、今回の被害は今までの比ではないほどに甚大なもののようだ。
近場にいた柱と、柱の弟子とされる”継子”を急ぎで救援に向かわせているらしいが、お館様は柱をもう一人救援に向かわせる必要があると判断している。
「義勇」
「御意」
那田蜘蛛山へ向かうのは”水柱”冨岡義勇。
鬼殺隊士達が必須技能として習得する特殊な呼吸法”全集中の呼吸”。その基本となる五つの呼吸の内の一つ”水の呼吸”の使い手であり、どの時代にも必ず存在するとされる水柱達の中でも歴代最強の呼び声高い鬼狩りだ。
「それとね、義勇。
那田蜘蛛山にはもしかしたら…花札のような耳飾りをした少年が現れるかもしれない。
もし、その少年に出会ったら、どのような状況だろうとも決して手を出さないでほしいんだ」
そして、那田蜘蛛山への救援に冨岡義勇が選ばれたのには、もう一つの理由があった。
鬼殺隊に所属することなく鬼を狩る花札のような耳飾りをした流浪人（るろうにん）――竈門炭治郎が那田蜘蛛山に現れることを、産屋敷耀哉は類稀な先見の明で感じ取っており、冨岡義勇が適任だと判断したのである。
「その少年の名は、竈門炭治郎と言ってね」
「竈門…炭治郎…。
（その名…聞き覚えが…いったいどこで――ッ！
そうだ…あれは確か二年程前に起きた雲取山で暮らす炭焼きの一家が惨殺された事件…その事件で生き残った長男の名だったはず）」
「やはり、義勇は聞き覚えがあるみたいだね」

冨岡義勇は、竈門炭治郎と直接的な接点こそないが、二年程前に雲取山を下りた場所にある町を鬼の情報収集の為に訪れた際に、竈門家に起きた悲劇を町の者達から聞いていたのだ。

ほとんどの者は冬眠できなかった熊の仕業だと口にしていたその事件だが、極一部の者のみが鬼の仕業だと口にしていたそうだ。そして、彼は事実確認の為に竈門家へと向かったのである。

ただ、母親と娘、息子達の計五人が惨殺された竈門家に向かった冨岡義勇は、そこでかつてない戦慄を覚えたようだ。鬼殺隊士として、見慣れた光景のはず……しかし、その場所に残っていた鬼の気配は、それまで冨岡義勇が経験したものとは明らかに違い禍々しく、おぞましいものだった。十二鬼月……それも上位の鬼とされる”上弦の鬼”の仕業かと考えていたそうだ。だからこそ、冨岡義勇は竈門炭治郎の名を聞き、すぐに思い出すことができたのだろう。

だがそこまで思い出したところで、冨岡義勇はふと疑問が湧く。

「お館様…町の者達から聞いた話では、竈門炭治郎は確か唯一生き残った妹と共に”新津覚之進”という有名な陶芸家に引き取られたとのことでした。何故、その竈門炭治郎が十二鬼月が居着く那田蜘蛛山に…」

産屋敷耀哉は竈門炭治郎が現れるかもしれないと口にした。これがまだ、鬼に拐われた……そう言ったのならば、疑問は湧かなかっただろう。しかし、現れるとはいったいどういうことなのか…。

何故、陶芸家に引き取られた堅気の少年が、わざわざ十二鬼月が居着く場所に姿を現すのか、冨岡義勇はその答えが皆目検討がつかないでいる。

「その陶芸家”新津覚之進”だけどね…日本最高峰の陶芸家であると同時に、実は日本最高峰の剣士でもあるんだよ」

産屋敷耀哉は、そんな冨岡義勇に衝撃的な答えをあっさりと述べた。

新津覚之進の真の正体が、飛天御剣流十三代目”比古清十郎”であること。飛天御剣流とはいったい何なのか…。飛天御剣流と鬼殺隊との関係性。

竈門炭治郎の家族を惨殺したのが鬼舞辻無惨で、唯一生き残った妹は鬼にされたものの、強靭な精神力で人間としての理性を保ち続け人を喰わずにいること。

竈門炭治郎が比古清十郎に弟子として迎え入れられ、免許皆伝を受けた後に鬼殺隊に所属せずに飛天御剣流の最期の使い手として鬼狩りをしていること……竈門炭治郎の目的が、恐らくは鬼にされてしまった妹を人間に戻すつもりであること。

そして、竈門炭治郎が鬼舞辻無惨と遭遇した……鬼舞辻無惨の姿をその瞳に捉えた唯一の人間であること。

産屋敷耀哉が述べた内容はあまりにも衝撃的なもので、表情乏しい冨岡義勇が目を見開いて驚愕していたほどだ。予想の遥か斜め上をいく話なのだからそれも仕方ない。

これまでも、鬼殺隊に所属することなく鬼狩りをしていた者は少からず存在していた。鬼に対する強い憎しみ故の行動だ。それでも、その者達は後に鬼殺隊士と出会い、隊士を育てる”育手”を紹介され、過酷な修行を乗り越えた後に鬼殺隊士となっている。

それがまさか、鬼殺隊の育手を介すことなく鬼狩りになった存在がいたとは…。しかも、すでに下弦の鬼すらも倒している。それだけで、飛天御剣流という剣術の凄さがわかってしまう。

「飛天御剣流はどの権力、どの派閥にも属さない。あまりに強大すぎるその力は時代すらも左右し、”歪み”を生み出してしまうからだ。だから、竈門炭治郎が鬼殺隊に加わることはない。けど、この膠着した現況の突破口になり得る可能性を秘めた存在であると私は考えている」

冨岡義勇は、産屋敷耀哉が言わんとすることを理解する。

何故、九人いる柱達の中で、冨岡義勇にのみこの話をしたのか…。彼自身、鬼への憎しみはある。他の柱達同様に、鬼に家族を殺されている。柱のほとんどがそうだ。家族……大切な存在を殺されていない柱の方が少ないくらいである。

ほとんどの柱が鬼殺隊の理念”悪鬼滅殺”に忠実に、鬼にされてしまった妹の頚を斬り落とそうとするはずだ。しかし、冨岡義勇は鬼に

されてしまった妹を連れて鬼狩りをする竈門炭治郎に対し、無闇矢鱈に斬りかかったりすることはないだろう。彼は思慮深く、竈門炭治郎の話に耳を傾けるはずだ。この話を聞かされたのだから尚更だ。他の柱達では、そうはいかない。たとえその話が本当だとしても、鬼に対する憎しみが強すぎるが故に、どんな鬼だろうて滅殺するべきだと判断するはずだ。

他にも一人だけ、産屋敷耀哉が思い浮かんだ柱がいたようだが、その柱は現在別の任務を与えられている。

とはいえ、産屋敷耀哉が他の柱達を信頼していないわけではない。この件に於いては、冨岡義勇が適任なだけだ。

その上、冨岡義勇は竈門炭治郎に対して負い目があった。もし二年前、己がもう少し早く到着していたら、竈門家の者達は殺されなかっただろうと……もっとも、その負い目に至っては言い方が悪いかもしれないが、傲慢な考えかもしれない。水柱といえど、鬼の首領である鬼舞辻無惨を相手に竈門家の者達を守りながら戦うのは不可能だ。本人諸共、鬼舞辻無惨に葬られていただろう。

「義勇…頼んだよ」

「御意」

冨岡義勇は、これから向かう那田蜘蛛山で目の当たりにすることになる。

鬼舞辻無惨に家族を惨殺され、妹を鬼にされてしまった少年の成長した姿を…。

☆☆☆☆☆

顔が蜘蛛のような身長五メートルを超える巨躯の異形の鬼と、その巨躯の鬼の肩に座った小柄な体躯の白髪の少年の鬼が、退屈そうな様子を醸し出しながら、蝶の羽模様が描かれた羽織を着用した鬼殺隊士を見下ろしている。

二体の鬼に見下ろされる女性の鬼殺隊士――彼女は鬼殺隊最高戦力の一人に数えられる”蟲柱”胡蝶しのぶだ。

彼女は柱の中で唯一、鬼の頚を斬れない剣士……だが、彼女は鬼殺隊の永い歴史に於いて、頚の切断以外で鬼を殺せる方法を開発した天才であり、柱に相応しい実力を持った異才の剣士である。
「はあ…はあ…ッ…。
(噂には聞いていた…けど、まさか本当に鬼が徒党を組んでいるなんて。
しかも、下弦級の鬼と下弦の弐…私が以前戦った下弦の鬼よりも遥かに強い！)」
しかし、そんな胡蝶しのぶが窮地に瀕している。
彼女の最大の武器であり、鬼を滅殺する唯一の方法でもある毒も、この二体の鬼には通用せず……正確には、毒を打ち込めさえすれば勝機はあるはずだ。
とは言え、巨躯の異形の鬼は異能の力を持っていないが、皮膚が硬く刀が皮膚に突き刺さらず毒を打ち込むことができず、その巨躯からは想像もできない速さを持っており接近するのは困難。それに、その巨躯から繰り出される拳の威力は凄まじい。
つまり、柱の中で唯一鬼の頚を斬れないが、突き技の威力と速さは突出している胡蝶しのぶにとって、この鬼は相性が最悪なのである。
何より、接近できたとしても肩に座った下弦の弐による妨害があり、胡蝶しのぶは鬼を倒せずにいた。
「この程度で柱なのか…弱いね。
飽きたからもう終わりにしようか。
【血鬼術・殺目篭】」
「！
(これは…ッ!?
逃げ道が…ない…)」
ただ、その下弦の鬼もこの戦いに飽きたのか、胡蝶しのぶに止を刺すつもりだ。
これまで、多くの鬼狩りの日輪刀すらも切断してきた鋼鉄並の硬度を誇る糸が胡蝶しのぶの全方位を篭のように覆い、閉じ込めてしまう。退避しようにも、退避した先には巨躯の鬼が待ち構えており、彼

女は打つ手がない。
鬼の頚を斬れない彼女に、この糸は斬れない。
「…ふざけんじゃないわよ…。
(カナヲ、アオイ、きよ、なほ、すみ…ごめんなさい。
それから…姉さん…私にはやっぱり無理。鬼が憎くて憎くて…反吐が出る。何で存在してんのよ…くたばれ糞野郎共…)」
死を目前にした彼女は、これまで被っていた仮面を脱ぎ捨てて本心をぶちまける。
「!」
「最後まで生きることを諦めたら駄目だ」
だが、迫る糸は彼女を斬り刻むことなく、寧ろ糸の方が事細かに斬り刻まれてしまっていた――突如現れ、彼女を鼓舞する声の主によって。
「!?
(あの耳飾り!額の痣!
コイツがあのッ…!!)」
「まずは一体…」
そして、竈門炭治郎は現れるや否や…。

――日天御剣流・陽牙突――

炭治郎は、現役の柱……突き技に於いては柱最強と言っても過言ではない胡蝶しのぶですら突き刺せなかった皮膚へ刃を突き刺し…。
「!?
(あ…ありえない…)」
それどころか、炭治郎の突き技は鬼の頚を斬り落としてしまった。
「竈門…炭治郎!!」
「下弦の弐…次は君だ」
その日……蟲柱・胡蝶しのぶは、絶対的な力を目の当たりにすることとなる。

寵児と怨児

鬼殺隊の最高戦力の一人に数えられる”蟲柱”胡蝶しのぶは困惑していた。

彼女は、那田蜘蛛山掃討作戦の部隊がほぼ全滅したこともあり、継子と共に救援にやって来たのだが、継子と別れた後に下弦級の鬼と下弦の弐と遭遇し窮地に追いやられていたのだ。

柱である彼女を窮地から救い出せるとしたら、それは同じ柱のみ。

「まさかお前の方から来てくれるとは思ってもいなかったよ…寵門炭治郎」

だが、胡蝶しのぶは柱以外の鬼狩りに救われた。しかも隊服を着用していない、鬼殺隊に属さぬ鬼狩りに…。

「あの方から、お前を殺せと仰せつかっている」

「鬼舞辻無惨が俺を狙っていることは知っている」

「!

(いったい…何者なの?)」

胡蝶しのぶにとって、寵門炭治郎は命の恩人。それは疑いようのない事実だ。それと同時に、胡蝶しのぶには大きな疑問が生まれた。曙色の日輪刀を持っていながらも隊服を着用していない寵門炭治郎が、鬼殺隊に属していない人物であることは彼女も何となく察することができた。しかし、下弦の弐に名前を知られている。彼女が知る限りでは、鬼が人間個人の名を知っていることなど今までなかったはずだ。柱ですら名前を覚えられていることはないはずである。彼女も自ら名乗ったことはあるが、名乗った相手……鬼は、悪鬼滅殺の理念のもとに葬り去っており、彼女の名を知る鬼はもうこの世には存在していない。

これが一族単位だったならば、ここまで強く疑問に思うことはなかったはずだ。いや、少なからず気にはなっただろうが…。何より、下弦の弐は”あの方”と口にした。そして、寵門炭治郎はその言葉に対して鬼舞辻無惨の名を口にした。それだけではなく、鬼舞辻無惨が

己を狙っているとも…。鬼舞辻無惨が竈門炭治郎を名指しで、鬼達に殺害命令を出している。つまりそれは、それだけ特別な理由(因縁)が、竈門炭治郎と鬼――鬼舞辻無惨との間にあるということ…。

竈門炭治郎はいったい何者なのか……胡蝶しのぶはその疑問の答えを何としても知るべく、下弦の弐を前にしながらも日輪刀を鞘に納め、一部の隙もなく自然体な状態で立っている竈門炭治郎を注視している。

「僕は本来、戦いというものにまったく興味がない。

けど、あの方からの命令なら話は別だ…お前は今ここで殺すとしよう。

【血鬼術・刻糸輪転】」

「!

(私が過去に討伐した下弦の鬼よりも遥かに強い下弦の鬼…ッ、下弦でこれだけの強さ…なら、上弦はどれだけ強いって言うのよ…何なのよまったく…私のこれまでの努力を平気で踏みつける理不尽な存在…鬼が…憎い…!!)」

そして、胡蝶しのぶの眼前でついに動き出す下弦の弐――累。相性の悪さもあったが、彼女が手を焼いていた下弦級の鬼よりも遥かに小柄でありながら、遥かに強い鬼の血鬼術が竈門炭治郎に襲いかかる。

――日天御剣流・龍章円舞――

だが、竈門炭治郎は竜巻の如く襲いかかる驚異を前に微動だとせず、堂々とした威厳ある佇まいから、目にも止まらぬ速さで美しい炎の弧を描くように抜刀術を繰り出した。

抜刀の瞬間どころか、納刀した瞬間すら並の鬼狩りや鬼では目で捉えることも反応すらできないであろう竈門炭治郎の神速の剣技は、下弦の弐・累の鋼鉄の糸を容易く斬り裂く。

「糸が…。

(ば…馬鹿な…。

たった一振りで斬ったのか?そ、そんなこと…無惨様に再び血を与

えてもらい強くなった…硬度の増した糸をこんなにもいとも簡単に斬るなんて…そんなこと…ありえない!!)」
下弦の弐・累は、竈門炭治郎の御技に混乱するばかりだ。血鬼術を斬った……それは粉うことなき事実なのだろうが、己の強さに絶対的な自信がある累の驚きようはとてつもないものだ。
柱ですら圧倒していたのだから尚更だ。
驚愕する下弦の弐・累とは対照的に、胡蝶しのぶはただただ……その御技に魅せられている。このような状況でありながらも、辛うじて目で捉えることができた抜刀術に、彼女は強い感銘を受けているのだ。
「美しい…」
速いものは美しい。
竈門炭治郎が飛天御剣流とヒノカミ神楽を複合することで編み出した日天御剣流……その御技に対する胡蝶しのぶの感想はこの一言に尽きるだろう。
速さだけではなく、ほんの一瞬だけ目で捉えることができた夜明けの空を連想させる曙色の日輪刀もまた、その美しさを際立たせている。
何より、竈門炭治郎から醸し出される雰囲気は温かく、お日様のようにすら思えているようだ。
まだ、夜明けまでは程遠いというのに…。
「ちッ!これが――”鬼斬り抜刀斎”の剣技!
けど、それがどうした!僕の血鬼術がこの程度だと思うなよ!?あの方にとって邪魔な存在は僕が消し去ってやる!
【血鬼術・刻糸輪廻】!!」
怒り狂い、次の猛攻を仕掛ける下弦の弐・累。今度の血鬼術は、範囲も……威力も先程の血鬼術と比べても桁外れだ。
それでも、胡蝶しのぶは不思議と……何一つ不安や心配などなく、安心して竈門炭治郎の姿を見ることができていた。寧ろ、助太刀しようなどと、そのような思いが一切浮かんでいない。今はその姿だけを見ていたいと思っているのかもしれない。

相性の悪さがあったとはいえ、己が倒せなかった鬼を相手にしているというのに……初めて会った相手なのに、負ける姿が想像できないでいる。

――日天御剣流・龍跳火車――

前方に宙返りした竈門炭治郎は空中で身体を捻りながら、同時に日輪刀を目にも止まらぬ速さで振るう。これぞ、飛天御剣流の剣と身のこなしの速さであり、龍が天に向かって身を躍らせながら跳び上がっているかのようなその姿こそ飛天の名を持つ所以。

十二鬼月の一体に数えられるに相応しい威力を持った血鬼術を瞬く間に斬り伏せる剣技。

柱で唯一、鬼の頚を斬れない胡蝶しのぶには到底できない芸当だ。

ただ、他の柱達に対しては感じたことのない感動がそこにはあった。何故、鬼舞辻無惨が名指しで竈門炭治郎の殺害を命令しているのか、彼女には理解もできた。女の身でありながらも、況してや鬼の頚を斬り落とせない身でありながらも柱にまで上り詰めたからこそ、余計に理解できてしまった。

竈門炭治郎は選ばれし寵児なのだと…。寵児であり、鬼舞辻無惨にとっては憎むべき……何としても葬り去りたい天敵（怨児）なのだと…。

「!?

(ど、どうして…僕の糸をこうも容易く斬ることができるんだ！負けてしまったが上弦の陸の片割れを斬り裂いた血鬼術だぞ…それを人間如きが…あ…ありえない!!)」

もっとも、竈門炭治郎本人は己のことを大した存在ではないと語るだろう。

竈門炭治郎の強さは日々のたゆまぬ努力あってこそのもの。何度も挫けそうになりながらも、それでも決して諦めることなく立ち上がり続けたからこその……竈門炭治郎の血と涙と努力の結晶なのだ。

「ッ――！

(下!?)」

だからこそ強く、ぶれることなくあり続けられるのだろう。
たゆまぬ努力の末に……今も尚、努力を怠らずにいたからこそ可能とした御技が再び繰り出される。
唖然とする下弦の弐・累の真下へと着地した竈門炭治郎は、着地したと同時に再び跳躍した。
「！
（型を立て続けにッ!?この鬼を相手にありえない!!）」
人間を遥かに凌駕する力を持つ鬼との戦いの最中、型を繋げて繰り出すのは困難なことだ。格下の鬼ならばそれも可能だろうが、格下の鬼が相手ならそこまでする必要はないだろう。柱ならば一太刀のもとに斬り伏せる。
しかし、相手は下弦の鬼。しかも、限りなく上弦に近しい……匹敵する下弦の鬼だ。その下弦の鬼を相手に、型を繋げて繰り出すなど柱でも至難の業だろう。いや、寧ろ出来ないと言うべきだろうか…。
だが、竈門炭治郎の型……いや、剣技は最初から繋げることを目的としているかのようにすら思える。
飛天御剣流の抜刀術は全て隙を生じぬ二段構え。
ヒノカミ神楽は十二の舞型を一晩中に渡って何百、何千回と繰り返し舞う、謂わば全集中の呼吸の極致。
二つの御技を継承し、昇華させた竈門炭治郎の日天御剣流は常に隙なく舞い続ける御技。
胡蝶しのぶが目の当たりにしているその光景は、まさしく驚天動地……その一言に尽きる。
「これで終わりだ」

――日天御剣流・天龍旭日――

龍が朝日と共に天に昇る。
宙を舞う姿は兆し。
長きに渡り果たすことのできなかった悲願が……多くの者達が繋いだ想いがようやく実る刻が来たのかもしれない。

「ああ…（明日はきっと美しい朝が来る）」
彼女はそう思わずにはいられなかった。

☆☆☆☆☆

その手は、下弦の弐・累の頭を優しく撫でてくれた。”
『妓夫太郎には負けてしまったが、堕姫に勝つとは…累、よくぞここまで成長してくれた。
いや…お前はまだまだ強くなるだろう。累…私はお前に期待している』
鬼舞辻無惨からふんだんに血を与えられた下弦の鬼達。その下弦の鬼達の中でも、累はもっとも早く鬼舞辻無惨の血に順応し、力を増した。
そして、それまで以上の力を得たことをきっかけに、累は鬼舞辻無惨の期待に応えるべく、そしてまず己の力を試すべく入れ替わりの血戦を上弦の鬼に申し込んだのである。
だが、上弦の鬼と下弦の鬼との間には天と地の差があり、鬼舞辻無惨に血を与えられ強くなったからといえど、すぐに勝てるような相手ではない。経験値も違う。ここ一世紀以上、下弦の鬼達は鬼狩り達に葬られ入れ替わりが激しかったが、上弦の鬼に関しては席位の入れ替えもなく、絶大な力でその座に君臨し続けている。
累は入れ替わりの血戦を申し込むも結果は……累の敗北に終わった。当然の結果なのだろう。
しかし、負けはしたものの鬼舞辻無惨の予想を上回る内容だった。
累は、上弦の陸の片割れに勝ったのだ。
上弦の陸は特殊な鬼だ。そもそも、上弦の鬼全てが特殊で、常軌を逸した力を持っている。その片割れを倒した。累の進化には目を見張るものがあっただろう。
だからこそ鬼舞辻無惨は、入れ替わりの血戦に敗北した累を殺すことなく生かした。更なる進化を期待しているのだ。

寄せられた期待は虚しく崩れ去り…。
「…!
(頚を…き…斬られた…のか?)」
瞳に映る光景は逆さまになり、地に頚が落ちて行く。
「――ッ!
(僕が負ける…そんなこと…僕は無惨様から期待されているんだぞ!?
このまま死ぬのか!?そんなこと…あってなるものか!!)
【血鬼術・刻糸永劫】!!」
「!
(最後の悪足掻きか…範囲がとてつもなく広いな。
それよりもまずはあの人を退避させないと…)」
頚を斬り落とされながらも血鬼術を放つのは、下弦の弐・累の意地であり、最後の悪足掻き。まさに鼬の最後っ屁……いや、鬼の最後っ屁と言ったところか…。
竜巻の如く渦を巻く最硬度の糸が複数。辺り一帯を細かく斬り刻んでいる。しかも、まったく止まる気配がない。辺り一帯を更地にするまで終わることはないのだろう。
「えッ、ちょ、ちょっと!」
「少しジッとしてて下さい」
炭治郎は胡蝶しのぶを横抱きにし、一旦その場から距離を取り彼女を安全な場所へと移動する。
「あなたはここに…」
「ま、待って!
(な…何を…ま、まさかあの広範囲の血鬼術を全て斬るつもりじゃ!?)」

炭治郎は彼女をゆっくりと地面に下ろすと、瞬く間にその場所から消え去り、辺り一帯を斬り刻む複数の血鬼術の竜巻のもとへと向かう。

そう……胡蝶しのぶが思った通りだ。そのまさかだ。

――日天御剣流・龍舞――

日輪刀を振り下ろし、素早く振り上げる”炎舞”から始まり、まずは二連撃で一つを斬り裂き、今度は天高く飛び上がりそのまま落下重力を活かした”龍槌”、そして”龍翔”へと繋ぎ再び飛び上がり、”龍巻・凩、旋、嵐”の七連撃にて全ての血鬼術を斬り伏せた。

「く…くそ…」

そこに立っているのは、人間か…はたまた龍なのか…。最後の悪足掻きもこの者には通用しない。

☆☆☆☆☆

下弦の弐・累は討伐された。

鬼殺隊の那田蜘蛛山掃討作戦は、部隊がほぼ全滅という最悪の形を迎えたが、あとからやって来た救援――竈門炭治郎が那田蜘蛛山に居着く鬼達を討伐した。

「へ…へへへ！

お前なら倒せそう――ッ!?

（な、何だコレ!?繭か!?

き…斬れない！

ち、ちくしょう！俺は安全に出世したかっただけだってのに!!）」

しかし、那田蜘蛛山にはまだ他に鬼が存在している。そして、討伐部隊の数少ない生き残りがその鬼と遭遇し、窮地に立たされているのだが、この隊員に限っては自業自得。

仲間達を囮にし、自分一人だけ逃げ出したのだ。仲間達が死にゆくなか、見向きもせずに見殺しにしたのである。

「無駄よ。
あんた程度じゃ斬れやしない。あんたはこれからどろどろに溶けて…私の餌となる」
これは、その結果なのだろう。
ただ、この雌鬼は気付いていない。想像すらしていない。これが……最後の晩餐になるなど…。

那田蜘蛛山には、特殊な鬼がいる。
いや……鬼と言っていいのだろうか…。
「ぎゃ、ぎゃあああああ!!
(な、何よこれ!?
お、鬼だけ燃やす火なんてッ――そんなの聞いたこともない!!)」
言うなれば、その者は鬼という悪病に侵された人だ。
「!
(逃げるばかりで私にはまったく攻撃してこなかったのに、鬼には容赦なく攻撃する…)」
鬼にされながらも、決して人であることを忘れずに、理性を保ち続けている。
その者――彼女は鬼ではない。
竈門禰豆子は、粉うことなく人間だ。
人間を守り、鬼を滅す。
「や…やめ…(ど、どうして鬼と人間が一緒に!?)」
【花の呼吸　肆ノ型　紅花衣】
(何も…考える必要なんてない。
私はただ、言われた通りに鬼を殲滅するだけ)」
鬼という悪病に侵された竈門禰豆子と、そしてそんな彼女と遭遇し

た美少女――栗花落カナヲは成り行きから、結果的に共闘し鬼を討伐した。

寵児と怨児　弐ノ型

時は少し遡り……竈門炭治郎と竈門禰豆子が那田蜘蛛山を根城とする鬼達を相手に戦っている最中のことである。

「また気絶させられちまったぜ！

迂闊！だが三度目はねえ！

待ってろよ〟かまぼこ権八郎〟!!」

「禰豆子ちゃん…えへへ…俺が一生守ってあげるよ…ぐう…」

言葉と名前を間違っており、かまぼこ権八郎ではなく竈門炭治郎に迂闊ではなく不覚を取った猪の頭皮を被った嘴平伊之助と、竈門炭治郎に助けられ、竈門禰豆子に一目惚れした我妻善逸は、那田蜘蛛山を目指し爆走していた。

正確には、那田蜘蛛山を目指して爆走しているわけではなく、その方角に竈門炭治郎がいる気がするという嘴平伊之助の野山育ちの野生の勘が働き、己の思うがままに走っているのである。しかし、その野生の勘は決して侮ることができず、恐ろしいことに間違ってはいない。

そして、竈門禰豆子と逢瀬を重ねる幸せな夢を見ながら鼻ちょうちんを膨らませている我妻善逸は、本当は寝ていないのではないかと思ってしまうほどに正確に走っている。だが、彼は本当に寝ている。

ただ、本来なら二人は絶対安静の状態で、それ故に竈門炭治郎が強引に気絶させて療養させていたのだが、どうやらそれが気に食わなかったようだ。

「あいつを倒して俺が最強であることを証明するぜ！

猪突猛進!!」

「禰豆子ちゃん…えへへ…えへへへへ…ぐう…」

果たして、嘴平伊之助と我妻善逸は竈門炭治郎と竈門禰豆子に再会できるのか…。

そして現在、那田蜘蛛山に到着した二人はというと…。
「誰だお前？」
「？
（俺の他に増員はされてないはずだが？）」
半々羽織の男性――”水柱”冨岡義勇と遭遇していた。
「何か喋れよ!!」
「はあ…。
（煩い奴だ…）」
「だから何か喋れっつうの!!」
まさに静と動を体現したかのような相反する存在達が到着したことによって、那田蜘蛛山が賑やかになりつつある。
良くも悪くも三人共、揃って個性的だ。もっとも、鬼殺隊は平凡な者の方が少ないだろうが…。
「あ！
紋逸！何処に行くつもりだ!?」
「禰豆子ちゃんと炭治郎の音がこっちからする…ぐう…」
「本当か!?やるなお前!!
ぐはははは！顎を洗って待ってやがれ紋次郎!!」
ただ一つだけ、共通している点がある。
「…！
（何故…こいつ等が竈門炭治郎を知っている？）」
それは、この三人の目的が竈門炭治郎だということだ。

☆☆☆☆☆

今宵は月が美しく輝いている。

しかし、そんな月夜を台無しにする忌々しい存在がこの世にはいる。
それが鬼。人間に恐怖と絶望を与える存在だ。
だが、この世には人間を守る鬼も存在する。
「人を喰わない鬼？
鬼という悪病に侵され苦しむ人間？
ふふ、寝言は寝て言え…ですよ」
誰も信じないだろうが…。
鬼殺隊士の誰も、人を喰わない鬼など見たことがない。前例がなく、存在するはずがないと全ての隊士が存在を否定するだろう。
いや……存在を否定するのではない。存在することを頑なに認めようとしないと言うべきだろうか…。
「禰豆子、箱に入っててくれ。
（この女性からは、とてつもない憎悪の匂いがする。
きっと、この女性も俺と同じ…家族を鬼に殺されたんだ）」
鬼殺隊士のほとんどが鬼に身内を殺されている。
鬼に対する憎しみは強く、奈落の如く深い。
だからこそ、憎き鬼が人を守るなど信じられるはずもない。信じたくないだろう。
況してや、人は己が知らない現実を目の当たりにした時、なかなか受け入れられない生き物だ。
「いい加減…どいてくれませんか？
【蟲の呼吸　蜻蛉ノ舞　複眼六角】」
「（相手は鬼じゃなくて人間…隊律違反…けど、鬼を庇っている…けど関係ない。師範が斬ろうとしているから私も斬る。）
【花の呼吸　伍ノ型　徒の芍薬】」
しかも、人が鬼を連れているなど、悪鬼滅殺を理念とする鬼殺隊士には到底理解できるはずもない。
鬼を庇う人間など、鬼殺隊士からしたら同じ人間ですらなく――粛清対象だ。
その証拠に、胡蝶しのぶは近づきざまに目にも止まらぬ速度で六方

向からの連続突きを放ち、継子である栗花落カナヲは彼女に続き上下左右から取り囲む様に九連続の斬撃を放っている。
強い殺意と憎悪の籠った斬撃だ。
「参ったな…。
(それにしても、俺が助けた女性の日輪刀からは藤の花の毒の匂いがする。
小柄な体格と、切っ先と根本以外刃が存在しない日輪刀…なるほど、鬼の頚を斬ることができないけど、刺突で毒を打ち込み鬼を殺すのか。凄いことを考えるな)」
何よりも胡蝶しのぶが赦せないのは、己を救ってくれた恩人が鬼を庇っているということだ。
彼女は竈門炭治郎の御技に感銘を受けた。
それが今はどうだ……その感銘を受けた御技と日輪刀を交えることになろうとは…。

――飛天御剣流・龍巣閃　咬――

「!?
(私とカナヲの斬撃が…す、全て捌かれ――ッ!?
わ…私とカナヲの日輪刀が…粉々にッ!!)」
「!
(私と師範の斬撃を捌きつつ、同じ箇所に衝撃を与え続けて日輪刀を砕いた?)」
胡蝶しのぶがこれまで、鬼の頚を斬れないことに対してどれだけ悩んできたか…。どれだけ、頚を斬れる者達を羨んできたことか…。それでも諦めることなく、血反吐を吐きながら、彼女はようやく鬼を殺せる方法を開発した。ただそれでも……柱に上り詰めて以降も、彼女は他の柱達と比べて劣等感を感じていた。
だが、炭治郎に対しては何故か、劣等感や羨望といった思いを抱くことが一切なかったのである。
「くッ……!

（こんなに強いのに…どうして…）」
だからこそ余計に赦せないはずだ。感銘を受けた御技の使い手が憎き鬼を連れ、その鬼を庇っていることが…。
その上、柱と継子を同時に相手にしながらこれだけの余裕を見せている。
ここまでの強さを持ちながら何故、鬼を連れ歩くのか…。
「あなた達では俺には勝てません。
それと…この娘は俺の大切な妹です。
絶対に誰にも傷つけさせない。それでも禰豆子を殺そうとするなら容赦はしない」
竈門炭治郎にとって、その鬼――竈門禰豆子は大切な妹だからだ。唯一残された……何としても守り抜きたいかけがえのない家族なのだ。
「妹…」
胡蝶しのぶは唖然とする。
鬼殺隊には似た境遇の者が多く存在する。だが、家族を鬼にされてしまい、鬼となってしまった家族を連れ歩く者など見たことも、況してや聞いたことすらない。
しかし、鬼となった妹は兄を襲おうとせず、そのような素振りすら見せず、それどころか兄の言うことを素直に聞いている。常識を覆した存在が、彼女の目の前に存在しているのだ。
何故、竈門炭治郎が必死に鬼妹を守るのかを胡蝶しのぶは少なからず理解した。理解したくはないが、理解せざるを得なかった。
鬼殺隊士にとっての生命線……鬼を滅する為に必要不可欠な相棒であり、半身のような日輪刀も破壊された。戦いの場に於いて、その日輪刀を破壊されるということは死に直結する。日輪刀を持つ竈門炭治郎もそれをよく理解しているだろう。それでも、胡蝶しのぶと栗花落カナヲの日輪刀を破壊したのは、兄の妹に対する強い想いの現れなのではないだろうか…。
「…あなたは…。
（もし…姉さんが鬼になってしまっていたら私はどうしたんだろう

…。
一つだけ言えることは…私は彼のようにできない。彼のようになれない。でも、姉さんなら彼のように…私を守り抜いてくれたのかな？）」
もしかしたら、己の身にも起きていたかもしれない可能性。
胡蝶しのぶは、決して訪れることのないであろう出来事を考えると同時に、竈門禰豆子という鬼を滅する気が少しずつ消え失せていくのを感じていた。
「まだ…殺りますか？」
日輪刀も破壊され、彼女には対抗する術がない。
そもそも、最初から勝てる可能性がまったくなかった。柱と継子を相手にし、柱と継子に傷を負わせることなく、己も傷を負うことなく無力化するには相当な技術がいる。殺すよりも生け捕りにするのが難しいのと似ているかもしれない。
つまり、胡蝶しのぶは竈門炭治郎と己の実力差も悟ったのである。
戦意喪失……ただ、彼女にはどうしても聞きたいことがあった。
「いえ、降参です。けど、一つだけ聞かせて下さい。
あなたの目的はいったい何ですか？」
これだけの強さを持ち、鬼妹を連れ、人を助け、鬼を狩り……いったい何が目的なのか…。
「禰豆子を人間に戻し…鬼舞辻無惨を倒します」
竈門炭治郎は鬼となった妹を連れた流浪人（るろうにん）。二つの御技を継承した寵児であり、鬼舞辻無惨が危惧し、恐怖を抱く怨児である。
その竈門炭治郎が鬼殺隊に所属することなく、鬼殺隊を敵に回す可能性もありながら、どうして流浪人となったのか…。それは唯一無二の妹を人間に戻す為。そして仇敵を討つ為。
「そう…ですか。
（彼は姉さんとは違う。
私や…鬼殺隊の誰とも違う。
けど…討つべき敵だけは同じ…）」
鬼にされてしまった妹を人間に戻すなど、これまで前例のない事象

だ。
鬼舞辻無惨討伐も長きに渡り果たせず、尻尾すら掴めていない。だが、竈門炭治郎ならば可能なのかもしれない…。
胡蝶しのぶは不思議とそう思えていた。

☆☆☆☆☆

竈門炭治郎と竈門禰豆子。
鬼達の間で”鬼斬り抜刀斎”と恐れられる鬼を連れた流浪人(るろうに)の兄と、鬼にされながらも人としての理性を失うことなく人を守る妹。
この2人の兄妹によって、那田蜘蛛山を根城としていた鬼達は殲滅された。
鬼殺隊が数十人の死者を出しながらも、一体の鬼も討伐できなかったのに対し、たった二人で……である。
ただ、柱も追加動員された那田蜘蛛山掃討作戦は、その柱ですら窮地に立たされてしまったのだ。それが意味するのは、それだけこの山に居着いていた鬼が強かったということ。下弦の弐と、徒党を組んだ下弦級の鬼が相手では、並の隊士では討伐できるはずもない。
その一方で、たった二人で那田蜘蛛山の鬼を全て討伐した兄妹の強さが窺える。
しかも、毒を打ち込まれた相手を顔から脚が生えた蜘蛛のような姿に変化させる血鬼術を食らってしまった鬼殺隊士達を、禰豆子が己の血鬼術で解毒し救っていたりもする。炭治郎と禰豆子が一時的にではあるが、別行動を取っていた理由はこれだ。禰豆子が解毒治療に専念している間、炭治郎は那田蜘蛛山の主を倒しに向かっていたのである。
禰豆子を一人にするのは心配だっただろうが、解毒治療は禰豆子にしかできなかった。何より、禰豆子は強い。大抵の相手は返り討ちにできてしまう。彼女も炭治郎と共に、比古清十郎から鍛え上げられているのだ。そうそう、負ける姿が想像できない。
こうして、那田蜘蛛山に巣食っていた鬼達は討伐された。そして、

鬼殺隊にとって炭治郎と禰豆子は大恩人と言っても過言ではないだろう。
その後、一悶着が起きてしまったのだが……大恩人となった炭治郎のもとに新たな介入者が現れた。
「竈門炭治郎…だな？」
「あなたは？
（あれ？
この人が縄で縛って引きずってるのって善逸と伊之助…だよな？な、何がどうなってるんだ？）」
「冨岡さん…どうしてここに？
増援ですか？」
その者は、水柱・冨岡義勇である。〝お館様〟産屋敷耀哉の命にて、彼は炭治郎と禰豆子の護衛として那田蜘蛛山にやって来たようだ。そして、お館様の考えはどうやら正しかったらしく、冨岡義勇はそれを知ることになる。

「胡蝶…お前…。
（恩人に何ということを…）」
大恩人である竈門炭治郎と竈門禰豆子に斬りかかった者達が存在する。〝蟲柱〟胡蝶しのぶと、〝継子〟栗花落カナヲだ。彼女達は強い殺意と憎悪を向け、鬼にではなく大恩人に日輪刀を振るってしまったのだ。
「ふ、深く反省しています。
私も命を救われた身でありながら…。感情の制御ができないのは

未熟者…柱として恥ずかしい限りです。
（くッ――冨岡さん、言いたいことがあるなら顔でではなく口でハッキリと言ってくれませんかね!?）」
　事情を知らなかったこともあり、仕方ない部分もある。
　しかし、炭治郎一人に対して柱と継子が本気だった。相手が炭治郎でなければ、間違いなく死んでいただろう。正しくは、炭治郎が相手だったからこそ本気になってしまったのだろうが…。
「その通りだ…
（おまけに日輪刀まで粉々にされ返り討ちにされるとは…柱として不甲斐ないぞ）
　…胡蝶」
「だから思ってることは口にしてくれませんか!?
（腹立つッ!!）」
「継子もお前に似ているようだな。
（考えなしに斬りかかるあたりがそっくりだ）」
　炭治郎は大恩人である。そして、禰豆子も同じくだ。解毒治療を行っていた禰豆子は、これから人間を喰おうとしていると勘違いしてしまった栗花落カナヲに斬りかかられてしまったようだ。そこから壮絶な追いかけっこへと発展してしまい、途中で共闘し下弦級の鬼を倒したりもしたようだが、禰豆子が炭治郎のもとへと向かい、彼女は禰豆子を追い、その先で炭治郎と胡蝶しのぶに遭遇し、その結果が炭治郎　対　蟲柱と継子……という図の顛末だ。もっとも、栗花落カナヲが禰豆子が人間を喰おうとしていたと勘違いしていたのは些か仕方ない部分が強い。だがその一方で、冷静になり考えれば何かしらの疑問が生まれていた可能性もあるが、栗花落カナヲはとある理由から己自身の頭で考えて行動ができない為に、これは”育手”である胡蝶しのぶの監督責任だろう。
「本当に申し訳ありませんでした。
（反省はしている。
　けど、冨岡さんに言われるのだけはッ――お、落ち着きなさい胡蝶しのぶ。感情を制御しなさい胡蝶しのぶ）」

胡蝶しのぶ本人もそれを自覚しているのか、深く反省しており、冨岡義勇の言葉足らずな口撃が予想以上に効いているようだ。
「い、いえ、もう気にしてませんので」
「竈門さん…。
(私はあなたを殺そうとしたのに…竈門さん、あなたは美しい心の持ち主なんですね)」
唯一の救いは、炭治郎が少しも気にしていないことだろう。炭治郎も、何時かはこのような事態に陥ることを常々理解していたのだ。最悪の場合、鬼殺隊と敵対することまで考えてもいた。鬼殺隊士達の境遇も理解しており、恨むはずがない。炭治郎からしたら、冨岡義勇を送り込んでもらえたことに感謝するばかりだ。
「では行くぞ…竈門炭治郎」
「?
何処にです?」
「冨岡さん…。
(あなたという人は本当に…言葉足らずにも程がありますよ)」
本当に冨岡義勇が適任だったのか……少々、疑問が残る。

日天とお館様

半年に一度、鬼殺隊本部にて定期的に行われる”柱合会議”が始まる数時間前のこと…。

大好物の桜餅を食べ過ぎたことで、桃地に毛先が緑色という変わった髪色になってしまった可憐な容姿の女性が今、かつてない感動と興奮にうち震えている。

彼女は、”柱”の称号を持つ九人の鬼殺隊最高位の一人(剣士)――”恋柱”甘露寺蜜璃。

「あ…あ…や、やっと…

(つ、ついに…見つけた…見つけたわ!

わ、私のッ――理想の殿方をッ!!)」

彼女は、鬼に肉親など大切な誰かを殺された仇討ちの為に入隊した者達が多く所属している鬼殺隊の中で、一線を画す入隊動機の持ち主だ。

彼女の入隊動機はなんと、”添い遂げる殿方を見つける為”という鬼殺とはまったく無縁の代物。つまりは婚活目的なのである。

好みは強い人。更に言うなら、柱にまで上り詰めた己すらも守ることができる程の強さを持つ人。

「あ、あの…」

「はう!?

(全てにキュンキュンしちゃうわ!鬼にされてしまった妹を人間に戻す為に鬼殺隊にも入隊せずにたった一人で鬼と戦って、しかも一ヶ月もしない間に下弦の鬼を三体と下弦級の鬼を数十体も倒すなんて!

家族想いで強くて優しい最高に理想の殿方だわ!!)」

強い人と言えば柱。しかし、柱は忙しくなかなか会えない……それならば自分も柱になればいいと柱を目指して努力し、実際にそれを成し遂げた甘露寺蜜璃。

彼女は今日、理想の殿方にようやく出会えた。柱でもなく、況しや鬼殺隊士でもないが、ただ討つべき敵だけは同じ……鬼にされてし

まった妹を人間に戻す為に鬼を斬る流浪人(るろうに)――”鬼斬り抜刀斎”竈門炭治郎に…。
「え…えっと…」
理想の殿方に出会い、かつてないほどに気分が高揚し、胸をときめかせている甘露寺蜜璃ではあるが、対して竈門炭治郎は今まで嗅ぎ取ったことのない感情の匂い……一目惚れという匂いに困惑している。
人には尽くすもの。これまで、家族達の為に頑張って尽くして、これからも妹の為に頑張って尽くす彼は、それ故に己に対する好意には鈍感で、甘露寺蜜璃から向けられる感情を理解できずにいるようだ。
「わ、私ッ――甘露寺蜜璃は、竈門炭治郎さんを応援します!そ、それから、竈門炭治郎さんを支えたいと思います!ふ、不束者ですがお願いします!!」
もっとも、彼女自身も己の気持ちを持て余しているようだ。持て余しているというよりも、突如現れた理想の殿方を前に暴走気味である。
「甘露寺さーん、竈門さんが困惑してます。
なのですぐに握った手を放して差し上げてください」
「は、はい!
(ど、どうしたのかしら?
しのぶちゃん怒ってる?そこがかっこいいわ!)」
彼女こそが、”お館様”産屋敷耀哉が竈門炭治郎の件にて冨岡義勇以外の唯一の適任者と期待していた柱なのだが……本当に大丈夫なのだろうか…。

☆☆☆☆☆

那田蜘蛛山を根城としていた鬼達を一掃した炭治郎は現在、鬼殺隊の本部へとやって来ている。
鬼殺隊に入隊するつもりがないのならば、必要以上に鬼殺隊と関わるのはやめておいた方がいいと思われるのだが、そこは炭治郎らしい

というべきか…。情報提供に対するお礼はしておかねばならないと思ったのだろう。炭治郎が討伐した鬼の数を考えたら、そんな必要はないと思うのだが…。

そもそも、那田蜘蛛山の鬼を一掃した時点ですぐに山から出ていれば……いや、その後も”蟲柱”胡蝶しのぶと”継子”栗花落カナヲと日輪刀を交えることになってしまっており、戦意喪失させる為に致し方なかったとはいえ彼女達の日輪刀を粉々にしてしまった故に、彼女達が何事もなく安全に山を出る間は守らなければならないという責任感（長男力）が働いてしまったのだろう。

お人好しなところは、炭治郎の長所であり、時に短所だ。

「はじめまして…飛天御剣流の最期の使い手…竈門炭治郎くん。お会いできて光栄だ。

私は鬼殺隊の当主、産屋敷輝哉だ」

その結果、炭治郎は鬼殺隊の総本部へと招かれ、”お館様”産屋敷耀哉と対面している。

「はじめまして、産屋敷さん。

それから遅れてしまいましたが、情報提供の方…誠に感謝しております」

「!?」

炭治郎の背後には、数時間後に柱合会議を控えている柱達……胡蝶しのぶ、甘露寺蜜璃、そして冨岡義勇の三人が念の為にと同席している。

ただ、産屋敷耀哉が炭治郎に情報提供していたことを初めて知った胡蝶しのぶと甘露寺蜜璃は驚愕の眼差しを浮かべていた。柱でそれを知っていたのは冨岡義勇のみ。その冨岡義勇も、那田蜘蛛山に向かう直前に聞かされたばかりだが…。

飛天御剣流の使い手である炭治郎と鬼殺隊は協力関係にある。それが伏せられていた理由は、鬼にされてしまった禰豆子が理由だ。

そして、柱合会議前にこの三人がその説明を受けているのは、鬼を連れた炭治郎を受け入れてくれるからと、産屋敷耀哉が判断したからである。

もっとも、冨岡義勇と甘露寺蜜璃は最初から中立的な立場でいてくれると判断していたようだが、胡蝶しのぶに関しては賭けのようなもので、炭治郎自身の力で解決したと言うべきだろう。
「お館様、他の柱には話すおつもりなのでしょうか？」
しかし、問題はここからだ。胡蝶しのぶが尋ねた通り、他の柱達に炭治郎と禰豆子の件を話すのかどうか…。炭治郎が鬼殺隊士だったならば、柱全員に揃って話したはずだ。炭治郎は隊律違反で処刑されていた可能性はあるが…。
だが、炭治郎は鬼殺隊士ではない。しかも、鬼殺隊の協力者というよりも、産屋敷耀哉の個人的な協力者と言うべきだろう。炭治郎が鬼を連れていようとも、柱といえど、当主の協力者に対して刃を向けるなど言語道断。
「ッ…。
（自分で尋ねておいてあれですが…居たたまれない…）」
ここに一人、刃を向けた者がいるが…。
ともあれ、これから先に起きえる展開で気にすべきはまさしくそこなのだ。
甘露寺蜜璃と冨岡義勇は中立的な立場で、胡蝶しのぶも一悶着起こしてしまったが、今は炭治郎の状況を理解し受け入れている。
「もちろん話すつもりではいるよ…けど…」
対して、残りの柱達はどうだろうか…。
「私同様に、竈門さんに斬りかかるはずですね」
「不死川と伊黒。
（あの二人は間違いなく竈門炭治郎と竈門禰豆子を斬ろうとするだろう）」
胡蝶しのぶと同様に……いや、それどころか彼女よりも質が悪いかもしれない。
冨岡義勇もその光景が容易に想像できたのか、最たる者達を名指ししている。
「た、炭治郎くん！その時は微力ながら助太刀するわ!!」
他の柱達は産屋敷耀哉の意思を尊重し、炭治郎と禰豆子を容認して

くれた三人の柱とは違う。
「煉獄さんと宇随さんは、禰豆子さんが人間を襲わないことを証明すれば納得してくれそうですが…、やはり問題は不死川さんと伊黒さんですね。それから、悲鳴嶼さんですか…。時透くんは…我関せずな気がしますね。
(それよりも甘露寺さん…あなたどさくさに紛れて、竈門さんのことをくん付けで呼んで…)」
残りの六人の内、五人の柱は間違いなく反対するだろう。その内の二人は、悪鬼滅殺を理念としているが柔軟な思考の持ち主のようで、穏便に済む可能性があるようだ。一人だけ、我関せずな柱がいるらしいが、その者が何故、鬼殺隊にいるのかは気になるところ…。
「失礼ながら産屋敷さん。
俺と禰豆子はこれ以上ここに長居するつもりはありません。ここに来たのも、あなたにお礼を言う為です。
それに、俺は禰豆子を連れて旅を始めた瞬間から、鬼殺隊と敵対するかもしれないと覚悟していました」
ただここで、静観していた炭治郎が口を開き、己の想いを口にする。炭治郎にとって、何よりも大切なのは禰豆子だ。それに、炭治郎には珠世と愈史郎という頼りになる協力者……仲間がいる。
寧ろ、炭治郎からしたらこれ以上は公にせずにいてくれた方がいいのではないだろうか…。柱と遭遇した際はその都度、状況によって対応すればいい。三人の柱が容認してくれた。それだけで十分だろう。
それに、三人の柱だけではなく他にも二人、炭治郎と禰豆子を受け入れてくれた隊士がいる。
「俺は今のままでいい」
「炭治郎くん…」
「…!
(あれ?しのぶちゃん…炭治郎くんの呼び方…え?え?もしかして、しのぶちゃんも?そうなの!?)」
これ以上、炭治郎が望むことは何一つない。
炭治郎の目的はあくまで、禰豆子を人間に戻し、鬼舞辻無惨を打ち

倒すことなのだ。
「…!
禰豆子?どうかしたのか?」
禰豆子の為を思えば、公にして容認してもらった方がいいかもしれないが、全員が全員、禰豆子を容認できるはずもなく、禰豆子を隠れて暗殺しようとする者が現れる危険も伴う。
それを考えると、産屋敷耀哉の個人的な協力者という今の立場が最もいい形なのではないだろうか…。
「むう…」
「!
ね、禰豆子!?」
だがそれでも、竈門炭治郎と竈門禰豆子が鬼殺隊にとって大恩人であることは揺るぎない事実だ。
那田蜘蛛山でも、炭治郎と禰豆子に助けられた隊士は多い。
そして、禰豆子という人を襲わない鬼の存在を受け入れられないと思われている六人の柱達も、後に禰豆子に感謝することになるはずだ。

「!?
お、お館様ッ――呪いが!!」
「実弥、また傷が増えたね。あまり自分自身で身体を傷つけないでほしいけど…ふふ、またこうして…君達の顔をこの眼で見れる日がやって来るなんて…今日はとても素晴らしい日だ。美しい天気だね」
竈門炭治郎と竈門禰豆子が、三人の柱を交えて産屋敷耀哉と初対面を果たした数時間後……半年に一度の柱合会議が予定通りに執り行

われていた。
　ただ、今回の柱合会議では、柱達が敬愛してやまない産屋敷耀哉の登場と共に大きな衝撃が柱達の間で起きた。
　もちろん、竈門炭治郎と産屋敷輝哉の初対面の場に同席していた三人の柱達――胡蝶しのぶ、甘露寺蜜璃、冨岡義勇の三人は、奇跡が起きた瞬間を目の当たりにしており、その際は他の柱達同様に驚愕していたが、今は頬を緩ませている。冨岡義勇だけは表情筋がまったく動いてはいないが…。
「視力がお戻りに!?」
「天元…君は本当に素敵だね」
「あ、有り難きお言葉!!」
　だが、柱達が驚くのも無理はない。何故なら、産屋敷耀哉の容貌に変化が見られたからだ。半年前の柱合会議の時点では顔の上半分が焼けただれたような……”呪い”の痕があり、しかも盲人だったのだが、今の産屋敷輝哉は呪いの痕が左目の周りのみに治まっており、視力まで回復している。産屋敷家は代々、とある理由により短命を宿命づけられているのだ。本来、呪いの痕は顔全体にまで拡大し、喉や胸部にまで拡がるとされているらしい……だが、今の産屋敷耀哉は左目の周りにこそ痕があるが、とても短命を宿命づけられているようには見えない。
「ああ…お館様…何という奇跡…」
「行暝。また一段と…更に逞しくなったね。
　さすがは最強の柱だね」
　六人の柱達は驚愕している。だがそれ以上に、産屋敷耀哉の視力が戻り、呪いの浸食が治まったことに歓喜している。
「よもやよもや！嬉しい驚きだ！」
「杏寿郎…君の笑顔にはいつも勇気づけられる。心が熱く燃えてくるようだ」
　これ程まで喜ばしい柱合会議は前例すらないはずだ。
「で、ですがお館様…いったい何が…」
「小芭内…今も変わらず、鏑丸とは仲良くしているみたいだね」

とは言え、喜ばしい反面で疑問も浮かぶ。最高峰の名医ですら、治すことができなかったものをどうやって…。
「お館様…」
「無一郎も元気そうで安心したよ。
それから、私の状態に関してだけどね…」
事情を一切聞かされていない柱達は、揃って同じ心境だ。
「少し歳の離れた友人のおかげだよ」
もっとも、産屋敷耀哉がいくら柱達を我が子のように大切に想っているといえど話せないこともある。
これは友であり、同士でもあるその者との約束なのだ。
知るのは産屋敷耀哉本人と、その場にいた三人の柱のみ。

☆☆☆☆☆

鬼殺隊本部を後にした炭治郎は現在、”蝶屋敷”という治療所へと向かっている。”薬学、医学に秀でた”蟲柱”胡蝶しのぶが私邸を負傷した鬼殺隊士達の治療所として開放しているのだそうだ。
炭治郎は、その蝶屋敷に入院することになった我妻善逸と嘴平伊之助に会いに向かっている。
我妻善逸と嘴平伊之助の二人は、炭治郎が強引に気絶させて療養するようにと藤の花の家紋の屋敷に置いてきたのだが、それが許せずにわざわざ炭治郎を追いかけて那田蜘蛛山に追いかけてきたようなのだが、その道中で”水柱”冨岡義勇と遭遇し、嘴平伊之助が炭治郎を倒すと口にしてしまった為に攻撃を受け……そして蝶屋敷に搬送されることになったそうだ。
炭治郎はそんな二人を心配し、少しばかりの罪悪感から見舞いに向かっているのである。
「それにしても、禰豆子の血鬼術が耀哉さんの呪いにまで効くなんて驚いたな」
蝶屋敷に向かいながら、炭治郎は鬼殺隊本部での出来事を思い出していた。

禰豆子が産屋敷耀哉に向けて忌々しいものでも見るかのような鋭い視線を向け、いきなり血鬼術を放った驚きの瞬間を…。正確には、禰豆子が鋭い視線を向けていたのは産屋敷耀哉ではなく呪いに向けてだ。

産屋敷家の者が代々受け継いできた呪いが、禰豆子には血鬼術にしか思えなかったのである。

禰豆子の血鬼術は鬼だけを燃やす炎。そして、鬼が生み出した毒を人の体内から焼却、浄化させる解毒効果もある。産屋敷家に受け継がれてきた呪いは血鬼術ではないはずだが、鬼が関係していることは確かで、禰豆子はその呪いを血鬼術と判断したのだ。

ただ、正しくは血鬼術でない為に、産屋敷耀哉の呪いが完治することはなく、禰豆子でも完全に浄化させることは不可能だった。それでも、呪いの効力を緩和させ、視力が元通りに戻るまでに回復させることができたのは大きな成果だ。

一時は、産屋敷耀哉を焼き殺そうとしたと勘違いされかけたが、それがきっかけとなり禰豆子は胡蝶しのぶ、甘露寺蜜璃、冨岡義勇の三人からの信頼を得た。

産屋敷耀哉と個人的な協力関係も強固なものとなり、三人の柱達からも認められ、炭治郎にとっては有意義な時間となったはずだ。

これ以上は望んではいない。

しかし、太陽のように暖かい炭治郎のもとには、自然と人が集まってくるのだろう。

日天の提案

人喰い鬼の原種であり首領――鬼舞辻無惨。
鬼舞辻無惨は現在、憎悪と怒り……そして困惑。様々な感情を抱いている。恐らく、本人も理解し難い状況なのだろう。
ごく最近、鬼舞辻無惨はとある鬼狩りを抹殺するべく、大規模な鬼の強化を図った。
下弦級の鬼の増強。下弦の鬼の強化。
これまで、鬼舞辻がそのような行動に出たことはなかった。しかも、それがたった一人の鬼狩りを抹殺する為だというのだから驚きだ。
「竈門…炭治郎ッ！」
だが、その鬼狩りは一週間足らずの短期間で、下弦の鬼を三体と下弦級の鬼を数十体葬っている。徒党を組まないはずの鬼が徒党を組み襲いかかって来ようと物ともせず、瞬きする間に終わらせるその鬼狩りが如何に鬼舞辻にとって脅威なのか少なからず理解できるはずだ。
ただ、鬼舞辻がその鬼狩りに憎悪と怒りを向けるのは理解できるが、困惑しているのはどうしてなのだろう。
「それよりもあの鬼は…いったい何だ？」
鬼舞辻は自身の配下にある全ての鬼が知覚する様々な情報を自身も共有することができ、視覚すらも掌握し、配下の視覚を通じて遠方を見ることも可能としている。これは謂わば、鬼舞辻の呪いのようなものだ。
しかし、たった二体ではあるが、鬼舞辻の呪いを解いた鬼が存在する。しかも、その内の一体は鬼舞辻に気付かれることなく自力で呪いを解いていたのだ。もう一体の鬼は自力で鬼舞辻の呪いを解いたわけではなく、鬼舞辻が弱っていたことが大きな要因で、鬼舞辻にとってもこのような出来事は初めての経験である。
「鬼だけを燃やす血鬼術…だと？」

そして、その鬼は鬼舞辻が生み出した鬼でありながら鬼の天敵――鬼を滅する血鬼術を扱うときた。
「ッ――兄妹揃って忌々しい!!」
更には、鬼舞辻が大規模な鬼の強化を図り抹殺しようとしていた鬼狩りの妹であることまで発覚した。
強化した下弦の鬼と、増強した下弦級の鬼達が悉く葬られ、忌まわしい……消し去りたい記憶が甦り、不愉快極まりない状況の鬼舞辻は擬態化した子供の姿でありながらも、分厚い本を破り裂いて怒りを露にしている。
花札のような耳飾りを付けた鬼狩り――竈門炭治郎と、鬼にされてしまった妹の竈門禰豆子。
鬼舞辻にとってこの兄妹はこの上なく厄介で、自身を脅かす災いのような存在だ。何としても葬りたいだろう。
もっとも、この状況は〝災い転じて福となす〟ものなのかもしれない。
竈門禰豆子の存在がまさしくそれだ。
鬼舞辻に気付かれることなく、鬼舞辻の呪いを自力で解いた唯一の鬼……そのような芸当が可能な竈門禰豆子ならば、何れは日光を克服することができるかもしれない。
竈門禰豆子は、鬼舞辻が悲願を達成する為の可能性を秘めているのである。
「あの男を彷彿とさせる人間が存在することは決して赦せん。だが、私が太陽を克服し完全な生物になる為に…今は様子見に徹せねばならんようだ」
だからこそ、鬼舞辻は必死に怒りを抑え冷静になる。
完璧な生物に限りなく近いと自負している鬼舞辻にとって、こそこそと隠れるように静観を決め込むこの状況は腸が煮えくり返るほどに屈辱的だろう。
それも、すべては太陽を克服する為。
しかし、鬼舞辻は気付いていない。考えてすらいない。
これまで多くの人間を殺し、多くの絶望と恐怖を生み出してきた鬼

舞辻に福が訪れるのか……答えは否。
因果応報。災いにはより大きな災いが降りかかることに、鬼舞辻無惨は気付いていない。

☆☆☆☆☆

「お帰りなさい…炭治郎さん」
「ただいま戻りました、珠世さん」
鬼殺隊の総本部に招かれ、鬼殺隊の当主である産屋敷耀哉と個人的な協力関係を築き上げた炭治郎は現在、彼の最大の協力者であり、打倒鬼舞辻無惨を掲げた同志でもある珠世が待つ本拠地へと戻っていた。
「ご無事で何よりです。
炭治郎さんが怪我なく戻ってきて、とても安心しました」
定期的に珠世のもとに戻るというのは、二人の間で交わされた大切な約束なのである。
その約束は炭治郎が強くあれる理由でもあった。
「俺もです。
誰かが…珠世さんが待っててくれている。珠世さんを思い浮かべたら、生きて必ず帰ろうと強く思えました」
炭治郎は喪った家族との大切な想い出を思い出しながら……珠世は長らく経験することのなかった人としての感情を味わいながら瞳に涙を浮かべている。
そして、炭治郎と珠世は互いに歩み寄り、珠世は炭治郎が本当に存在しているのかを確認するかのように頬に手を触れさせ、優しく撫でると、涙を流しながら優しく微笑んだ。
「誰かの帰りを待つ…永らく忘れていた感覚です。
炭治郎さん、あなたが無事で本当に安心しました。帰って来てくれてありがとう」
すると、炭治郎は頬に触れた珠世の手に己の手を重ね、もう片方の手の指で彼女の涙を拭いながら笑顔で述べる。

「俺は必ず珠世さんのもとに戻ってきます。約束です」
鬼狩りと鬼。
炭治郎と珠世は、本来なら相容れない存在だ。
それでも、炭治郎と珠世の間には強固な信頼関係がある。その信頼関係の根源は禰豆子を人間に戻し、鬼舞辻無惨を打ち倒すこと。
ただ、鬼舞辻無惨によって大切な家族を喪った者同士……炭治郎と珠世は、お互いが似ていることを理解し、お互いに足りない部分を補う存在なのだと感じていた。
そして、珠世の中でまた新しい想いが芽生えてしまった。
「炭治郎さん…。
(罪深い私が決して抱いてはいけない想い…ああ、炭治郎さん…あなたはどうしてそんなに温かく眩いのでしょう。
私は…あなたという日輪に焦がれてしまった。そんなこと赦されるはずなどないのに…)」
いや、正確にはすでに芽生えていたのだ。炭治郎の帰りを待つ間の珠世は、まるで”恋煩い”を起こしているかのような、何もかもが手につかない状況だったのである。
しかし、それも無理ないこと。
鬼である己を鬼ではなく人間として受け入れ、それだけではなく優しく、温かく包み込んでくれる炭治郎に、珠世が心を奪われないはずがない。おまけに、炭治郎は鬼舞辻無惨を打ち倒す為に必要不可欠な二つの御技を受け継いでいるのだ。
悲願を果たす為という想いもあるが、炭治郎の人柄に焦がれた珠世は、全てを捧げてもいいと心から想っているだろう。
「珠世さん…大丈夫ですか?
何か思い詰めているような匂いがあなたから…俺じゃ頼りないかもしれませんが、一人で抱え込まないでください」
「炭治郎さん…。
(あなたという人は本当に…これでは…あなたに恋い焦がれないはずがないじゃないですか。あなたは罪な殿方です)」
少年から青年へ……立派な男性へと成長しつつある炭治郎の顔を

珠世は見上げながら見つめている。
　赦されるはずがない想いだと理解しながらも、今この瞬間だけは赦してほしいと心の中で謝罪しながら、珠世は炭治郎の胸元に頭を埋めるように身体を預けた。
「お帰りなさい。
（この想いは伝えられない。
　ですがせめて…無惨を倒すまでの間だけは、あなたの帰る場所でいさせてください）」
　そんな珠世の行動に炭治郎は戸惑いながらも、珠世の行動を受け入れ、彼女の頭を優しく撫でるのである。
　炭治郎もまた、珠世の温もりを感じ、旅で張り詰めていた心が優しく解きほぐされるのを感じていた。それと同時に、己が思っているよりも疲弊していたことに気付く。身体ではなく、心が疲弊していたことに…。
　ふとそこで、炭治郎は改めて珠世の言葉を思い出した。
『傷つき、疲れたあなたの心と身体は、私が全身全霊を込めて治し、癒してさしあげます』
　理解していたつもりだろうが、完全には理解できていなかったことに、炭治郎は気付いた。そして、珠世という存在の大きさを身に染みて理解する。
　珠世が待っていると思い浮かべると炭治郎の心は温まり、益々強くなり、彼女がそばにいると張り詰め、疲弊した心が解きほぐされ癒されるのだ。
「珠世さんは、俺の癒しで心の拠り所なんだな…」
「え…？
（い、今…炭治郎さんは何と？）」
　炭治郎は心の中で呟いたつもりだろうが、その呟きが口に出て珠世に聞かれていたことに気付いていない。
　そして、珠世の身体から発せられる独特の匂いを嗅ぎとった炭治郎は少し身を屈め、無自覚に珠世の首もとに顔を埋めるのである。
「!?

た…炭治…郎…さん？」
突然の炭治郎の行動に珠世は硬直する。だが、本能はまったく一切嫌がってはいない。
ただ、二人の背後で何かが割れる音が響くも、完全に二人の世界に入り込んでいるのか……まったく気付いてはいない。

疲弊した心を癒されたことで晴れやかな表情を浮かべる炭治郎と、その炭治郎の予想外の行動に頬を染める珠世。
そして、炭治郎と珠世が身体を寄せ合う光景を目の当たりにし、怒り狂った愈史郎。
打倒鬼舞辻無惨を掲げた三人の拠点は現在……混沌としていた。
「え、えっと…
（ど、どうしましょう…まだ、身体が熱い。
夫からもあのような熱烈な行為はされたことがなかったのに…で、でも…嫌じゃなかった…）」
これから、定例会義が行われるはずなのだが、先行きが不安である。
「ッ!?
（た、珠世様がモジモジとされている！可愛い！
だがその原因が何故お前なんだ竈門炭治郎おおお！何故生きて戻ってきた!!）」
ただ、全ての元凶である炭治郎は珠世と愈史郎の様子がおかしいことに気付いてこそいるが、理由までは把握できていない。珠世が炭治郎に恋い焦がれてしまっていることにも、炭治郎の行動が嬉しかった反面恥ずかしがっていることも、愈史郎が珠世に恋い焦がれ、それ故に炭治郎に敵意（殺意）を剥き出しにしていることも……鈍感にも程がある。

「そ、それでですね、炭治郎さん。
鬼の血の採取、本当にありがとうございます。
炭治郎さんが採取なさってくれた下弦の鬼の血ですが、これまでの下弦の鬼の血よりも遥かに鬼舞辻の血が濃いものでした。予想通り…あなたを葬る為に下弦が強化され、下弦級の鬼が増強されている」
しかし、いざ定例会議が始まると珠世は冷静さを取り戻していた。さすがである。
「今後は上弦の鬼の襲撃もあるかもしません。
それと禰豆子さんの存在も露見したはずです。これで、臆病者の無惨があなたを恐れ、姿を眩ませることはないでしょう。禰豆子さんが太陽を克服できるかどうか気になって仕方がないはずですから…」
今後、炭治郎はこれまで以上の危険と隣り合わせとなるのだから、冷静になるのは当然だ。
鬼舞辻無惨を打ち倒すまたとない機会のはず。
珠世にとって、炭治郎との出会いはまさに千載一遇。
「炭治郎さん」
「んな!?
(珠世様から奴の身体に触れた!?)」
珠世は炭治郎の片手を取り、両手で握り締めながら決意を改める。
「必ず無惨をッ!!」
「ええ、俺達で必ず無惨を倒しましょう」
すると炭治郎は、残されたもう片方の手を珠世の両手に添え、力強い表情で言葉を返した。
「ふう!ふう!ふううう!
(竈門炭治郎おおお!
珠世様の身体に触れた罪は重いぞ!触れた分だけ貴様の寿命は縮む!いや、倍縮む!万死に値する!!)」

☆☆☆☆☆

炭治郎が鬼殺隊の総本部に招かれてから十日。

徒党を組む鬼が各地で増えつつある。
その影響で、鬼殺隊も多大な被害を受けていた。
ただ、鬼の数もまた減っている。

――日天御剣流・龍舞――

飛天御剣流の最期の使い手――竈門炭治郎が、たった一人で複数の鬼を瞬く間に狩っているからだ。
「大丈夫ですか？
…あれ？君は確か…カナヲ？」
「…竈門…炭治郎？」
そして今日、炭治郎はまた鬼殺隊士を窮地から救った。

翌日、炭治郎は再び鬼殺隊の総本部――産屋敷耀哉のもとを訪れていた。
「炭治郎、カナヲを救ってくれてありがとう。
徒党を組む鬼が増加傾向にあり犠牲者も増えている。優秀な隊士（栗花落カナヲ）を喪わずに済んだことは幸いだった」
「いえ…徒党を組む鬼が増えたのも俺がきっかけですから…」
炭治郎と産屋敷耀哉は、今のこの状況をどのようにして乗り越えるべきか話し合いを行っている。
徒党を組む鬼が増加傾向にあるのは、飛天御剣流の最期の使い手である炭治郎を鬼舞辻無惨がそれだけ警戒しているからだ。
その一方で、本来なら鬼舞辻無惨の関心が炭治郎に向けられているこの状況は、鬼殺隊が鬼舞辻無惨を滅殺するまたとない機会である。

だが、鬼殺隊士の質が著しく低下してしまっている現在、徒党を組む鬼が増えつつあるこの状況は鬼殺隊にとって危機的なものだ。
炭治郎が一人で多くの鬼を狩ったとしても、徒党を組む鬼達によって鬼殺隊士の犠牲が増えてしまっては、現状は何一つ解決しない。寧ろ、人間である炭治郎が先に限界を迎えてしまうだろう。
「耀哉さん…一つ提案があります」
「何だい？」
「二人…俺に鬼殺隊士を預けてくれませんか？」
そこで、炭治郎は産屋敷耀哉に一つ提案する。
その提案の真意とはいったい…。

日天稽古

鬼殺隊の当主である産屋敷耀哉と再び話し合いを行った炭治郎は現在、蝶屋敷を訪ねていた。

我妻善逸と嘴平伊之助……今日はこの二人にとある提案を伝える為に再度、蝶屋敷を来訪したようだ

「炭治郎テメエ！

スッキリした表情しやがって！そんなに珠世さんってのは美人なのか!?しかも、カナヲちゃんを横抱きして登場とか羨ましいぞコンチクショウが!!」

ただ、炭治郎は鬼殺隊本部に赴く前、道中で徒党を組んだ鬼達と戦っていた栗花落カナヲに遭遇し、窮地に瀕していた彼女を助けた。そして、足を負傷してしまった彼女を抱えて蝶屋敷に送り届け、そして鬼殺隊本部に向かったのだが、負傷した美少女を横抱きにして颯爽と登場した炭治郎に善逸は怒りを覚えたようだ。もっとも、炭治郎の場合は禰豆子を背負っていることもあり、もう一人抱える場合はどうしても横抱きになってしまうから仕方がない。何より、炭治郎は美少女ではなく男でも横抱きにしていただろう。

それと、十日前に蝶屋敷を訪れた際に、炭治郎がうっかり珠世のことを口にしてしまい、しかも馬鹿正直に珠世が美人であることまで善逸に言ってしまっていたことで、炭治郎は女好きの善逸を更に激怒させてしまっているようだ。珠世に癒されたことで、表情に雰囲気、炭治郎から醸し出される音など、何もかもが十日前と違っており、それがより一層、善逸の怒りに拍車をかけているようだ。

見事に火に油を注がれてしまったのである。

「戻ってきたか権八郎！

今日こそお前をブッ飛ばしてやるぜ!!」

炭治郎の再訪に別の意味で火に油を注がれた者もいる。

「珠世さんって誰!?

炭治郎くんってもしかして結婚しているの!?」

盛大に勘違いする者達(女)もいた。
「そう…だったのですか…。
(そう…よね。素敵な男性ですもの…炭治郎くんは。私のような毒塗れの女なんて――ッ!?私はいったい何を考えているのでしょう…私にはやるべきことがあるのに…)」
ちなみに、大人っぽく見えるが炭治郎はまだ15歳である。この二人の美女よりも年下だ。
だが一つだけ……どうして甘露寺蜜璃まで蝶屋敷にいるのだろうか…。胡蝶しのぶが蝶屋敷にいるのは当然だ。蝶屋敷は彼女の私邸なのである。
甘露寺蜜璃は柱で、そこまで暇ではないはずなのだが…。
とにもかくにも。今日もまた炭治郎の周りには自然と人が集っている。
「えっと…とりあえず、誤解?しないでほしいのですが、俺は結婚していませんよ。
それに…
(そもそも、珠世さんは俺を男として見て…ないだろうな)」
とりあえず、炭治郎はまず誤解を解く。内心では、誤解を解くことに抵抗を感じているようだが…。
一方で、誤解であったことを知った胡蝶しのぶと甘露寺蜜璃は、胸を撫で下ろしている。しかし、彼女達はそれだけでは安心できないだろう。珠世とはいったい何者なのか……彼女達は珠世という人物を調べるはずだ。
「ま、まあ今は俺のことはどうでもよくてですね…善逸、伊之助…」
炭治郎はそれ以上、珠世に関して話さないように本題へと入る。
「善逸、伊之助…俺と共に来てくれないか?」
炭治郎が産屋敷耀哉に頼み込み、預けてほしいと願った二人の隊士とは、我妻善逸と嘴平伊之助だった。

☆☆☆☆☆

徒党を組む鬼が増加傾向にあり、鬼殺隊はかつてない危機的状況にあった。
おまけに、鬼殺隊士の質が近年落ちていることも付随している。
これは、鬼殺隊に属すことなく鬼を狩る炭治郎にとっても大きく関わることで、決して無視できることではない事態だ。
炭治郎が如何に強かろうと、全てを守りきれるわけではない。守れない命もあるのだ。
だからこそ、炭治郎は鬼殺隊の戦力強化に協力することにした。
もっとも、鬼殺隊全体の戦力強化ではなく、一人で数十体の鬼を相手にできる柱級の隊士の増強である。これに関しては炭治郎自身が一対多数の戦いを得意としており、量よりも質な特性なのもあるだろう。
鬼殺隊の戦力強化に炭治郎がそこまで割く時間がないのも理由の一つだ。
そして、炭治郎からの提案に鬼殺隊の当主である産屋敷耀哉は全面的に賛成した。一人で並の隊士数十人……下手したら百人分の戦力とされる柱級の隊士を二人も同時に育て上げてくれるのならば、反対する理由は何一つない。寧ろ、協力を惜しまないだろう。
ちなみに、炭治郎が選んだ二人は顔馴染みだ。
我妻善逸と嘴平伊之助である。まだ新米隊士で階級がもっとも低い二人だが、炭治郎がこの二人を選んだ理由の一つは禰豆子を容認してくれたからだろう。
炭治郎が柱級の隊士を育て上げることを提案したのも、頼れる仲間が欲しかったからだ。今後、更に鬼舞辻無惨との戦いが激化することを考えた結果でもある。炭治郎は禰豆子を必ず守り抜くつもりではいる。生き抜くつもりでもいる。だが同時に、最悪の事態も想定しておかなければならない。もしもの時、禰豆子を託せる存在は多い方がいい。
もちろん、禰豆子を容認してくれるかどうかは大きな理由ではあるが、当然それだけが理由ではない。炭治郎がこの二人は強くなると……そう感じ取っているからだ。

それに、これは屁理屈ではあるが、炭治郎が鬼殺隊に加わることは飛天御剣流の掟を破ることになるが、鬼殺隊側が炭治郎に協力してくれるのは話が別だ。鬼殺隊にとっても、柱は鬼殺隊の重要な戦力で己に与えられた管轄区域があり協力させることは難しいが、柱級の戦力が炭治郎と協力してより多くの鬼達を狩ってくれるのは大きい。

磨き上げれば必ず強く輝く原石。

こうして、我妻善逸と嘴平伊之助は炭治郎に見出され、厳しい修行が幕を開けた。

「炭治郎くん…あなたは人に教えるのが壊滅的に下手くそなようですね」

我妻善逸と嘴平伊之助を柱級の隊士に育て上げる。

炭治郎が産屋敷耀哉に提案したこの一件なのだが、修行開始一時間ほどですでに難航を極めてしまっていた。

その理由はもちろん炭治郎である。炭治郎が如何にして柱級の隊士を育て上げるのか、現在の柱達の中で唯一”継子”を持つ身として蟲柱・胡蝶しのぶが気になり見学していたところ発覚した衝撃的な事実……炭治郎は人に教えるのが壊滅的に下手くそだったのである。

そもそも、自身が経験した修行を善逸と伊之助に課してしまっているのが間違いだ。

炭治郎が経験した修行は、善逸と伊之助が自信喪失と絶望、生き地獄をまとめて同時に味わっているほどに鬼畜なものなのだが、これは炭治郎の師匠である比古清十郎が炭治郎ならば乗り越えられると見抜き、天才的な加減なども時折加えつつ行ったものであり、謂わば炭治郎専用の修行法のようなものだ。

当然、炭治郎以外に行うべきものではなく、何より炭治郎だからこそ乗り越えることができたものだ。
飛天御剣流は最強無比の殺人剣であると同時に、選ばれた者しか会得することのできない御技。柱級の隊士を育て上げるのとは訳が違うのだ。
「しかも”常中”を知らないって…。
(いえ…知らないというのは語弊がありますね。
正確には、炭治郎くんが習得した呼吸こそが基本となる五つの呼吸の基となった”真の呼吸”と言うべきでしょうか…)」
それともう一点発覚したことだが、炭治郎が比古清十郎から身体強化法として教わり、亡き父親から教わったことを思い出しつつ習得した呼吸法と、善逸と伊之助が使用している呼吸法が少し違っていたのだが、実は炭治郎が使用していた呼吸法が、善逸と伊之助が使用していた通常の全集中の呼吸を更に地道かつ過酷な鍛練の積み重ねにより昇華させた呼吸……睡眠時を含む四六時中全集中の呼吸を維持し続ける高等技術――”全集中・常中”というものだったのである。
炭治郎は胡蝶しのぶから教わり、それを初めて知った。
ただこれについては、比古清十郎から教わったのが最初から常中だったのと、竈門家に代々伝わってきた”ヒノカミ神楽”の呼吸法が常中を極限にまで極め抜いたものだった為に仕方ないかもしれない。
炭治郎にとっての特殊な呼吸法の認識が、最初から常中を極限にまで極め抜いたものだったのである。
「しかし…これでは修行どころではありませんね。
(完璧だと思っていた炭治郎くんにこんな欠点があったなんて…ふふ、けどちょっと安心しました。誰にでも必ず欠点はあるんですね)」
「しのぶさん助けてくれよおおお!
アイツ鬼だよ!炭治郎って人間の皮を被った鬼だったんだよ!」
もちろん、極め抜いた呼吸をいきなりやってみろと言われても無理な話で、修行は最初の時点で盛大に躓いてしまった。
「ごめんね…才能なくて…」
自信に満ち溢れ常に猪突猛進だった伊之助ですらこの有り様であ

る。

☆☆☆☆☆

翌日。

「今日からは私も修行のお手伝いをします。肉体強化と実戦形式の修行に於いては炭治郎くんが。呼吸に於いては私が担当します」

初日から盛大に躓いてしまったどころか、ずっこけてしまった我妻善逸と嘴平伊之助の修行は、胡蝶しのぶも加わることになった。

尚、しのぶに上手く掌で転がされた善逸がやる気になり、伊之助もやる気を取り戻した。

ただその反面、己が言い出したことなのに初日から憐れな姿を晒してしまった炭治郎は落ち込み気味である。

「それでは炭治郎くん…カナヲを頼みます。

(ふふ、大人っぽいと思ってましたが、今の炭治郎くんは年相応で可愛いですね)」

それと、しのぶからの嘆願で、彼女の継子である栗花落カナヲも修行に参加することとなった。

徒党を組んだ鬼達の増加……何より、カナヲが単独の任務で徒党を組んだ鬼に襲撃され窮地に瀕したことに危機感を覚えたしのぶが炭治郎に嘆願したのである。

炭治郎はしのぶの嘆願を二つ返事で了承した。おまけに、カナヲはしのぶの指導と彼女の特性もあり、善逸達と比べたら一線を画す実力の持ち主だ。彼女の指導は主に、より強い相手との実戦形式の修行で、これならば教えるのが壊滅的に下手くそな炭治郎でも可能だろうとしのぶは思い至り、自身が善逸と伊之助に呼吸の修行をつけている間に、炭治郎にカナヲの修行をつけさせることにしたようだ。

そして、しのぶの計画は想定以上の成果をもたらすことになる。

カナヲは、卓越した動体視力を持っている。彼女はその卓越した動体視力で、”花の呼吸”を見様見真似で習得したのだそうで、今では

現在の柱達の中でも屈指の速さを持つしのぶですら見切られてしまう程のものなのだそうだ。
だからこそ、しのぶは炭治郎にカナヲの修行を嘆願した。
炭治郎の速さは、しのぶすらも遥かに凌駕しており、カナヲの動体視力を持ってしても見切ることができない。しかし、炭治郎の速さを見切ることができたならば…。
修行二日目……炭治郎が提案した柱級の隊士育成計画だが、指導方針は全てしのぶが考えたものとなったようだ。

☆☆☆☆☆

修行三日目。
「しのぶちゃんだけ狡い！
私も炭治郎くんと修行したい!!」
勘違いをしている恋柱・甘露寺蜜璃登場。
その結果、蜜璃も指導者として参加することになった……のだが、どうやら彼女も炭治郎と同じく人に教えるのが壊滅的に下手くそだったようで、カナヲの実戦形式の修行を手伝うことになったようだ。実戦形式のものならば、問題はないようだ。
寧ろ蜜璃からしたら、炭治郎の近くにいれることもあって大満足だろう。

☆☆☆☆☆

修行四日目。
今度は水柱・冨岡義勇がやって来た。
「新しい型を開発しようと思っている。
（手伝ってくれ炭治郎）」
ただ、彼の場合は自身の為のようだ。

☆☆☆☆☆

修行一週間目。
「カナヲ、今日はその辺にしておきなさい」
「師範…あと少しだけ…もう少しだけ…お願いします」
「！」
炭治郎との実戦形式の修行は、手加減しているとはいえかなり厳しいものだ。
だから、しのぶはカナヲの限界を感じ取り止めに入った。しかし、カナヲからの返答はしのぶの予想していなかったものだった。
「カナヲ…。
（あのカナヲが…自ら望んで…考えて行動した…。
姉さん…見てる？カナヲがやっと…自分自身で一歩踏み出したわ）」
過去の経験から、自分の頭で考えて行動ができなくなっていたカナヲが、自らの意思で行動したことに感動を覚え、しのぶは瞳を潤ませている。
恐らく、卓越した動体視力を持ったカナヲですら見切ることのできない炭治郎の速さに……これまで経験したことのない速さを目の当たりにしたことで、カナヲの心境に大きな変化が起きたのだろうが、それでも彼女を実の妹のように思っているしのぶからしたら大きな変化で、喜ばしいことだ。
「それにしても…まったくあなたという人は…。
（私や姉さんですらカナヲを変えることができなかった。
炭治郎くん、君は本当に凄い人です。
ありがとう）」
しのぶは、心の中で炭治郎に感謝の言葉を述べていた。

☆☆☆☆☆

修行開始から三週間。
一週間前に、善逸と伊之助はしのぶの的確な指導のおかげもあり、”全集中・常中”を習得した。

それ以降は炭治郎との実戦形式が主となっている。

――雷の呼吸　参ノ型　聚蚊成雷（しゅうぶんせいらい）――

そして、炭治郎の厳しい修行のおかげか、はたまた別の理由なのか……それまで雷の呼吸の壱ノ型しか習得できなかった善逸が、他の型を習得した。

「炭治郎おおお！

テメエ！こっちが死にそうになってるってのに、テメエはカナヲちゃんから手拭い渡されたり、お茶渡されたり特別扱いされやがって!!羨ましいぞコンチクショウがあああ!!」

要は、醜い男の嫉妬によって覚醒したのである。

もっとも、元鳴柱のもとで修行していたにも関わらず、壱ノ型しか習得できなかった善逸が他の型を習得できたのは炭治郎とカナヲのおかげでもある

雷の呼吸は、壱ノ型・霹靂一閃が他の全ての型の基本となっているのだが、その霹靂一閃は抜刀術だ。つまり裏を返せば、他の型も抜刀術として繰り出すことができるということ。

そこに思い至った炭治郎は、善逸に抜刀術を教えることにした。

同じ構えから、状況に応じてまったく違う型が繰り出すことができれば、それは善逸にとって大きな武器となる。何より、抜刀術という一つの技術を極め抜くことができればもしかしたら、抜刀術に関してのみは飛天御剣流すらも……いや、それは不可能だろう。だが、飛天御剣流は超えれないかもしれないが、鬼殺隊最速は夢ではないかもしれない。

ただ、ここでまたしても炭治郎の悪癖が仇となる。飛天御剣流こそ教えることはできないが、抜刀術の基礎に於いて本来なら炭治郎はこれ以上ない指導者だ。だが、炭治郎は教えるのが壊滅的に下手くそ。

しかし、ここで予想外の人物が炭治郎を窮地から救ったのである。

そう……それがカナヲだ。

カナヲの卓越した動体視力が炭治郎の抜刀術の動きを見切り、それを善逸に説明する。もちろん、炭治郎はカナヲが見切れる速さに抑えており、しのぶの継子ということもあってカナヲの説明は実にわかりやすく、そのおかげもあって善逸は壱ノ型以外を習得することができたのである。

炭治郎の実演とカナヲの解説による二段構えの指導だ。

☆☆☆☆☆

修行開始から一ヶ月。

皆、確実に成長している。

善逸は雷の呼吸の全ての型を習得し、抜刀術により一層研きをかけている。

カナヲは卓越した動体視力を更に高め、炭治郎との実戦形式の修行を誰よりも長く行っていることもあり、剣技も洗練されている。

そして、猪突猛進な少年――嘴平伊之助も同じくだ。

伊之助は驚くべきことに、呼吸も剣術も我流で習得しているみたいなのだが、考えてみてほしい……我流で並の隊士を凌ぐ実力を持った伊之助が基礎からしっかりと教わるとどうなるか…。

それと、どうやら伊之助は那田蜘蛛山で日輪刀を折られてしまっていたらしく、今日ようやく新しい日輪刀が届くのだそうだ。ちなみに、伊之助の日輪刀を折ってしまったのは水柱・冨岡義勇である。

「伊之助殿、あなたは自ら望んで日輪刀を刃毀れさせているとお伺いしました。

私はそれを聞いた瞬間、ある考えが頭を過ったのです。私の手で、憧れのあの方の刀を超える名刀を作り出せるのではないかと!!」

伊之助の専属刀鍛治である鉄穴森(かなもり)。

彼は、幕末の名刀匠に憧れているのだそうだ。

鉄穴森が伊之助に手渡した二本の日輪刀は、極めて細かくではあるがどちらも刃全体がノコギリのようにギザギザとなっている。

「伊之助殿…その日輪刀は予め刃の一部を毀しておくことで、切れ味

を損なわずに一定の感覚で使い続けられるようにしたものです。斬れ味は普通の日輪刀に劣りますが、使い手次第ではその欠点も補えるでしょう。

そして何より…その日輪刀は鬼をより多く斬ることで真の力を発揮するのです!!

伊之助殿、どうかその日輪刀で多くの鬼を斬ってください。多くの人々を救ってください」

伊之助に託された日輪刀……そう遠くない日、真の力が発揮されるだろう。

日天と柱編

日天と炎柱

夜明けを想わせる曙色の日輪刀を持つ剣士と、炎を想わせる赫い日輪刀を持つ剣士が背中を合わせ戦っている。

「君はいったい何者なんだ？

（強い…とてつもなく強い。

この子がお館様が言われていた”親しい友”。

だが、鬼を連れている）」

赫く燃え上がるような日輪刀を持つ剣士――”炎柱”煉獄杏寿郎は今宵、不思議な剣士と鬼に遭遇した。

しかし、その剣士は悪鬼滅殺を掲げ鬼を狩る鬼殺隊に所属する剣士として決して見過ごせない存在だ。

だがその剣士と鬼に煉獄杏寿郎は助けられてしまった。その剣士と鬼がいなければ、鬼殺隊最高戦力の一人に数えられる炎柱である彼ですら間違いなく殺されていただろう。彼が今回の任務で乗車した無限列車に巣食う鬼は、それ程までに厄介な血鬼術を使う鬼だったのである。彼一人だけならば確実に、自身だけではなく乗客諸共皆殺しにされてしまっていたはずだ。

「今は竈門炭治郎とだけ名乗っておきます。

それよりもまず…この鬼を葬らなければなりません。

この鬼の討伐は善逸と伊之助に任せましょう。恐らく、前方に鬼の急所はある。俺と禰豆子は前方四車両の乗客達を守りながら善逸と伊之助を援護します。あなたは後方四車両をお願いします」

その上、こうも的確な指示をされてしまっては…。

「了解した。

（助けられた上に、こうも的確で正確な指示を出されようとはな。うむ…柱として不甲斐なし!!）」

今は従うしかなく、何よりもやるべきことはこの無限列車の乗客達

を誰一人犠牲を出すことなく救うことが大切だ。
煉獄杏寿郎にとって、鬼は斬るべき対象であることは変わらない。それでも今は、弱き人々を守る為に戦う目の前の鬼を信じてみようと……その鬼の兄だと名乗る強い剣士を信じ、己のやるべきことを優先しようと決意し、大人しく指示に従う。
煉獄杏寿郎の人生に於いて、この出会いは生涯忘れることのできないものとなる。
そして、炎柱である煉獄杏寿郎にとってあまりにも大きな影響を与える出会いとなる。

無限列車編

時は遡り――数日前。
半年に一度、鬼殺隊総本部にて開催される”柱合会議”から二ヶ月経過した頃のこと…。
「”上弦”の可能性がある。
杏寿郎…この任務を君に任せようと思っているんだ」
「お館様！
その任務、炎柱として必ずや遂行してみせます!!」
短期間のうちに、”無限列車”という列車で四十人以上の人間が行方不明となり、数名の鬼殺隊士を送り込むも全員が消息を絶ってしまう事件が発生していた。
事態を重く見た産屋敷耀哉は、並の隊士では何人送り込もうが結果は変わらないと判断し、事件解決の為に鬼殺隊最高戦力の”柱”を送り込むことにした。

その任務に選ばれたのが歴代最強の”炎柱”（煉獄家歴代最強）の呼び声高い漢――煉獄杏寿郎である。

現在の鬼殺隊を支える柱達は、千年以上もの長きに渡り存在する鬼殺隊に於いて、”全集中の呼吸”を最初に使用し、歴代最強の呼び声高い戦国時代の柱達以来の精鋭揃いと言われるほどのもの。煉獄杏寿郎は、その柱達の中でも上位の力を持つ剣士だ。

産屋敷の予測通り上弦の鬼が関わっているのならば柱が出向くのは当然のこと。だからこそ、煉獄杏寿郎が今回の任務に選ばれたのだろう。

百年以上もの間、鬼殺隊は上弦の鬼の討伐に成功していないが、煉獄杏寿郎ならば可能だと産屋敷は信じて疑っていない。

彼本人も敬愛する産屋敷の期待に応えるべく、覚悟と決意に満ちた表情を浮かべ、力強く宣言している。

そして、この任務が煉獄杏寿郎にとって大きな転換期となるのだが……それを本人が知るはずもない。

「それとね杏寿郎…君には伝えておかなければならないことがあるんだ」

ただ、転換期を迎えるのは煉獄杏寿郎だけではない。今、鬼殺隊そのものが大きな転換期を迎えている。

「近いうちに、しのぶが柱から退くことになる」

「なんとッ!!

それは本当ですか!?」

これから上弦の鬼が関わっているかもしれない任務に赴く煉獄にとって、それは青天の霹靂。煉獄にとって尊敬に値する存在である”蟲柱”胡蝶しのぶが突然、柱から退くというのだから驚かないはずがないだろう。

しかも、二ヶ月前の柱合会議では五体満足で何一つ異変は見られなかっただけに余計である。

「もしや柱合会議後の任務で胡蝶の身に何か!?」

「いや、そういうわけではないよ杏寿郎」

だがどうやら、胡蝶しのぶが柱の座から退くには深い理由があり、

それは鬼殺隊にとって決して悪い話ではないことが産屋敷の様子からも見て取れる。
「しのぶが柱から退く理由はね、自身の毒の研究に集中する為なんだ」
とは言え、そのきっかけはやはりあまり良いものではない。
鬼殺隊にとって最大の仇敵である鬼舞辻無惨。その鬼舞辻についての新たな情報が、二ヶ月前の柱合会議後に発覚したのが大きなきっかけなのである。
鬼殺隊ですら把握できていなかった鬼舞辻の情報が、産屋敷の親しい友から告げられたそうなのだが、その情報は産屋敷ですら冷や汗を流しかけたほどのものだったそうだ。
下手をしたら危なく鬼殺隊本部でもある産屋敷邸の場所が鬼舞辻に知られてしまっていたかもしれないのだから、それは仕方がないだろう。
そして、鬼殺隊ですら把握できていなかった鬼舞辻の情報というのが、鬼舞辻が配下に置く全ての鬼が知覚する様々な情報を自身も共有することができる”知覚掌握”という厄介極まりないものだったのである。つまり、鬼舞辻は配下の視覚を通じて遠方を見ることが可能であるということ。
幸い、産屋敷の親しき友は鬼舞辻の配下ではなかった為に、その能力は発動されることなく、産屋敷邸の場所が鬼舞辻に知られることはなかったようだ。
ただ、鬼舞辻のこの能力のせいで、鬼殺隊士達は自身の情報を鬼舞辻に把握されてしまっている。もっとも、鬼舞辻は全ての鬼殺隊士の情報を把握するつもりはないだろう。鬼舞辻にとって、柱以外の鬼殺隊士は蟻も同然だ。
「よもやよもや…鬼舞辻無惨にそのような能力があったとは…いや、最初からそう考えておくべきだったかもしれん！」
「そうだね。
我々も迂闊だった」
柱にとって、これは由々しき事態だ。とくに、柱達の中で唯一鬼の頚を斬り落とす事ができない胡蝶しのぶにとっては死活問題だ。

「しのぶは二ヶ月前、那田蜘蛛山で窮地に立たされてしまった。硬い皮膚を持った下弦級の鬼に、刺突がまったく通用せずに毒を打ち込めなかったみたいだ。それに、鬼舞辻からしても頚を斬り落とす以外で鬼を殺す方法を持つしのぶは無視できない存在になる可能性もある」

裏を返せば産屋敷の言葉通りで、胡蝶しのぶは柱達の中で最も厄介な存在として鬼舞辻に認識されてしまっている可能性も高い。彼女は、日光と頚を斬り落とす以外で鬼を殺す方法を開発した唯一の存在だ。今後、鬼舞辻や上弦の鬼ですら分解する事ができない毒を開発する可能性もある。

「なるほど！

それで、胡蝶は更なる強力な毒の開発と剣術（刺突）の強化を図る為に柱から退くと!!」

那田蜘蛛山ではたまたま、産屋敷の親しき友が胡蝶しのぶを助けてくれたが、次も助けてくれるとは限らない。無論、その場に居合わせたなら助けてはくれるだろうが、共に行動しているわけではない為に、毎回助けてくれるわけがない。そもそも、柱が鬼殺隊士ですらない者に助けられるというのは、柱として面目丸潰れだろう。

だが、胡蝶しのぶの場合は他にも大きな理由がある。彼女は鬼殺隊にとって、絶対に欠かせない存在なのだ。

薬学だけではなく、医学にも精通している彼女は鬼殺の任務以外に、自身の私邸”蝶屋敷”にて負傷した隊士達の治療や、機能回復訓練などの後方支援を担うなど、他の柱達と比べてもその役目は多岐に渡っている。

「しのぶは鬼殺隊の専門医だ。

杏寿郎や他の柱達よりも担当区域は狭くしてあるけど、それでも多忙すぎることに変わりはない」

胡蝶しのぶは鬼殺隊の生命線と言っても過言ではないだろう。

煉獄も彼女には何度も世話になっており、彼女がもしいなくなってしまったらと想像した瞬間に身震いしている。

「確かに胡蝶の負担が大きすぎる！

だがお館様…柱が一人欠けてしまうのは士気に関わるのでは!?そ

れに、柱級の隊士がまったく育ってはいない状況だ！」
とは言え、煉獄の言うこともっともだ。現在の鬼殺隊は柱以外の隊士達の質が落ちている。負傷者、死亡者が多く、胡蝶しのぶが多忙なのもそれが理由なのだ。
「その点は大丈夫だよ。
この二ヶ月間、何もしてなかったわけではないんだ」
しかし、聡明な産屋敷が何の対策もせずにただ黙っているはずがない。
「この二月（ふたつき）で三人…三人の隊士が厳しい修行を乗り越えて柱級の隊士と言えるまでに成長してくれたんだ。私の親しき友と、しのぶからもお墨付きを貰っている」
「なんと!?」
胡蝶しのぶが抜けた穴を埋めてくれる存在が三人もいる。
柱は、並の隊士数十人……いや、百人分に相当する剣士とまで言われる実力者揃い。その柱に匹敵する力を持った剣士が三人もいるというのは、戦力が低下している鬼殺隊にとっても朗報だ。
「杏寿郎。
実は君の今回の任務に、その三人の内の二人を同行させるつもりなんだ。だから、君もその子達の実力を見極めてほしい」
「うむ！時透も刀を握って二月で柱になっている！本人の努力と才能にもよるが、成長するには十分な期間だ！
会うのが楽しみで仕方ない!!」
二ヶ月前の柱合会議でも鬼殺隊士の質の低下は問題視されていただけに、これを機に隊士の質が全体的に改善されたらと思っているはずだ。二ヶ月という短期間で柱級の隊士を育てたという修行法も気になっているだろう。
「それと、今回の任務は私の親しい友も同行している」
「それはお館様の呪いの進行を抑えてくれたという！
ぜひとも会ってみたい!!」
その修行法を考案した……いや、考案したというのは少し語弊がある。

産屋敷が”親しい友”と呼ぶ存在はひたすら三人を扱き、鍛え上げただけだ。人を指導するということが壊滅的に下手で、その者はただ実戦形式で打ち合い、体に叩き込んだようなもの。
「杏寿郎…私の親しい友はとても強い。
けど、本来なら君達とは相容れない存在だ。だから、冷静になって判断してほしい。すぐに答えを決めるのではなく、その者がいったいどのような人物なのか、しっかりとその目で見て、確かめてから判断してほしいんだ」
柱達全員が敬愛する産屋敷耀哉が親しい友と呼ぶ存在――竈門炭治郎。
良い意味でも悪い意味でも鬼殺隊に多大な影響を及ぼしている竈門炭治郎と、その者に鍛え上げられた隊士達が如何程のものなのか、煉獄は任務とは別にそれを見極めなければならない。

☆☆☆☆☆

鬼は人間を遥かに凌駕する身体能力を持つ。
その鬼の中には、”血鬼術”と呼ばれる異能な力によって音速の速度を出せる鬼すらも存在する。
「権八郎に速さで挑むなんてバカな鬼だぜ」
「相変わらず容赦ねえ…。
(けど…音速ってこんなに遅かったっけ?
炭治郎がかなり手加減した速さよりも遅いような?俺もこれくらいの速さなら簡単に出せるけど…やっぱアレが理由だよな…炭治郎の地獄の訓練のおかげというか、所為というか…)」
だが、音速を目で捉えることができるどころか、遅いとまで口にする人間達が存在している。
猪から剥ぎ取った頭皮を被った上半身裸の少年と黄色い頭の少年は至って冷静な様子で、寧ろ憐れみの籠った瞳でその鬼の行く末を悟っているようにすら思える。
「なッ――消えた!?

（い、いったいどこに!?）」
そして案の定と言うべきか…。
音速の鬼は花札のような耳飾りをした赫灼の髪の青年に襲いかかり、鋭い爪で頚を引き裂いた……のだが、その青年は幻だったかのように姿を消してしまったのである。

――日天御剣流・白龍幻日――

そして、気付くと全てが終わって（反転して）いた。
「え…？」
地に落ち行く頭。瞳に映り込んだ景色は逆さまで、最後に捉えたのは絶対的強者の後ろ姿だ。
「す…凄え…。
（ちくしょう…まったく見えなかった！）」
音速の鬼の速度は捉えることができた猪頭の少年ですら、その青年がいったい何をしたのか捉えることができなかった。
音速を遥かに凌駕する神速。
「あれは…。
（カナヲちゃんの超人的な動体視力を翻弄した躱し特化の舞”幻日虹”…けど、それに更に剣撃を加えた？）」
音速を上回る神速の捻りと回転で、幻だと思わせるかのような瞬間回避は辛うじて捉えることができた黄色い頭の少年だが、どのように鬼の頚を斬り落としたのかまでは捉えることができずにいた。
猪頭の嘴平伊之助と黄色い頭の我妻善逸。この二人は見ていただけだが、音速で動く鬼を遅いと言えるほどに強く、彼らが戦っていたとしても間違いなく鬼を討伐していただろう。
しかし、花札のような耳飾りをした青年――竈門炭治郎は、その二人よりも遥かに強い。
「この鬼は違う。
実力と犠牲者の数が見合わない…恐らく”下弦”か、はたまた”上弦”か…本当の黒幕は他にいると思う」

その上、冷静なこの分析力。見た目こそ少し大人っぽく見える青年だが、実はまだ十五歳の少年だ。
竈門炭治郎は現在、四十人もの乗客が犠牲になったという事件の情報を受け、その事件の調査に当たっていた。その過程でこの鬼と遭遇したのだが、どうやらこの鬼の所業ではなかったと、すぐに鬼の実力を把握し、真の黒幕がいることを悟っていた。
「紋次郎！
次は俺の番だからな！」
「ああ、真の黒幕の討伐は伊之助と善逸に任せる」
「えええええ!?
ちょッ――嘘だろ!?十二鬼月かもしれないんだぞ!?俺を死なせるつもりなのか!?とんでもねえ奴だ！マジで鬼だ！お前は鬼より鬼だよ炭治郎!!」
そして、竈門炭治郎はこれが序章に過ぎず、これから先に起きるであろう事態がより混沌と化すであろうことを嗅ぎとっているようだ。
その証拠と言っては何だが、混沌と化す状況を表すかのように烽火が上がる。
「君達は何者だ!?
【炎の呼吸　陸ノ型　天火突】」
「あなたこそ…何者ですか？」

――日天御剣流・碧羅龍巻――

盛んな火気の如く鋭く襲いかかる刺突。
その刺突を躱わし、腰を回す要領で水平に回転しながら放たれる返し技。
「ッ！
（俺の最速の突き（陸ノ型）を躱された!?）」
夜明けを想わせる曙色の日輪刀と、赫く燃え上がる炎を想わせる日輪刀が交差する。
「俺は〝炎柱〟煉獄杏寿郎!!」

今宵、運行再開する無限列車。
人と鬼の戦いがより激化しようとしている。

飛天は壮大

四十人もの行方不明者が出た曰く付きの列車――”無限列車”。
その無限列車だが、しばらく運行が中止されていたものの、本日より運行が再開されることとなった。
そして今日、無限列車に四人の鬼狩りが調査……いや、鬼を討伐する為に乗車する。
「なるほど!
君達が胡蝶が言っていた”かまぼこ隊”か!!」
だが、さっそく雲行きが怪しい状況となっているようだ。
その任務を与えられた”炎柱”煉獄杏寿郎は任務を共にすることになっている鬼狩り達の内の一人――竈門炭治郎と日輪刀を交えている。
「いや!”トビウオ隊”だったか?
まあどちらでもいい!とにかく今は、額に痣のある少年!君を問い質さなければならん!」
「問い質す…とは、いったい何をです?
(しのぶさん…かまぼこ隊っていったい何ですか?
それに、トビウオ隊って…感性が独特すぎます)」
恐らく、”炎柱”煉獄杏寿郎は竈門炭治郎が背負っている箱の中身について……何故、箱の中に鬼が入っているのかを問い質すつもりなのだろう。
ちなみに、炭治郎は何を問い質すつもりなのか大方のところ予想はついているようだが、それよりも胡蝶しのぶが名付けた部隊名の方が気になっているようだ。そもそも、炭治郎は鬼殺隊に所属しておらず協力関係にあるだけで、部隊も何もないのだが…。炭治郎の存在を容認した柱達は、皆が炭治郎に鬼殺隊に加わってほしいと思っており、これもその気持ちの現れなのだろう。
ただ、炭治郎という存在を知らなかった柱からしたら、炭治郎は粛清対象に該当する。鬼を匿っているのだから当然だ。胡蝶しのぶが

煉獄杏寿郎にどのような話をしたのかは気になるところだが、柱である彼女が認めている存在であろうとも、鬼を連れているのならば鬼殺隊士として斬るべきことに変わりはない。

もっとも、炭治郎は大人しく斬られるつもりなどない。

「君はどうして鬼を連れているんだ!?」

「俺の大切な妹だからです」

箱に入っている鬼は、炭治郎の妹――竈門禰豆子だ。炭治郎にとって何よりも大切な唯一残された家族である。たとえ鬼になろうとも、炭治郎の禰豆子に対する想い(愛情)は何一つ変わることなどない。

「なんと!?」

そして、煉獄杏寿郎が斬りかかりはしたものの竈門炭治郎を問い質すという行動に出たのは、敬愛する主の言葉を思い出したからだろう。

「君は…君がお館様が言われていた”親しい友”なのか?」

「親しい友なのかどうかはともかく…耀哉さんとは親しくさせてもらっているのは確かです。

それよりも、日輪刀を納めてもらえませんか?あなたと戦う意思はまったくありませんので…」

煉獄杏寿郎だけではなく、柱全員が敬愛してやまない産屋敷耀哉の親しい友を、いくら鬼を連れているからといえど斬るわけにはいかないだろう。

何より、産屋敷は煉獄杏寿郎にこのように口にした。

『冷静になって判断してほしい。すぐに答えを決めるのではなく、その者がいったいどのような人物なのか、しっかりとその目で見て、確かめてから判断してほしいんだ。』

とはいえ、理解できない考えであることもまた事実。

己の目で確かめて判断しようにも、禰豆子が人を喰い殺せば取り返しがつかないのだ。

それでも、煉獄杏寿郎が見極めようとするのは、産屋敷以外の人物

からの説得があったからだろう。
それは、”蟲柱”胡蝶しのぶだ。
「胡蝶が言っていたのも君のことだったのか…」
煉獄だけではなく他の柱達からの信頼も厚い胡蝶しのぶから、煉獄は出陣の際に釘を刺されていた……お館様からの言葉を決して忘れるなと…。そして、信じろと…。最初こそ、煉獄はその言葉が何を意味しているのか理解できないでいたが、今なら理解できるはずだ。
『煉獄さん、彼は必ずあなたの力になってくれるはずです。志は私達と一緒…何一つ違わない。
どうか…彼を信じ、共に戦って下さい。』

鬼に強い憎しみと怨みを抱いているはずの彼女が、鬼を連れている者を信じた。
両親を殺され、唯一残された家族(姉)も殺された。それだけではなく、大切な継子達まで…。いったいどれだけ、大切な存在を鬼に殺されてしまったのか…。
そんな胡蝶しのぶが竈門炭治郎を信じることは、苦渋の決断とも言えるほどのものだったはずだ。
「かまぼこ少年…俺は君を信じたわけではない。
君のことを信じているお館様と胡蝶を信じただけだ。だから忘れてくれるな。君の行動一つ一つが、お館様と胡蝶への信頼に関わるということを…お館様と胡蝶の信頼と期待を決して裏切ってくれるな。もし、君が怪しい動きを見せた時は、俺は迷うことなく君と妹(鬼)に刃を振るう」
だからこそ、煉獄は日輪刀を鞘に納めて見極めようとする。鬼を連れた兄と鬼にされてしまった妹――竈門炭治郎と竈門禰豆子を。
きっと、胡蝶しのぶ以外が何を言っても煉獄の心を動かすことはできなかったのではないだろうか…。煉獄家は先祖代々、産屋敷家に仕え鬼狩りを生業としている由緒正しき鬼殺隊の名門一族。煉獄家にとって、鬼殺隊の信念である”悪鬼滅殺”は家訓とも言えるものだ。

その煉獄家に生まれ落ちた煉獄杏寿郎が信念を曲げて、鬼を目の前にしながらも日輪刀を納めたのである。
胡蝶しのぶ同様に、煉獄杏寿郎の下した決断は相当な覚悟と決意が必要だっただろう。
「ありがとうございます。
しのぶさんと耀哉さんの為にも…二人の信頼と期待を絶対に裏切らないと誓います」
炭治郎もまた、煉獄の覚悟と決意に応えることを心に固く誓う。炭治郎は多くの者達の想いをその背中に背負っているのだ。
「煉獄さん…一つだけいいでしょうか？」
「何だ？」
「俺は”かまぼこ”ではなく竈門です」
それぞれの想いを胸に……ただ、鬼を狩る信念だけは同じ。
飛天御剣流の最期の使い手と鬼殺隊”炎柱”がこれより無限列車へと乗り込む。

☆☆☆☆☆

腹が減っては戦ができぬ。
無限列車に乗り込んだ四人の鬼狩りは現在、鬼との戦いの為に栄養を補給しているところである。
「美味い！」
「美味いですね！」
鉄道の駅などで、乗客の為に売られている駅弁に舌太鼓を打ちながら、竈門炭治郎と煉獄杏寿郎は二人で二十食近くの牛鍋弁当を平らげている。
強い剣士は、その強さに比例して食欲も旺盛なのかもしれない。
「くそッ！負けねえぞ!!」
それに負けじと、嘴平伊之助も猪の被り物を外して駅弁を食っているところだ。
「いや！勝負じゃないからな！

それよりどんだけ食ってんだよあの二人！うぷッ、見てるだけで腹一杯になったんだけど！」
そんな三人を見ているからか、我妻善逸は胃もたれを起こしている。鬼との戦いを前に大丈夫だろうか…。本人も胃もたれで戦線離脱などしたくないだろう。不名誉極まりない。
「美味しかったあ」
ただ、食べることは生きる上でも、体を回復させる上でも、人間にとって必要不可欠なものだ。
鬼殺隊士達は口を揃えて一緒にするなと口にするだろうが、それは鬼にとっても同じくだ。こう言ってしまっては何だが、人間が動物を殺して食べるのと何も違わない。何より、鬼は人間だったのだ。
生きる為なのだ。命ある存在がこの世界で生きることができているのは、何かの……誰かの犠牲があってこそのもの。
「ごちそうさまでした！」
それを決して忘れてはいけない。
だからこそ炭治郎は感謝と敬意を忘れずに、食べ終わった後に心の底から想いを口にする。
それでも、人間と鬼には決定的な違いがある。
人間は慈悲の心を持っているということ。一方で鬼は、本能に忠実であり、本能に忠実なあまり狡猾で卑怯極まりなく、時には獲物である人間を利用し、より多くの人間を喰らう。
鬼に慈悲の心など一切ない。
あるのは、血肉に餓えた剥き出しの本能だ。

人は腹一杯食べると、眠くなることがある。

しかし、食後の睡眠は身体にかかる負担を大きくするだけでなく、睡眠の質も低下させてしまうこともある。
これから鬼との戦いを控える鬼狩りにとって、食後の睡魔は最大の敵であり、気を付けねばならない点だ。
無論、柱ならば当然気を付けているだろう。
「い、言われた通り、切符を切って眠らせました。
なので…なのでどうか、私も眠らせてください。
死んだ妻と娘に会わせてください！」
「約束だからね。いいとも…よくやってくれた。
家族に会える良い夢を…お眠りィィィ」
だがまさか、守るべき対象である堅気の人間が鬼に協力していようとは…。しかも、無限列車に乗った乗客の切符を切る駅務員が協力者だったとは想定外だろう。
「あの…私達はこれからいったいどうしたら…」
しかも、鬼に協力している人間は一人だけではない。
何らかの悲しい理由で人生に絶望した子供達。その子供達を利用し、無限列車に巣食う鬼――下弦の壱・魘夢はより多くの人間を喰らうべく、用意周到に行動している。
鬼殺隊最高戦力の一人である”炎柱”煉獄杏寿郎だけではなく、柱級の鬼殺隊士にまで成長した我妻善逸と嘴平伊之助は、魘夢の血鬼術にかかってしまった。
それどころか、竈門炭治郎すらも…。
鬼との戦いは、すでに始まっていたのである。
「ねんねんころり、こんころり。息も忘れてこんころり」
己達が魘夢の血鬼術にかかってしまったことにすら気付くことなく、炭治郎達は深い眠りについてしまった。
下弦の壱・魘夢は眠り鬼。
魘夢の血鬼術は夢操作と凶悪極まりないものだ。一度眠らされてしまったが最後……身体を動かすことができない。
「楽しそうだ。幸せそうだ。
もう目覚めることはできないよ…永遠に」

☆☆☆☆☆

今は亡き家族達との幸せな生活。
鬼にされてしまった妹が人間として生きている。
竈門炭治郎にとって、この世界は何よりもの幸せ。
「起きないと…」
だが、炭治郎の瞳に映る幸せな光景は過去であり夢。いや、夢ですらなく贋(まやかし)だ。
「さっさと起きろ…馬鹿弟子」
「…師匠…ありがとうございます」
今は亡き大切な家族達の為にも炭治郎は決して立ち止まらない。後ろを振り返ることもない。前を向き歩むのだ。
死んだ者(家族)が望むのは、生きている者(家族)の幸福。何より、後悔なく自分らしく生き、人生を全うしてくれることだろう。炭治郎はそれを理解している。
そのように、心の真髄にまで教え込(叩き込)まれたのだ。
炭治郎の師匠である比古清十郎は、炭治郎にただ剣術を教え、剣術の腕前だけを鍛え上げたわけではない。比古清十郎が最も強く鍛え上げたのは炭治郎の心だ。
飛天御剣流の使い手に必要なのは強靭な肉体と鋼の精神。心技一体揃ってこそ為せる御技。
どんな心理攻撃にも動じず、現実と夢を見分け、守るべき大切な者の為に日輪刀を抜き戦う。
「やるべきこと…斬るべきもの…わかってるな…馬鹿弟子」
「はい」
そして、己の心の支えとなっている絶対的な存在(師匠)――比古清十郎に導かれ、炭治郎は己の頸に刃を当てる。
肉を斬らせて骨を断つ。
夢の中とはいえ自ら命を絶つなど、常人にできる事ではないだろう。相当な胆力が必要だ。

しかし、これが夢ですらなく、鬼に見せられている都合の良い贋(まやかし)であることに気付いた炭治郎は迷いなど一切なく、戦う為に斬る。

下弦の壱・魘夢の血鬼術は催眠術の要領で対象を眠らせ、魘夢の意のままの夢……贋(まやかし)を見せるものだ。

大切な家族に先立たれた者や、何らかの理由で人生に絶望した者にとって、これほど魅力的な力はないだろう。大切な者達と永遠に過ごすことができ、傷つくことのない世界なのだ。

そんな世界に誘ってもらえるのならば、絶望を味わった人間は何だってする。人を傷つけることに何の躊躇もないだろう。

不治の病……”結核”を患った青年も、そんな一人だった。

魘夢が見せる夢の空間内には、対象が見せられている夢の世界以外に、その外側に”無意識領域”と呼ばれる空間があり、そこには対象者の”精神の核”が存在している。魘夢が意のままに操る世界だが、対象者の精神と密接に繋がっているのだ。これを破壊されてしまうと、対象者は精神が崩壊し廃人になってしまう。

そして、結核の青年は、竈門炭治郎の精神の核を破壊するべく、炭治郎の精神世界に潜り込み、精神の核がある無意識領域にまで足を踏み入れた。

「な…何という…す、凄い…」

ただ、結核の青年が炭治郎の無意識領域で目にしたのは、どこまでも広大で、空気は澄みきり心地好く、暖かく、様々な龍が、光る小人を乗せて気儘に飛び回る壮大な世界だった。

飛天御剣流の使い手は決して常人には推し測れない。それどころか、鬼ですらも…。

飛天の使い手は壮大なのだ。

日天と拳鬼

肉を斬らせて骨を断つ。

「禰豆子…すぐに戻る」

今見ている世界が贋（まやかし）であることにいち早く気付いた竈門炭治郎は、本当の世界へと戻るべく日輪刀を己の頚に押し当て、迷いなく一閃した。

生きる意思が誰よりも強いからこそ、現実と贋を瞬時に区別でき、自決することで敵の”血鬼術”から逃れることができると見抜けたのだろう。

飛天御剣流は死中に活を求めるのだ。

人の原動力は心であることを下弦の壱・魘夢は理解していた。しかし、竈門炭治郎の心の強さを魘夢は見誤ってしまった。いや、理解の範疇を超えていたと言うべきだろう。

心技体揃ってこその……心技体、限界を超えてこその飛天御剣流の使い手なのだ。

「むう」

目覚めた先で竈門炭治郎を待ち受けていたのは、愛しい大切な禰豆子である。

「おはよう、禰豆子」

炭治郎達を含む全ての乗客達が魘夢の血鬼術にかかってしまい、その異変に気付いた禰豆子は箱の中から出ていたようだ。ただ、炭治郎ならば自力で血鬼術を破るはず……禰豆子は誰よりも炭治郎を信頼

しており、彼女はただ待っていた。炭治郎が覚醒するまでの間、炭治郎に膝枕をして頭を撫でながら…。
禰豆子を想う炭治郎と炭治郎を想う禰豆子。唯一残された二人の兄妹の愛と絆が、血鬼術を破り覚醒するきっかけになったのではないだろうか。
「ありがとう、禰豆子」
覚醒した炭治郎は禰豆子の頭を優しく撫で、禰豆子は炭治郎にすり寄っている。心の底からお互いに想い合っているのだろう。この想いがある限り、炭治郎と禰豆子はどんな鬼の血鬼術にも、己自身にも負けることはない。
「人の心の中に土足で踏み込む鬼…赦せない」
立ち上がった炭治郎から醸し出される静かな怒り。下弦の壱・魘夢は自殺行為に等しい行動を取ってしまった。龍の髭を撫で、決して触れてはならない龍の逆鱗に触れてしまったのだ。

☆☆☆☆☆

下弦の壱・魘夢は、自身の常識からあまりにも掛け離れた人間と遭遇していた。
「どうせならッ――禰豆子ちゃんと結婚して幸せな家庭を築き上げてる夢を見せてくれ!!
【雷の呼吸　壱ノ型　霹靂一閃】」
魘夢は催眠術の要領で相手を眠らせ、自身の意のままに夢を見せるという厄介極まりない血鬼術を使う。侵入した相手の記憶を読み取ることができ、任意の夢を見せられるのだ。
攻撃力自体は皆無な血鬼術だが、この術に囚われた対象は身体を動かす事ができない。それはつまり、術さえかければほぼ魘夢の勝利が確定するということ。
「ああ!?
紋逸！横取りしやがったな!?」
しかし、この二人の鬼狩り――我妻善逸と嘴平伊之助は魘夢の血鬼

術を破り、目の前に現れた。正確には、魘夢の血鬼術を破った者はもう一人おり、その者は自力で破っている。恐らく、魘夢にとって初めての経験のはずだ。この二人は、自力で破ったその者と、その者の協力者に血鬼術を解いてもらっただけにすぎない。

それならばもう一度……血鬼術で眠らせればいいだけのこと…。魘夢はきっとそう思ったはずだ。

だが、我妻善逸は再び魘夢の血鬼術で眠らされてしまったのにも関わらず、魘夢の頚を斬り落としたのである。

「…!

(斬ら…れた?)」

その速度は人間の身体能力を遥かに上回る鬼の目ですら捉えられず、ただ腰の柄に手を置いた善逸が瞬間移動したようにしか見えず、頚を斬り落とされたことすら認識できないほどの速さ。

血鬼術を解ききれていない眠った状態にも関わらず、魘夢が視認できない速度で頚を斬り落とすなど誰が想像できるだろうか…。

これが我妻善逸なのだ。善逸は小心者故の異常な恐怖心が原因で、眠っている間――無意識状態でしか本領を発揮できない特性を持つ、肝心な時にしか役に立たない剣士なのである。

もっとも、善逸は炭治郎との修行で少しずつ自信を持てるようになり、平時でも実力を発揮できるようになりつつある。今回は、魘夢が眠り鬼だったということもあり、眠っている状態でも本能的に危機を察知し、極限の無意識状態へと入ったのだろう。

善逸は見事に下弦の壱・魘夢の討伐を果たしたのだ。

無限列車の全てが魘夢の血であり、肉であり、骨であり……魘夢は

無限列車と融合した。
一時は禰豆子の血鬼術のおかげで窮地を脱し、善逸が魘夢の頚を斬り落としたことで二百人の乗客は無事に守られたかと思いきや、事態は急変。
炭治郎達は再び窮地に立たされていた。
「竈門少年…本当に黄色い少年と猪頭少年だけで大丈夫なのか？」
無限列車全体が魘夢の身体（肉塊）となり、至る所から触手のような……無数の腕が攻撃してくる状況で、全車両全方位を二百人の人質を取られた上で囲まれている危機的状況だ。
だが、このような絶体絶命の状況だろうと、炭治郎は一切焦っていない。寧ろ、悠然とした姿で立っている。
我妻善逸と嘴平伊之助も、炭治郎が乗客達を守ってくれているからこそ、魘夢の頚を斬り落とすことにのみ集中できるのだろう。
炭治郎も、善逸と伊之助ならば魘夢の頚を見つけ出し斬り落とすと確信している。事実、善逸と伊之助は魘夢相手に優位に立っているようだ。無限列車と融合し、異形な姿へと変貌した魘夢は複数の目で善逸と伊之助を囲い、視線を合わせた二人を強制的に眠らせる術を駆使して戦っている……が、善逸と伊之助は魘夢にとって相性最悪の相手だったのである。
善逸は眠った状態でも戦闘可能で、伊之助は視線に対する鋭敏な感覚を持ち、尚且つ被り物をしているおかげで視線を合わせづらく、二人とも魘夢の血鬼術が一切効かない。
複数の目も、炭治郎との修行の末に善逸が発展させた【雷の呼吸　壱ノ型　霹靂一閃・万（ばん）】と、同じく炭治郎との修業のおかげで成長した伊之助の二刀流によって一瞬で多くの目を潰されてしまったようだ。
自身の血鬼術が効かない鬼狩り達と、鬼に仇なす鬼と戦わなければならないなど、これまで多くの人間を殺してきた付けが一気に回ってきたようなものだろう。
「ええ、大丈夫ですよ。
二人なら必ず頚を斬り落とします。

（恐らく、この列車を動かしている運転士も鬼に利用されているはず。一応、善逸と伊之助に注意するようにと言っておいたけど…そっちが心配だな）」

その上、人質に取ったはずの乗客二百人を守るのが件の耳飾りの鬼狩り――竈門炭治郎と、鬼舞辻無惨の呪いから逃れた竈門禰豆子。そして、〝炎柱〟煉獄杏寿郎ときた。

五人の柱を相手に戦っているようなこの状況こそが、魘夢にとって最大の不運だったのではないだろうか…。

炭治郎も、魘夢よりも魘夢に利用された人の方が狂気に満ちた行動に走るのではないかと心配しているようだ。それでも、善逸と伊之助ならば大丈夫だろうと信じて疑っていない。二人の実力に絶大な信頼を寄せている。もっとも、それも無理はないことだ。何故なら、二人は炭治郎に鍛え上げられたのだ。炭治郎の地獄の修行を乗り越えた強者……弱いはずがない。炭治郎は誰よりも善逸と伊之助が強いことを知っている。

「もうそろそろ――！」

すると、突如として落雷のような音が聞こえたかと思いきや、断末魔が響き渡り、無限列車が大きく揺れる。そして、炭治郎は顔を綻ばせており……煉獄にもいったい何が起きたのかすぐに想像できてしまう。

「凄いぞ善逸！凄いぞ伊之助！」

功労者である二人に称賛の声を炭治郎が送ると、同時に無数の手が人質に取った乗客達を道連れにしようと伸び…。

しかし、その腕が乗客達に触れることはなく、瞬く間に細切れにされてしまう。

「天晴れ！

本当に頚を斬り落とすとは見事だ黄色い少年！猪頭少年！

【炎の呼吸　漆ノ型　業火連天】」

今のこの状況が意味しているものはつまり、善逸と伊之助が魘夢の頚を斬り落としたということだ。

煉獄は若手の鬼狩りの台頭に強く感心すると同時に頼もしさを覚

え、その表情は安堵に満ち溢れており、四車両をとてつもない速度で駆け巡りながら炎の呼吸の型を放っている。
そして、煉獄は脱線する無限列車の被害を最小限にとどめるべく、次々と炎の呼吸の型を繰り出していた。さすがは柱……日輪刀一つで脱線する巨大な列車の被害を最小限にとどめることができるとは……。
煉獄の反対側では、炭治郎も同じく日天御剣流の剣技を次々と繰り出している。炭治郎と煉獄の共闘により、無限列車の被害は最小限に抑えられるはずだ。
炭治郎は今回、善逸と伊之助が柱に匹敵する力を持つ剣士であることを証明させるべく、下弦の壱の討伐を二人に任せた。自力で覚醒した炭治郎は最初こそ魘夢との戦いに赴こうとしたが、無限列車全体から魘夢の匂いを嗅ぎ取ったことで、もしもの事態を想定し善逸と伊之助に魘夢討伐を一任したのである。そしたら案の定、魘夢は無限列車と融合しており……炭治郎が列車全体から魘夢の匂いを嗅ぎ取ったのはそれが原因だったのである。
その結果、炭治郎は乗客達の護衛に回った。この面子の中で、複数人を守りながら戦うことに長けているのも炭治郎で、善逸と伊之助も炭治郎が乗客達の護衛に回ってくれていたからこそ、何一つ不安もなく魘夢を討伐することができたのである。煉獄にとっても、竈門炭治郎と竈門禰豆子を知る良い機会だったはずだ。
「…!
(何だ?
何かがここに近づいている。下弦の壱よりも遥かに禍々しい血の匂い。無惨の血の匂いが濃い…まさか!?)」
ただ、善逸と伊之助が魘夢を討伐したというのに、炭治郎の表情は煉獄とは対照的なものに変化した。
一難去ってまた一難。炭治郎の優れた嗅覚は、再び迫り来る危機を嗅ぎ取っている。それも、とてつもない速度でこの場所に迫っているようだ。
まだ夜は明けていない。

下弦の壱・魘夢との戦いは序章に過ぎない。
下弦の壱よりも禍々しく、無惨の血の匂いが濃い存在ともなれば限られるだろう。炭治郎ですら未だに遭遇していない十二鬼月――”上弦の鬼”しかいない。
「煉獄さん…あとは任せます」
「竈門少年ッ、何処に行くつもりだ!?」
今この場所に上弦が向かっているならば、寧ろ己の方から出向いた方が被害を食い止められるのではないか……そう考えた炭治郎は、この場を煉獄に託す。
「ここに鬼が迫っています。
それも…匂いからして恐らくは上弦。なので、俺はそちらに向かいます」
「よもやッ――それは本当か!?」
今この場に於いて上弦の鬼と戦えるのは炭治郎か煉獄の二人のみだが、鬼殺隊ですら一世紀以上の長きに渡り討伐することができていない上弦の鬼を討伐できる可能性があるとしたら、それは恐らく煉獄ではなく炭治郎だろう。
上弦の強さを知る剣士は現代には存在していない。何故なら、上弦と戦った剣士は皆――殺されているからだ。
上弦に限りなく近しい実力の下弦の壱・魘夢ですら、例えるならば嵐の前の静けさでしかない。上弦の鬼の実力は天災と呼ぶに相応しい。
「禰豆子、お前は善逸と伊之助のもとに向かってくれ。もしかしたら、下弦の壱は最後の力を振り絞って善逸と伊之助に攻撃しているかもしれない。もしそうだった場合、お前の血鬼術で二人を助けるんだ」
「む!」
善逸と伊之助の方も、魘夢が完全に消滅するまで気を抜けないが、そちらは禰豆子に任せて炭治郎は上弦の方に向かうべきだろう。乗客達の避難誘導なども己が対処するよりも、鬼殺隊の柱である煉獄に任せた方がいい。恐らく、直に鬼殺隊の事後処理部隊”隠”が到着するはず。それを考えると尚の事だ

炭治郎ならば、煉獄よりも早く上弦の鬼のもとに辿り着ける。乗客達の身の安全を第一優先に考えた場合、これが最良の選択だ。
「禰豆子、善逸と伊之助を任せる。
煉獄さん、乗客達を任せましたよ…上弦の鬼は絶対に、ここには近づけさせません」
炭治郎は脱線する列車から危険を承知で飛び出し、上弦の鬼のもとへと向かう。勢いは弱まりつつあるとはいえ危険な行為だ。それでも、飛天御剣流の使い手は何のその。
弱きを助ける為に、飛天の最期の使い手は己がやるべきことをやる。

「馬鹿な！馬鹿な！
こんな悪夢ッ――お前達も道連れだ!!
【強制昏倒催眠・地獄の囁き】
堕ちろぉぉぉ!!」
それは、消滅する魘夢が現実(敗北)を受け入れることができなかったが故の最後の……最悪の悪足掻き。
時間を含むありとあらゆる法則、理論が魘夢の思い通りに構築される世界へと引きずり込み、対象者に地獄の苦しみを与える最強にして最悪の血鬼術だ。
「むうう!!」
――血鬼術・暁天の加護――
しかし、その最後の悪足掻きも叶わず……悪夢を決して覚めること

はなく、魘夢は悪夢を瞳に焼きつけながら消滅してゆく。
多くの人間達に都合のいい夢を見せ、悪夢で苦しめ続けた魘夢の最後が、悪夢で終わるとは皮肉な話である。
「むん！」
何より、眠ることが大好きな禰豆子は、他者に思い通りに夢を見せられることを決して善しとしない。
夢は本人のみの世界。決して、他者が土足で踏み込んではならぬもの。

☆☆☆☆☆

鬼舞辻無惨配下の精鋭、十二鬼月の中でも強者たる鬼の上位六体から構成されるのが〝上弦の鬼〟である。
その強さは、下弦の鬼を含めた他の鬼とは比較にならない戦闘能力及び特異体質を有しており、鬼殺隊と鬼の長い戦いの歴史に於いても、この百年余り一切顔ぶれが変わっていない。鬼殺隊最高戦力である〝柱〟ですら単騎では太刀打ちできない程の凄まじい戦闘力を持っており、柱を含む鬼殺隊士達を数えきれない程葬り続けている。
「上弦の…参!!」
そして、炭治郎が相対しているこの鬼は上弦の鬼の中でも、揺るぎない不動の地位を築き上げている三体の鬼の内の一体である〝上弦の参〟猗窩座だ。
何れは……寧ろ、禰豆子を人間に戻す為に必ず戦わなければならない、避けては通れぬ道。
その上弦の鬼が炭治郎の前に現れたということは、炭治郎に対する鬼舞辻の警戒度が極限に近しいまでに増したことを意味している。
「その耳飾り…貴様が竈門炭治郎か…。
(このガキ…闘気が限りなく薄い。赤子よりも薄い…こんな人間、初めてだが…弱すぎるということか。
何故、無惨様はこのような弱者を警戒する?)」
だが、炭治郎の詳しい情報を与えられておらず、ただ殺せとしか言

い渡されていなかった上弦の参・猗窩座は、赤子から大人……全ての人間が発しているという猗窩座だけが感じ取ることのできる”闘気”が極端に薄い炭治郎を弱者と見なし、迂闊にも正面から特攻してしまう。

――飛天御剣流・双龍閃――

「!?

(はッ――速い!!)」

己が見たものや経験した事しか信じられないのは人間も鬼も同じ。

猗窩座が受けた一撃は、まさにそれを強く体現している。腕を斬り落とされたことはこれまで何度もあっただろうが、鞘で殴られ、かなりの距離まで吹き飛ばされたのは初めての経験だ。

「ぐッ……こ、このガキッ!!」

猗窩座が相対する剣士は弱者ではない。

猗窩座の”常識羅針”では決して推し量ることのできない剣士龍である。

日天の産声

鬼舞辻無惨は上弦の鬼達に竈門炭治郎の抹殺を命令していた。しかし、鬼舞辻は竈門炭治郎についての詳しい情報までは与えていなかった。

それは何故なのか……それは人間も同じなのだが、人間も鬼も己の目で見て経験した事以外、なかなか受け入れきれない生き物だからだろう。

とくに、人間を遥かに凌駕する身体能力を持つ鬼達の中でも常軌を逸した存在である上弦の鬼は、人間を下等種族と見なしている節が強くある。

これは油断と言う他がないが、一世紀以上もの長きに渡りその座に君臨し続ける強者故の自信でもあるだろう。その上弦の鬼の中でも、上弦の参・猗窩座は過信が強い。

これまで葬った多くの鬼狩りを相手に、手を抜いて戦ったのも一度や二度ではないだろう。

「ぐッ……!

(焼けるような痛み――ッ、斬られた腕が再生しない!?

しかも、鞘で殴られた部分も焼けるような痛みが残っている!!)」

だが、猗窩座の過信もたった二撃で消え失せてしまった。

たった二撃……たった二撃で、猗窩座にここまでの生命の危機を感じさせた鬼狩りは未だかつて存在しないだろう。

猗窩座は、竈門炭治郎という鬼狩りをこれまで戦ったこともない強敵(脅威)として認めるしかなかった。そして、鬼舞辻無惨が警戒する理由をたった二撃で垣間見た気がしていた。

手加減など以ての外。この鬼狩りこそ、全力をもって排除しなくてはならない存在――竈門炭治郎なのだ。

「貴様は今ここで殺す…術式展開!

【破壊殺・羅針】」

武術の構えと共に猗窩座が”術式展開”と唱えると、血鬼術が発動

される。　発動と同時に猗窩座の足元に〝壱～捨弐〟までの数字が描かれた雪の結晶を象った陣が展開した。
　この陣は相手の闘気に反応して攻撃を感知する性質を有しており、反応は敵の闘気の強さに応じて強くなるようで、猗窩座の攻防の要となる血鬼術だ。
「…！
（ど、どういうことだ？
　竈門炭治郎の闘気が…更に薄く――ッ!?）」
　ただ、血鬼術を発動しても尚、猗窩座は竈門炭治郎を推し量ることができずに困惑することとなる。
「ぐあッ!!」
　ほぼ感知できない闘気に反応が遅れてしまった猗窩座は、背後に高速移動した竈門炭治郎の斬撃を胸に深く刻まれてしまう。辛うじて後ろに飛び退いたことで、肩から真っ二つに斬り下ろされることはなかったが、肩から腹にかけて負わされた傷は深く、その傷も再生できずにいる。
「き、貴様ッ！
【破壊殺・空式】!!」
　激昂して猗窩座は距離を取り、虚空を拳で打ち衝撃波を弾丸にして炭治郎に向けて連続で放つ。拳打の数だけ放たれる衝撃波……拳打の速さは次第に増していき、炭治郎へと襲いかかる。

――日天御剣流・土龍円舞――

　拳打から放たれる無数の衝撃波を、竈門炭治郎は日輪刀を鞘に納る

と、納刀した状態で下段から炎の弧を描くように地面を抉り、土石を飛ばすことで猗窩座が放った拳打による衝撃波に衝突させて防いでいた。
「凄い…竈門少年…君はいったい何者なんだ？
（あのような方法（土石を飛ばして）で上弦の鬼の血鬼術を防ぐとは！
しかし、今の動き…炎の弧を描くような動きは炎の呼吸にどこか通ずるものがある）」
百年以上もの長きに渡り鬼殺隊が葬ることができずにいる上弦を相手にここまで戦える鬼狩りが存在することに、煉獄杏寿郎はただただ驚愕しており、炭治郎と猗窩座の異次元の戦いに割って入ることができずにいた。
己ですら力不足だと痛感させられている。
数トンはあるであろう列車の横転の衝撃すら打ち消す剣術の使い手が、尻込みしてしまうとは……上弦の鬼が如何に強いのか、その上弦の鬼と互角の戦いを繰り広げている炭治郎の強さが煉獄杏寿郎の様子からも垣間見れてしまう。
「呼吸には…まだまだ上が存在するということか…」
そして、煉獄杏寿郎の視線の先で、猗窩座から距離を取った炭治郎が日輪刀を鞘に納め、抜刀術の構えを取る。
「見せてもらうぞ竈門少年」
”炎柱”煉獄杏寿郎が目指すべき先がそこに存在する。
飛天御剣流とヒノカミ神楽、二つの御技を会得した炭治郎が辿り着いた境地――日天御剣流。
その日天御剣流の剣技の中でも、炭治郎が一番得意とする剣技はきっとこれだろう。
――日天御剣流・赤龍頭舞い（せきりゅうかぶりまい）――
「くッ！
（こ、これはッ――退避を!!）」
繰り出される神速の抜刀術。

そこから始まる御技は、美しい舞いの如し。
続けて放たれる袈裟斬り、下段からの斬り上げ。
「ぐうぅ！
（は、速いッ!!）」
今度は上段から下段へ弧を描くように…。
更に続けて、前方広範囲に渦を描くように回転斬りを放った後に、すぐさま猗窩座に迫り強烈な斬撃を…。
「がッ！」
「まだだ」
猛攻はまだまだ続き、刺突、連続斬り、そして連続斬りが更に威力を増していき、まるで型が繋がっているかのように、炎の龍が流れるように神速の剣技が次々と繰り出されていく。
「な、なんとッ!?
（よもやよもやだ！
これは炎の呼吸ッ――いや、正確には違うが炎の呼吸の型に酷似している！しかし、炎の呼吸よりも遥かに速く、そして…威力も遥かに上だ！
何より、型を壱から順に続けて放っているかのような…そのような事、今まで考えたこともなかった！）」
煉獄杏寿郎は炭治郎の御技を目の当たりにし、かつてない衝撃を受けている。いや、感動していると言うべきだろうか…。
そもそも、型を続けて放つという特性は、竈門一族に代々伝わる”ヒノカミ神楽”の特徴であり、鬼殺隊が継承してきた基本の五大呼吸他、派生の呼吸にはない要素だ。
煉獄杏寿郎が衝撃を受け、感動してしまうのも無理はないだろう。その上、現在の柱達の中でも上位の力を持っているであろう彼ですら、上弦の鬼を相手に炎の呼吸の型を壱から順に続けて放つのは不可能である。
炭治郎の御技はその不可能を可能とし、柱である煉獄杏寿郎が感動する程に洗練されたものだ。
視線の先で上弦の鬼を追い詰める炭治郎に、煉獄杏寿郎はいったい

何を思うのか…。
己の無力さに対する絶望か……それとも、これまで以上に心を熱く燃やすのか…。
「うむ！
俺はまだまだ弱かったということか！
（だが、竈門少年のおかげで俺が目指すべき先が見えた！
俺は決して止まらない！心を燃やせ！
俺は”炎柱”――煉獄杏寿郎だ！）」
煉獄杏寿郎は決して諦めず、立ち止まることのない後者だ。
才能のある者は極一部。残りは何の価値もない有象無象の塵芥などとは決して思うこともない。

☆☆☆☆☆

地面を削る強烈な踏み込み。
抜刀術から始まり、炎の呼吸の型に酷似して剣技を続けて繰り出す”日天御剣流・赤龍頭舞い（せきりゅうかぶりまい）”の締めもまた、炎の呼吸の型（奥義）に酷似したものである。
締めというだけあり、その威力は多くの面積を根こそぎ抉り斬る程のもの。
「ッ！
（く、喰らえば…死ぬ!!）」
剣の速さ、身のこなしの速さ、相手の先を読む速さ、三つの速さを最大限に生かすことで繰り出される御技は、上弦の鬼ですら死を恐れてしまう程のもの。
これまで多くの人間を喰い、柱を含む多くの鬼狩り達を葬ってきた猗窩座に迫る曙色の日輪刀。
その日輪刀は、絶望と恐怖、人間達に深く長い暗闇をもたらした猗窩座を断罪する夜明けの輝きを強く放っている。
元は人間でありながら、人間を下等生物と見下していた猗窩座が人間に葬られようとしているとは……これもまた因果応報。

しかし、炭治郎の曙色の日輪刀は猗窩座の頚を斬り落とすことなく、無数の眼が浮かぶ異形の刀に防がれてしまう。

「…!

き、貴様はッ――”上弦の壱”!?」

突如、眼前に現れた存在に驚愕する猗窩座だが、彼は間一髪で命を救われた状況に安堵することなどなく、同時に強い敗北感を味わっている。しかも、助けに入ったのが上弦最強の鬼ならば尚更だろう。

姿を現したのは長い黒髪を後ろで縛り、紫の着物と黒の袴を着用した見た目は侍風の男(鬼)――上弦の壱。その顔には悍ましい三対の眼が並び、額と首筋にかけて炭治郎の額の痣と酷似した炎の様な痣が浮かんでいる。

「猗窩座…私に勝つのでは…なかったのか?

【月の呼吸　伍ノ型　月魄災禍(げっぱくさいか)】」

上弦の壱は、炭治郎に殺されかけた猗窩座に向かいそう口にすると同時に、炭治郎に向けて強すぎる殺意を放ち、刀を振るうことなく仕掛けてきた。

炭治郎の斬撃を防いだ鍔迫り合いの状態から、竜巻のような斬撃が発生し炭治郎へと襲いかかる。

!?

(これが上弦の壱…しかも、呼吸を使うのか!!)」

しかも、上弦の壱は”全集中の呼吸”を使用しており、炭治郎が何よりも驚いたのはその点だろう。人間を遥かに凌駕する身体能力を持ち、鬼舞辻無惨が生み出した鬼達の中でも最強の鬼が呼吸を使い、攻撃力、速度を更に高めているのだ。

斬撃を躱した炭治郎は優れた嗅覚で鬼舞辻無惨の濃すぎる血の臭いを感じ取り、上弦の壱に鋭い眼差しを向けている。
それと同時に、かつてない危機感を覚えていた。
「貴様が…竈門炭治郎か…その額の痣…忌々しい。
【月の呼吸　陸ノ型　常世弧月・無間】」
炭治郎が感じるその危機感は正しく、上弦の壱は問答無用で炭治郎に攻撃を仕掛けてきた。
炭治郎と上弦の壱は、今まで出会ったことがない。しかし、上弦の壱が炭治郎に向ける感情は激しい憎悪で、それを優れた嗅覚で感じ取った炭治郎は疑問に思っている。向けられる憎悪の強さは、鬼舞辻無惨が炭治郎の抹殺を上弦達に命じていることとはまったく別だと思わざるをえない。
一振りで縦方向に無数の斬撃が乱れ撃たれる。喰らえば最期……細切れにされることだろう。
一瞬のうちに前方の広範囲に放たれるこの斬撃は、見切る事はおろか間合いの外に出る事すら困難。
〝血鬼術〟と〝全集中の呼吸〟という対極を合一して至った技……それこそが上弦の壱の血鬼術であり、斬撃を衝撃波として飛ばす他、剣の軌跡による斬撃に付随する自立した三日月状の細かな斬撃を発生させ斬撃を形成するという、人の手の及ぶ領域を逸脱した絶技――まさしく災厄だ。

――日天御剣流・龍変幻日――

しかし、人間でありながら災厄と呼ぶに相応しい者達がこの世には存在している。
「！」
変幻自在な神速の瞬間回避（身体捌き）で無数の斬撃の全てを躱した炭治郎は上弦の壱の懐に潜り込み、上半身の捻りと力強い踏み込みを利用して日輪刀を斬り上げた。

――日天御剣流・碧羅龍昇――

「ッ！

（今の身体捌き…日の呼吸・幻日虹…縁壱の型の酷似していた。だが…日の呼吸とは…少し違う…この剣技はいったい…！）」

上弦の壱は刀で受けるもその威力は凄まじく、炭治郎よりも上背のある上弦の壱を宙高く吹き飛ばしてしまう程だ。

そして、飛び上がった後に宙返りし再び地に降りた炭治郎は、宙高く吹き飛ばした上弦の壱に向かって、力強い踏み込みから突進する。

――日天御剣流・九頭龍旭日（くずりゅうきょくじつ）――

九つ頭の龍が旭と共に昇る。

繰り出される御技は、神速を最大限に発揮した九方向からの八つの斬撃と一つの刺突を同時に繰り出す。

「！

（縁…壱…！）

【月の呼吸　拾陸ノ型　月虹（げっこう）・片割れ月】」

その御技を前に、上弦の壱の脳裏に……消し去りたい過去の記憶が甦ってしまう。

だからこそ、上弦の壱は消し去りたい過去を消し去るべく、炭治郎を今ここで必ず殺すべく、上から地面に三日月を縦に突き刺す様な斬撃を複数放ち応戦する。

だが、三対の瞳に映る炭治郎の姿と、消し去りたい過去の記憶が重なってしまうのである。

『兄上…何の心配もいらぬ。私達の才覚を凌ぐ者は必ず現れる。

今この瞬間にもきっと、産声を上げているのだから…』

地に降り立ち、背を向け合い立つ竈門炭治郎と上弦の壱。
激しい空中戦の行方は果たして…。
「ぐッ！」
地に膝を突いたのは炭治郎である。
「竈門少年!?」
肩から大量に噴き出す血。かなり深い傷だ。
上弦の壱の斬撃はそれだけ強く、鋭く…。だが、上弦の壱は炭治郎を葬り去るつもりで放った斬撃は、炭治郎の命を奪うことはできなかったようだ。
「その髪の色…その容姿…煉獄家の者か…」
炭治郎に駆け寄る煉獄杏寿郎を瞳に捉えた上弦の壱は何か(過去)を懐かしむような雰囲気を醸し出しながらも、炭治郎に止めを刺そうと前へと進む。
「…！」
しかし、上弦の壱が炭治郎に向かい一歩踏み出したと同時に、身体の九ヶ所から激しく血が噴き出す。
「な…に…ッ!?
(焼けるような…この痛み…これは…縁壱のッ!!)」
炭治郎が負った傷は深い。ただ、上弦の壱が負った傷はそれ以上に深い。
何故なら、焼けるような激しい痛み以上に、炭治郎の斬撃は過去の辛い記憶が鮮明に呼び起こしてしまったのである。
「あなたはここで俺が葬る…継国巌勝」
!?
何故…その名をッ!?」
そして、炭治郎が口した名に上弦の壱は激しく動揺してしまい…。
「あの人の想いは途切れていない。

繋がっているんだ」
不滅の鬼が、人の想いが不滅であることを思い知ることとなる。

日天の夜明け

竈門炭治郎と上弦の壱、そして上弦の参が死闘を繰り広げるなか、空は明るみ始め――間もなく朝がやって来る。

「炭治郎!!」

「炭吾郎!!」

朝を迎えようとするなか、その場所に遅れてやって来たのは炭治郎が信頼する仲間達で、無限列車にて下弦の壱を見事に討伐した我妻善逸と嘴平伊之助、そして……炭治郎にとって何よりも大切な存在である竈門禰豆子だ。

「むう!!」

禰豆子達は、炭治郎にとって何よりも守り抜きたい存在であり、炭治郎の力の源でもある。

それを証明するかのように、三人の無事な姿を瞳に捉えた炭治郎は頬を緩ませた後に、再び力強い表情を浮かべていた。

「もうすぐ朝が来る…だから必ず…継国巌勝ッ、お前を今ここで倒す!!

(禰豆子、善逸、伊之助…無事でよかった。)」

「竈門…炭…治郎ッ!」

深い傷を負いながらも立ち上がった炭治郎は、日輪刀を握る手に力を入れ、”十二鬼月”最強である上弦の壱の頚を斬り落とすべく最後の猛攻を仕掛けるのである。

――日天御剣流・九頭龍　鬼滅の舞い――

神速を最大限に発揮しての九方向からの八つの斬撃と一つの刺突を同時に繰り出す九頭龍閃を鬼を滅するまで舞い続ける。

炭治郎の師である比古清十郎が得意とする御技だからこそ、炭治郎もまた、この御技を昇華できたのだろう。

「ッ、ぐうッ…くッ、この…わ…私が…!

（竈門…炭治郎…忌々しい！
貴様は…何故ッ…縁壱…だけでは…なく…彼奴(あやつ)の…”龍柱”の姿…まで…重なる…のだ！）」
炭治郎が負わされた傷は深く、これだけの激しい動きを続けていれば普通は、その箇所から体が裂けてしまうはずだ。それでも、炭治郎は止まらない。
上弦の壱・黒死牟は、炭治郎の神速の猛攻を刀で防いでいるが徐々に圧されつつある。
最強の上弦を追い込む存在がいるなど…。
「ッ…うおおぉぉぉ!!
（俺はまだやれる。長男なら弱音を吐くな。こんな痛み…大丈夫だ。）」
だが、先に限界を迎えようとしているのは黒死牟ではなく、炭治郎だ。
黒死牟が受けた傷も深く、まだ再生できずにいるが、やはり人間と鬼では体の性能、体力が違いすぎる。
「上弦の壱ともあろうものが…なんたるざまだ！
術式展開!!
【終式　青銀乱残光】」
しかも、この状況で上弦の参・猗窩座が戦いに介入してしまう。何としてもここで、炭治郎を葬り去るつもりなのだろう。
猗窩座は自身最強の血鬼術を、炭治郎だけではなくその場に駆けつけた禰豆子達や、戦いの行方を見守っていた煉獄に向けて放つ。猗窩座の終式は、全方向に通常より速度と威力をさらに高めた百発の乱れ打ちをほぼ同時に放つ血鬼術。それが、前方にのみに向けて放たれた。
さすがの炭治郎も黒死牟を相手にしながら、限界間近の状態で全員を守りながら捌くのは不可能……いや、炭治郎はそれでも止まらないのだろう。
「絶対ッ――守る!!
（心を熱く…明るく照らせ…日の神様になりきるんだ！

飛天御剣流は絶対に負けない！）」
「なッ!?
（は、速さが更に増した!?
上弦の壱に負わされた傷は深いはずだ！
そ、それにどういうことだ…竈門炭治郎の闘気が…完全に消えた!?）」
炭治郎はそれまで以上の神速を発揮し、猗窩座の最強の血鬼術をも全て斬り伏せるのである。
「！
（い、いかんッ、ここは陽光が差す！逃げなくては！）」
そして、炭治郎の背後から太陽の光が差し込んでくるのだ。その様はまるで、炭治郎が太陽を引き連れてきたかのようで…。
太陽を前に、黒死牟も猗窩座も取る行動は決まっている。恥も外聞もない。武士、武道家であることも関係ない。これまで多くの人間を喰らい、強大な力を持った二体の鬼ですら、太陽を前にしたら何もできない塵芥。
頭に過ったのは”撤退”の二文字のみ。
「あ！
アイツら逃げやがるぞ!!」
「おッ、おい!?待て伊之助!!」
その場から森の方向に全力で逃走する黒死牟と猗窩座。それに驚き、あとを追おうとする伊之助と、その伊之助を止めようと動く善逸。伊之助はきっと、ここで逃がしてしまっては炭治郎の努力が全て無駄になってしまうと思ってしまったのだろう。
「よせ…これ以上深追いするな、猪頭少年」
ただ、伊之助は煉獄杏寿郎によって止められてしまう。炎柱である煉獄ですら力の差を痛感し、今の己では頚を斬り落とせないと悟ったのだ。柱級の鬼狩りに成長したとはいえ、経験に乏しい伊之助では尚のこと……不可能だろう。
「た、炭治郎!?」
それに何より、今もっとも気にすべきことは、黒死牟との戦いで深

手を負った炭治郎だ。
「竈門少年！大丈夫か!?
…気を失っている。いかんな…呼吸で止血はしているが、かなり傷が深い」
「紋治郎！だ、大丈夫か!?」
だがきっと炭治郎は大丈夫なのだろう。
炭治郎を優しく包み込み照らす朝陽が、そう物語っている。

「むう！むうむう！」
「禰豆子ちゃん落ち着いて！
炭治郎はきっと大丈夫だから！」
無限列車で起きた鬼狩り達と鬼達の大決戦……無限列車に巣食っていた下弦の壱の討伐は果たすことができたが、その後現れた上弦の壱と上弦の参の討伐は果たせなかった。
しかし、無限列車の乗客達は誰一人として喰われることなく、無事に守り抜くことに成功した。
これは間違いなく、鬼狩り達の勝利である。
「炭治郎…大丈夫だよな？」
「竈門少年はきっと大丈夫だ猪頭少年。
彼は強いからな！」
そして、無限列車の任務に就いていた鬼狩り達は現在、鬼殺隊の治療所”蝶屋敷”にいる。
蝶屋敷では今、重傷者一名――竈門炭治郎の緊急手術を胡蝶しのぶが行っているところだ。
上弦の壱と上弦の参との戦いで深い傷を負った炭治郎は、上弦達が夜明けと共に撤退した後に気を失い倒れてしまった。

無理もない。寧ろよく、上弦を相手に四肢の欠損すらなく夜明けまで戦い抜いたものである。
ただ、禰豆子達は己の無力さを痛感するばかりで、炭治郎の手術が終わるのを落ち着きなく待っていることしかできずにいた。
「本当に凄い人ですね…炭治郎くんは」
「胡蝶!!」
すると、炭治郎の手術を終えたしのぶが禰豆子達のもとに姿を現した。
「手術は無事に成功しました。
傷は深く、血を流しすぎていましたが、さすがの生命力です。炭治郎くんならすぐに回復するでしょう。
禰豆子さん、安心してください。あなたのお兄さんはちゃんと生きてますよ」
しのぶは炭治郎が無事であることを告げ、禰豆子達を安心させ、一番不安だったであろう禰豆子の頭を優しく撫でている。もっとも、しのぶも蝶屋敷に運ばれてきた炭治郎を目にした際は、珍しく動揺していたのだが、命を救う医者としてすぐに気持ちを切り替え、炭治郎の手術に集中し……しのぶは無事に炭治郎の手術を終えてくれたのである。
「よ、よかった…俺…今回ばかりは炭治郎が死んじゃうんじゃないかって…」
「三太郎が死ぬわけねーだろ!」
敵は上弦の鬼が二体。
善逸が最悪の結果を思い浮かべてしまったのも仕方ない。だが、それでも伊之助が炭治郎ならばと思っていたのは、炭治郎を誰よりも信頼しているからなのだろう。
「それしても…上弦の参だけではなく、上弦の壱まで。
二体の上弦の情報を得ることができたのは大きいですね。炭治郎くんでなければ不可能だったでしょう」
「その通りだ!
俺は竈門少年と上弦の戦いを見て、己の無力さを痛感した!今の俺

では上弦には勝てない！だが、俺は決して諦めない！竈門少年は俺に進むべき道を示してくれた！だから俺は強くなり、上弦を倒す!!」
炭治郎と上弦の戦いが鬼狩り――鬼殺隊に与えた情報はあまりにも大きい。その反面、最強の上弦の力が公となったことで、勝てるはずがないと思ってしまった鬼狩りは少なくないはずだ。その反面、触発された者もいる。
炭治郎と上弦の戦いを目の当たりにした炎柱・煉獄杏寿郎はその内の一人だ。彼は心を燃やし、これまで以上に鍛練に励み、更なる強さを得るはずだ。
「緊急で柱合会議が開かれるはずです」
「そうだな」
上弦という嵐は去った。
だが、これはまだ序章にすぎない。これから訪れるであろう大きな嵐の…。

☆☆☆☆☆

竈門炭治郎は夢を見ていた。
竈門一族の御先祖様の夢だ。
「俺は縁壱の親友――比古清十郎だ。縁壱から、お前さん達の話を以前聞いたのを思い出してな。もしかしたら、ここに縁壱が来たのではないかと思ったのだが…」
戦国時代を生きた竈門一族の御先祖様……竈門炭吉のもとに、一人の男が現れた日の夢である。
そして、その男こそが”飛天御剣流”を生み出した初代・比古清十郎だ。
この夢は、比古清十郎が飛天御剣流を完成させるよりも前の出来事。
「ああ、安心していい。
俺は縁壱を追放した鬼殺隊とは関係を絶った身。今はただの流浪人（るろうに）で、縁壱（親友）を探す者だ」

竈門一族の御先祖が、初代・比古清十郎とも接点があったことを証明する夢――記憶の遺伝だ。
初代・比古清十郎は、継国縁壱と同時期に鬼殺隊に加わり、共に切磋琢磨し、”呼吸術”を昇華させ、剣士の実力向上に尽力した戦国時代最強の鬼狩りの一人。
”日柱”継国縁壱と共に多くの鬼を狩り、恐れられた”龍柱”だったのだそうだ。
日柱と龍柱。彼らは鬼殺隊最強の双剣とまで謳われ、恐れられていたのだという。
だが、鬼殺隊はとある理由から双剣の一振り――継国縁壱を追放してしまった。その愚行が、もう一振りすらも手放すことになると知らずに…。
後に完成する飛天御剣流が、どの権力、どの派閥にも属さない自由の剣としてあり続けるのは、実は継国縁壱の追放処分が深く関係しているのである。
記憶の遺伝を見た竈門炭治郎は、竈門一族と初代・比古清十郎の思わぬ繋がりを知り、驚くことだろう。その一方で、巡り巡って炭治郎が飛天御剣流とヒノカミ神楽の両方を会得したのは偶然ではなく、きっと運命だったのだろう。

時は少々遡り……太陽の光が一切届かぬ暗い洞窟にて…。
「上弦の壱…あのガキは…竈門炭治郎はいったい何者なんだ…奴は至高の領域に至っているのか?」
「竈門炭治郎…奴は恐らく…始まりの呼吸…と…戦国時代…最強…の…鬼狩り…と…恐れられた…龍柱の御技…その二つ…を…受け継い

で…いる」
竈門炭治郎と死闘を繰り広げ、夜明けの到来を理由に撤退した上弦の壱・黒死牟と上弦の参・猗窩座が敗北を喫した鬼狩りについて語らっている。
遭遇した鬼狩りを悉く殺し、誰一人として逃したことがない最強の鬼達が唯一、撤退を余儀なくされた鬼狩り――竈門炭治郎。仮に、夜明けの到来まで時間に余裕があったとしても、黒死牟は刺し違えていた可能性が高いが、猗窩座は葬られていた可能性が高い。
始まりの呼吸の鬼狩り(日柱)と、戦国最強と謳われた鬼狩り(龍柱)を知る黒死牟にとっては、戦国時代以来数百年ぶりの屈辱であり、猗窩座にとっては初めての屈辱なのではなかろうか…。人間を下等種族と蔑んでいる分、余計に屈辱のはずだ。
「忌々しい…存在だ。
必ずや…葬り去らねば…ならない」
だからこそ、黒死牟と猗窩座は今回の敗戦を深く心に刻む。そして、更なる強さを求めこれまで以上に研鑽し、高みへと昇るのだろう。
だが、黒死牟と猗窩座は気付いてはいない。真の高みへと昇ることなどできないことを…。

☆☆☆☆☆

無限列車の一件から一週間…。
「炭治郎…目が覚めて良かった…本当に良かった」
「炭治郎くぅぅぅん、死んじゃうんじゃないないかってッひぐッ、良かったぁぁぁ!!」
竈門炭治郎は、一週間後に意識を取り戻した。
「心配かけてごめん。
けど、俺はもう大丈夫」
目が覚めた炭治郎の右手を優しく握り締め、一筋の涙を流しながら自身の想いを告げる栗花落カナヲと、すがりつくように左手を握り締め大号泣する”恋柱”甘露寺蜜璃に優しい笑みを向けているが、とて

も一週間の昏睡から目覚めたばかりとは思えない……炭治郎の人外ぶりは健在だ。寧ろ、上弦の鬼達との戦いで増しているかもしれない。
我妻善逸や嘴平伊之助は比較的軽傷であったこともあり、すでに鬼殺隊士として任務に出ているそうだ。無論、”炎柱”煉獄杏寿郎もである。

☆☆☆☆☆

三日後。
炭治郎はまだ完全に傷も癒えぬなか、蝶屋敷の主人である胡蝶しのぶに置き手紙を残し、自身の拠点でもあり、心の拠り所である珠世のもとへ戻っていた。
上弦の鬼について話す為だろう。
しかし……。
「た、珠世…さん？
あ、あの…」
「お願いです…少しだけ…あなたの温もりを感じさせてください。炭治郎さんが無事で本当に良かった。もう二度と…お会いできないかと…鬼殺隊の現当主からお手紙を頂き、あなたの状態を知った時…心臓が止まるかと」
冷静な珠世がすがりつく姿に、炭治郎は動揺している。
それと同時に珠世を心配させたことを痛感し、炭治郎はこの状況を受け入れ、彼女を優しく抱き締めた。
「ご心配をおかけしました。
それから…ただいま、珠世さん」
「…！
おかえりなさい、炭治郎さん」
生きているからこそ感じることができる温もり。
炭治郎と珠世は、互いにその温もりを感じ合っている。
ただ、炭治郎はしばらくの間、行動を自粛させられるはずだ。傷が

完治するまでの間は、鬼殺など以ての外だと。一週間も昏睡状態にあったのだから無理もない。そもそも、一週間の昏睡から目覚め、その三日後にこうして動けているのがおかしいのだが…。